

大 和 田 遺 跡
寺 山 (3) 遺 跡
平 窪 (1) 遺 跡
平 窪 (2) 遺 跡
伝 法 寺 館 跡

—十和田バイパス建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

1998年3月

青森県教育委員会

序

青森県教育委員会は、十和田バイパス線建設事業に伴い、平成4年度に路線内に所在する埋蔵文化財の保護を目的として、踏査と試掘調査を実施しました。その結果にもとづき、平成8年度に路線内に所在する大和田遺跡・寺山(3)遺跡・平窪(1)・(2)遺跡・伝法寺館跡、5遺跡の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、縄文時代早期の落とし穴をはじめ縄文時代中期の住居跡、奈良時代の集落跡、中世末の館跡など多時期にわたる遺構と遺物を検出いたしました。

本報告書は、この発掘調査の成果をまとめたものであり、考古学・歴史学のみならず、学校教育・社会教育においても活用され、文化財の保護活動の普及および啓蒙に役立てば幸いに存じます。

最後ではありますが、調査の実施と報告書の作成にあたり関係各位から御協力、御指導賜りましたことに対し、心から感謝の意を表します。

平成10年3月

青森県教育委員会
教育長 松 森 永 祐

例 言

1 本報告書は、青森県教育委員会が平成8年度に実施した十和田市バイパス建設事業に伴う、大和田遺跡・寺山(3)遺跡・平窪(1)・(2)遺跡・伝法寺館跡の発掘調査報告書である。

2 各遺跡所在地及び遺跡番号

大和田遺跡 十和田市大字相坂字長漕217-48・外 (県遺跡番号06059)

寺山(3)遺跡 十和田市大字伝法寺字寺山1-97・外 (県遺跡番号06092)

平窪(1)遺跡 十和田市大字伝法寺字平窪76-14・外 (県遺跡番号06089)

平窪(2)遺跡 十和田市大字伝法寺字平窪68-15・外 (県遺跡番号06090)



伝法寺館跡 十和田市大字伝法寺字上传法寺41-3・外 (県遺跡番号06052)

3 本報告書の執筆にあたっては、主に序説・第1編・第3編・第5編を小田川哲彦と新山隆男が、第2編・第4編を坂本真弓と小山浩平が分担した。本文の執筆は執筆者名を文末に明記した。依頼原稿については文頭に執筆者名を付した。

4 本報告書における挿図等の用例は次のとおりである。

1) 挿 図 挿図番号は、序説及び各編ごと(各遺跡ごと)の通し番号とした。

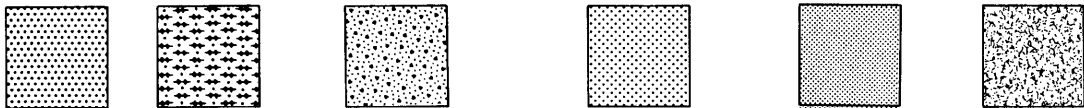
2) 縮尺率 縮尺率は遺構・遺物の大きさや性格により適宜決定した。選択した縮尺率については、スケール脇に示した。

3) ケ バ 遺構内の傾斜及び落込みは  で示した。
木根等の攪乱及び後世の削平地、崩落は  で示した。

4) 小 穴 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・竪穴建物跡等の小穴には、P番号(P1...)を付した他、検出面及び底面からの深さをカッコ内に表示した。

5) 挿図中で使用したスクリーントーンは次のとおりである。

焼 土 白頭山火山灰 十和田A火山灰 土師器内面黒色処理 陶磁器鉄釉 陶磁器トチン痕



これ以外のスクリーントーンの表示は、その用例を同図中に示した。

6) 土 層 自然堆積層番号はローマ数字を、遺構内の堆積層番号は算用数字で表示した。

7) 礫石器の実測図については、擦り・敲きの使用痕跡が顕著な部分をドットで表示した。

8) 写真図版中の個々の遺物番号は、挿図番号と一致する。(第15図1は→15-1と表示)

5 本調査及び本報告書の作成にあたっては、下記の機関並びに諸氏からご協力・ご教示を得た。

(順不同、敬称略)

中新田町立東北陶磁文化館、仙台市博物館、出光美術館、瀬戸市埋蔵文化財センター

金沢陽、藤沢良祐、原川英二、飯村均、高橋博志、本田泰貴、八木光則、室野秀文、宇部則保、

佐々木浩一、藤田俊雄、大野亨、工藤清泰、半沢紀、瀬川滋、長尾正義、田中寿明、古屋敷則雄、

鈴木徹、東正士、鈴木十志雄

目 次

序

例言

目次

挿図・目次

序 説 調査概要

第1章 調査要項	3
第2章 調査に至る経緯	4
第3章 調査経過	4
第4章 調査方法	9
第5章 遺跡周辺の地形と地質	11
第1節 大和田遺跡周辺の地質	11
第2節 寺山(3)・平窪(1)・(2)遺跡・伝法寺館跡周辺の地形及び地質	15

第1編 大和田遺跡

第1章 基本土層	18
第2章 検出遺構と遺物	19
第1節 竪穴住居跡	19
第2節 周 溝	38
第3節 土 坑	38
第3章 遺構外出土遺物	42
第1節 土師器	42
第2節 縄文土器	42
第3節 石 器	48
第4章 まとめ	52

第2編 寺山(3)遺跡

第1章 基本土層	59
第2章 検出遺構と遺物	60
第1節 竪穴住居跡	60
第2節 土 坑	70
第3節 掘立柱建物跡	80
第4節 溝 跡	81
第3章 遺構外出土遺物	82
第1節 縄文土器・弥生土器	82
第2節 石 器	90
第4章 まとめ	96

第3編 平窪(1)遺跡

第1章 基本土層	101
----------	-----

第2章 検出遺構と遺物	101
第1節 竪穴住居跡	101
第2節 土坑	103
第3節 焼土・炭化物	112
第3章 遺構外出土遺物	112
第1節 土師器・縄文土器・石器	112
第4章 まとめ	114
第4編 平窪(2)遺跡	
第1章 検出遺構	117
第1節 土坑	117
第2節 竪穴遺構	127
第3節 焼土	127
第4節 道跡	129
第2章 遺構外出土遺物	129
第1節 縄文土器	129
第2節 石器	135
第3章 まとめ	138
第5編 伝法寺館跡	
第1章 基本土層	142
第2章 検出遺構と遺物	143
第1節 削平地・段・斜面	143
第2節 掘立柱建物跡	144
第3節 竪穴建物跡	146
第4節 竪穴住居跡	154
第5節 溝跡	159
第6節 焼土	160
第7節 土坑	160
第3章 出土遺物	167
第1節 陶磁器	167
第2節 鉄・銅製品	177
第3節 銭貨	181
第4節 石器・石製品	183
第5節 その他の遺物	188
第4章 伝法寺館跡縄張りについて	189
第5章 まとめ	192
付章 炭素年代測定結果 報告書抄録	

挿 図 目 次

序 説

第1図	遺跡位置	2
第2図	大和田遺跡地形・路線	5
第3図	寺山(3)遺跡地形・路線	6
第4図	平窪(1),(2)遺跡, 伝法寺館跡地形・路線	7
第5図	大和田遺跡周辺の地質	13
第6図	平窪(1),(2)遺跡, 伝法寺館跡周辺の地質	14

第1編 大和田遺跡

第1図	遺構配置・基本土層	18
第2図	第1号竪穴住居跡(1)	20
第3図	第1号竪穴住居跡(2)	21
第4図	第1号竪穴住居跡(3)・カマド	22
第5図	第1号竪穴住居跡出土遺物(1)	23
第6図	第1号竪穴住居跡出土遺物(2)	24
第7図	第2号竪穴住居跡(1)	26
第8図	第2号竪穴住居跡(2)・カマド	27
第9図	第2号竪穴住居跡出土遺物(1)	28
第10図	第2号竪穴住居跡出土遺物(2)	29
第11図	第3号竪穴住居跡(1)	31
第12図	第3号竪穴住居跡(2)・カマド	32
第13図	第3号竪穴住居跡出土遺物(1)	33
第14図	第3号竪穴住居跡出土遺物(2)	34
第15図	第4号竪穴住居跡(1)	36
第16図	第4号竪穴住居跡(2)・カマド	37
第17図	第4号竪穴住居跡出土遺物	38
第18図	第1号周溝	39
第19図	土 坑(1)	40
第20図	土 坑(2)	41
第21図	第V層出土遺物分布	43
第22図	遺構外出土土器(1)	44
第23図	遺構外出土土器(2)	45

第24図	遺構外出土土器(3)	46
第25図	遺構外出土土器(1)	47
第26図	遺構外出土土器(2)	48
第27図	遺構外出土土器(3)	50
第28図	遺構外出土土器(4)	51
第29図	土師器の集成(1)	53
第30図	土師器の集成(2)	54

第2編 寺山(3)遺跡

第1図	遺構配置	58
第2図	基本土層	59
第3図	第1号竪穴住居跡	61
第4図	第1号竪穴住居跡出土遺物(1)	62
第5図	第1号竪穴住居跡出土遺物(2)	63
第6図	第2号竪穴住居跡・出土遺物	64
第7図	第3号竪穴住居跡・出土遺物	66
第8図	第3号竪穴住居跡出土遺物	67
第9図	第4号竪穴住居跡	68
第10図	第5号竪穴住居跡	69
第11図	第5号竪穴住居跡出土遺物	70
第12図	土 坑(1)	71
第13図	土 坑(2)・出土遺物	73
第14図	土 坑(3)・出土遺物	75
第15図	土 坑(4)・出土遺物	76
第16図	土 坑(5)・出土遺物	77
第17図	土 坑(6)	79
第18図	土 坑(7)出土遺物	80
第19図	掘立柱建物跡	81
第20図	遺構外出土土器(1)	83
第21図	遺構外出土土器(2)	84
第22図	遺構外出土土器(3)	85
第23図	遺構外出土土器(4)	87
第24図	遺構外出土土器(5)	89
第25図	遺構外出土土器(1)	91
第26図	遺構外出土土器(2)	92

第27図	遺構外出土石器(3)……………	93
第28図	遺構外出土石器(4)……………	94
第29図	落とし穴配置……………	97

第3編 平窪(1)遺跡

第1図	遺構配置、平窪(1),(2)基本土層…	100
第2図	第1号竪穴住居跡・出土遺物…	102
第3図	土坑(1)……………	104
第4図	土坑(2)……………	107
第5図	土坑(3)……………	108
第6図	土坑(4)……………	109
第7図	土坑(5)……………	111
第8図	遺構外出土遺物……………	113

第4編 平窪(2)遺跡

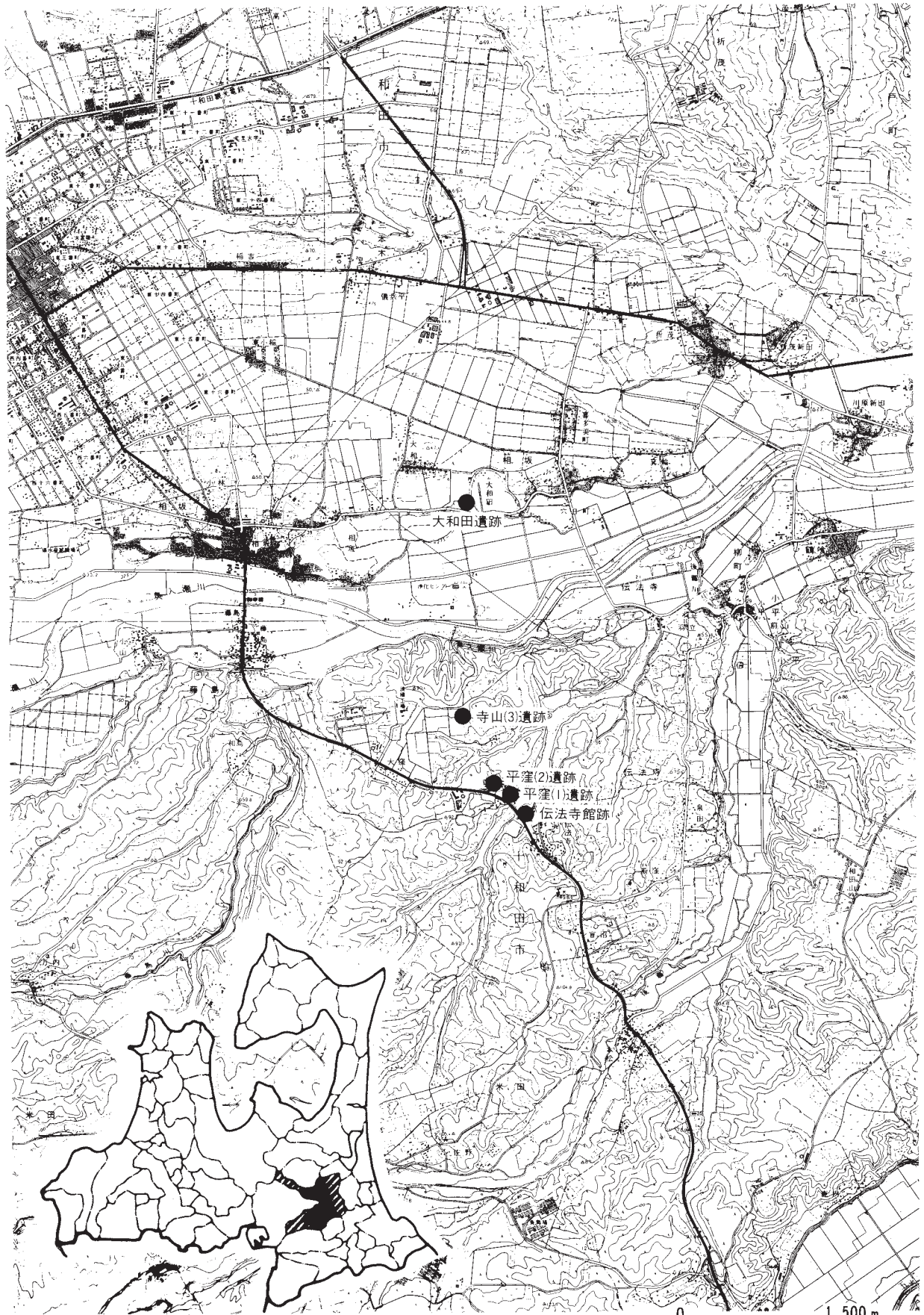
第1図	遺構配置……………	116
第2図	土坑(1)……………	118
第3図	土坑(2)……………	120
第4図	土坑(3)……………	122
第5図	土坑(4)……………	124
第6図	土坑(5)・竪穴遺構・焼土…	125
第7図	土坑出土遺物……………	126
第8図	道跡……………	128
第9図	遺構外出土石器(1)……………	130
第10図	遺構外出土石器(2)……………	132
第11図	遺構外出土石器(3)……………	134
第12図	遺構外出土石器(1)……………	136
第13図	遺構外出土石器(2)……………	137

第5編 伝法寺館跡

第1図	遺構配置、地形……………	140
第2図	調査区内土層(1)……………	141
第3図	調査区内土層(2)……………	142
第4図	掘立柱建物跡……………	145
第5図	竪穴建物跡(1)……………	147
第6図	竪穴建物跡(2)……………	149

第7図	竪穴建物跡(3)……………	151
第8図	竪穴建物跡(4)……………	153
第9図	竪穴建物跡(5)……………	154
第10図	第1号竪穴住居跡……………	155
第11図	第1号竪穴住居跡 出土遺物、その他土師器……………	156
第12図	第2号竪穴住居跡……………	157
第13図	第2号竪穴住居跡 出土遺物、その他須恵器……………	158
第14図	第1号溝跡……………	159
第15図	土坑(1)……………	161
第16図	土坑(2)……………	164
第17図	土坑(3)……………	166
第18図	舶載陶磁器(1)……………	168
第19図	舶載陶磁器(2)……………	169
第20図	舶載陶磁器(3)……………	170
第21図	国産陶磁器(1)……………	171
第22図	国産陶磁器(2)……………	172
第23図	国産陶磁器(3)……………	173
第24図	国産陶磁器(4)……………	174
第25図	国産陶磁器(5)……………	175
第26図	水滴・埴塼……………	176
第27図	鉄製品(1)……………	178
第28図	鉄製品(2)……………	179
第29図	鉄製品(3)……………	181
第30図	銭貨(1)……………	182
第31図	銭貨(2)……………	183
第32図	遺構内出土石器類(1)……………	184
第33図	遺構内出土石器類(2)……………	186
第34図	遺構外出土石器類(1)……………	187
第35図	遺構外出土石器類(2)……………	188
第36図	伝法寺館縄張り図……………	190

序説 調査概要



第1図 遺跡位置

(S=1/5万)

第1章 調査要項

1 調査目的

十和田バイパス建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する大和田遺跡・寺山(3)遺跡・平窪(1)遺跡・平窪(2)遺跡・伝法寺館跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

- | | |
|------------|--|
| 2 調査委託者 | 建設省青森工事事務所 |
| 3 調査受託者 | 青森県教育委員会 |
| 4 調査担当機関 | 青森県埋蔵文化財調査センター |
| 5 調査協力機関 | 十和田市教育委員会、上北教育事務所 |
| 6 遺跡名及び所在地 | 大和田遺跡 (青森県遺跡台帳番号 06059)
十和田市大字相坂字長漕217-48、外
寺山(3)遺跡 (青森県遺跡台帳番号 06092)
十和田市大字伝法寺字寺山1-97、外
平窪(1)遺跡 (青森県遺跡台帳番号 06089)
十和田市大字伝法寺字平窪76-14、外
平窪(2)遺跡 (青森県遺跡台帳番号 06090)
十和田市大字伝法寺字平窪68-15、外
伝法寺館跡 (青森県遺跡台帳番号 06052)
十和田市大字伝法寺字上传法寺41-3、外 |

7 調査対象面積及び調査期間

大和田遺跡 =1,000平方メートル・平成8年5月7日から6月28日まで
寺山(3)遺跡=5,800平方メートル・平成8年5月7日から7月31日まで
平窪(1)遺跡=6,200平方メートル・平成8年7月1日から9月30日まで
平窪(2)遺跡=8,300平方メートル・平成8年8月1日から11月1日まで
伝法寺館跡 = 900平方メートル・平成8年10月1日から11月1日まで

8 調査参加者

調査指導員	市川 金丸	青森県考古学会会長	(考古学)
調査協力員	小野寺一男	十和田市教育委員会教育長	
調査員	小山 陽造	国立八戸工業高等専門学校教授	(分析科学)
	松山 力	八戸市文化財審議委員	(地質学)
	七崎 修	元八戸北高等学校教諭	(地質学)
	赤沼 英男	岩手県立博物館専門学芸調査員	(分析科学)
	小山 彦逸	七戸町教育委員会	(考古学)

9 調査担当者

青森県埋蔵文化財調査センター
調査第三課長 大湯 卓二
大和田遺跡・平窪(1)遺跡・伝法寺館跡

調査第三課主事 小田川哲彦
同 課主事 新山 隆男
調査補助員 佐藤 研、齊藤 司
川村真樹子、坂本ゆかり

寺山(3)遺跡・平窪(2)遺跡

調査第三課主事 相澤 治
同 課主事 田澤 賢治
調査第一課主事 坂本 真弓
調査補助員 高橋 渉、伊藤 理絵
小山 愛、佐藤 公子

第2章 調査に至る経緯

平成3年度に、十和田市街地を縦断する国道4号線の緩和及び周辺市町村へのアクセスを目的に計画された十和田バイパス建設事業に先立ち、計画路線内に所在する遺跡の有無について、建設省青森工事事務所より青森県教育委員会に調査の依頼があった。

県教育委員会文化課は、依頼により計画路線内に、大和田遺跡・寺山(3)遺跡・平窪(1)遺跡・平窪(2)遺跡・伝法寺館跡の5遺跡の所在を確認した。

当該5遺跡及び計画路線について、両者で協議を重ね、工法対応等での保存処置が検討されたが、事業の進捗及び国道4号線への接続等の要因により、計画路線の変更は不可能であった。

このため、本事業により破壊される恐れのある、これらの遺跡について関係機関との間で協議した結果、発掘調査を実施し、記録保存することで協議が整った。

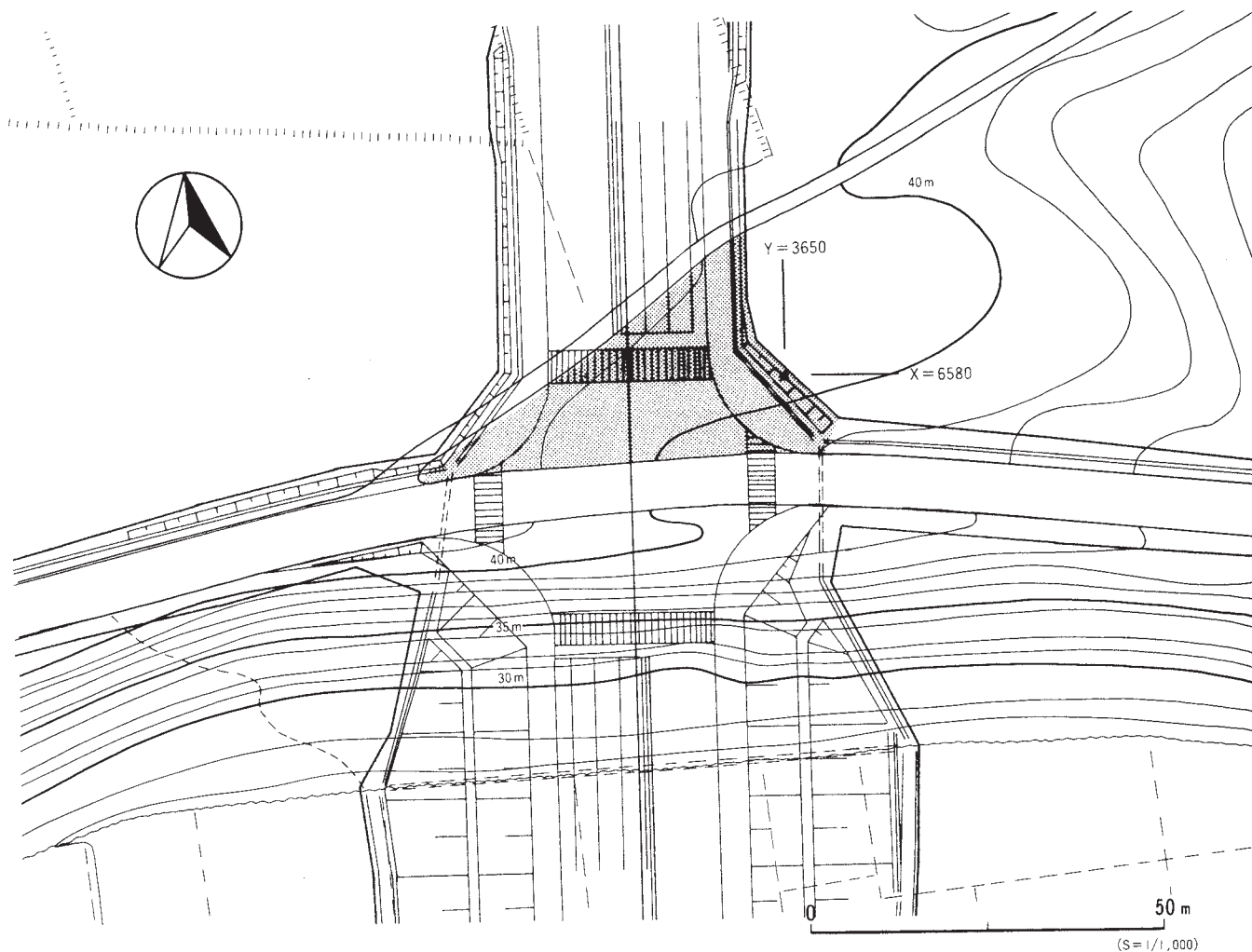
第3章 調査経過

発掘調査に先立ち、平成4年度に大和田遺跡と平窪(2)遺跡の試掘調査が県教育委員会文化課により実施された。また、平成7年度には、発掘調査に先行して、手順及び調査環境の状況確認のため、各遺跡を踏査した。

青森県埋蔵文化財調査センターは、これら5遺跡の発掘調査に2チームを充て、十和田市教育委員会に十和田市内から約90名の発掘作業員の確保をお願いした。当センターは、平成8年4月18日に雇用説明会を実施し、各遺跡について、上記職員配置で発掘調査を開始した。

大和田遺跡

5月7日器材等搬入して調査を開始した。調査区内には、雑木や廃車などの粗大ゴミが放置されており、調査区内の環境整備に数日を要した。



第2図 大和田遺跡地形・路線

本遺跡は、大規模な集落遺跡として知られていたが、試掘調査の結果では、開田耕作により、そのほとんどが消滅したと報告されていた。そのため、環境整備作業と併行して、調査区内の数カ所に任意のトレンチを設定し、遺構と遺物等の遺存状態の確認に努めた。これにより、調査区のほぼ中央部に竪穴と思われる落ち込みを確認した。

5月13日からは、本格的に粗掘り作業に入り、調査区西端部に土坑を検出した。粗掘り作業と併行して遺構の検出作業を行ったが、第Ⅱ層の黒色土面では遺構の形状が判別し難く、第Ⅲ層面まで掘り下げで検出することとした。また、検出作業と併行してグリッドの設定を行った。

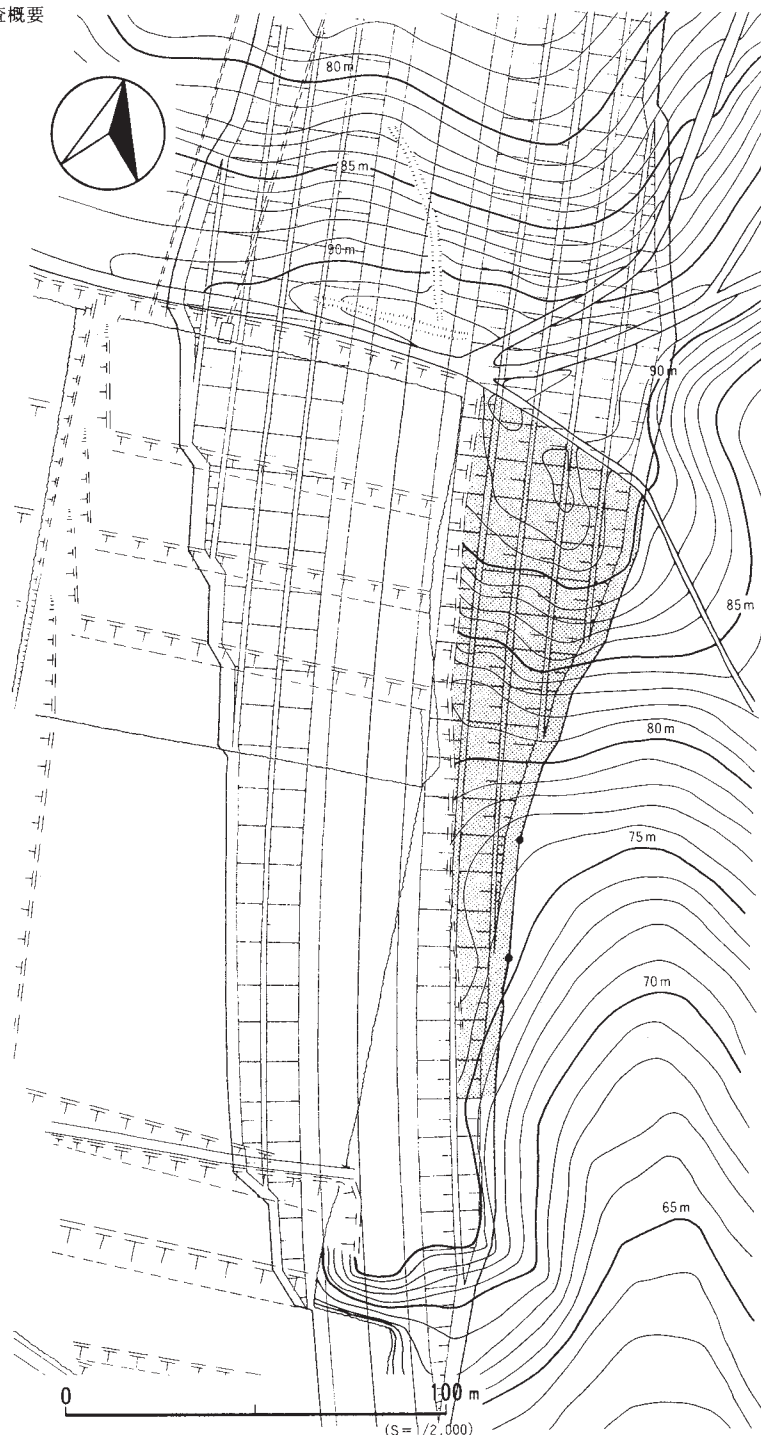
5月20日までには、粗掘り作業はほぼ終了し、4棟の竪穴住居跡と数基の土坑を検出した。翌日からは、各遺構の精査作業を行った。竪穴住居跡は、堆積土中に2種類の火山灰を介在させているほか、火災住居であることが判明し、精査に時間を要した。また、第Ⅲ層面で、縄文時代前期初頭の土器片の出土から、第Ⅳ層の中礫浮石層以下に縄文時代の遺物遺構が存在している可能性が強いと判断し、重機を用いて中礫浮石層を撤去することとした。

5月22日には、十和田地区5遺跡の発掘調査打合せ会議を行い、各遺跡の調査方法及び問題点等を調査員と原因者を交え協議し、遺構遺物の検出状態により、職員等を適時充てていくこととした。

6月中旬には、中礫浮石層の撤去がおわり、第Ⅴ層面の検出作業にはいった。第Ⅴ層から第Ⅵ層にかけて遺物は出土し、ドット図面を作成して取り上げたほか、数基の小土坑を検出した。

6月27日には大和田遺跡の調査を終了し、翌28日には調査器材等を平窪(1)遺跡へ移動した。

後日、農作業用道路の安全保護のため、重機を用いて調査区の一部を埋め戻した。



第3図 寺山(3)遺跡地形・路線

部まで、ほぼ直線状に等間隔に並んだ7基の土坑を検出した。

7月中旬には、竪穴住居群の東側にプラスチック状土坑群を検出した。7月30日までは、遺構の精査作業を終了して、遺跡の全景撮影等の写真撮影を行った。また、危険箇所の埋め戻しを行い、7月31日には、平窪(2)遺跡に調査器材等を移動し、寺山(3)遺跡の調査を終了した。

平窪(1)遺跡

本調査区内の一部は工場跡地であり、その基礎が残存していたほか、廃品等が埋もれた状態にあったため、調査開始日以前に重機を導入して撤去にあたった。工場の基礎は、予想以上に深く造られていたほか、国道沿いの部分は、削平されていることが判明した。

寺山(3)遺跡

5月7日器材等搬入して調査を開始した。調査区内全体に、雑草と雑木が密集しており、環境整備に数日を要した。その後、調査区全体にトレンチを設定して、土層及び遺構の確認作業を行った。これと併行してグリッドの設定等を行った。

5月中旬には、本格的な粗掘り作業に入り、調査区北側平坦部付近に炭窯と土坑を検出した。排土に関しては、調査区西側に排出することとし、法面直下の用水路が埋まらないように注意を払った。

6月に入り、斜面部に溝状土坑、調査区南側の平坦部分に溝跡を検出し、中旬には、縄文時代の竪穴住居跡を検出した。降雨が続き、急斜面地での作業であったため、粗掘り作業及び精査作業が遅れがちであった。下旬には、斜面部に中礫浮石層の落ち込みを検出し、精査の結果、縄文時代早期に比定される落とし穴であることが判明した。中礫浮石層は厚く、斜面部全体に広がっているため、重機を用いて撤去した。これにより、北側平坦部から斜面を挟んで南側平坦

7月1日から調査を開始した。調査区の環境整備を行いながら、削平地部分の遺構確認作業にあたったが、削平が大きく遺構等は検出されなかった。調査区内のこの削平地部分にプレハブを設置した。

本調査区は、南北を深い沢地に面し、西側は国道に分断されている。このため、調査の排土を置く場所を確保できないことから、グリッドラインを基準に調査区を二分して、一方を排土置き場とし終了次第、排土を移動して調査を行うこととした。調査は北側から行った。

7月中旬には、土坑を検出し、粗掘り作業と併行しながら遺構の精査を行った。

8月上旬には、調査区北側の調査を終了し、南側に仮置きした排土を重機を用いて移動した。移動には数日を要し、作業員については、8月1日から調査を開始した平窪(2)遺跡に合流させ、芝や雑木等の処理にあたらせた。お盆期間の作業休止後、本格的に調査区南側の粗掘り作業にはいった。

9月上旬には、南側傾斜地に縄文時代の住居跡を検出し、他に数基の土坑を検出した。中旬には、国道を挟んだ調査区側に入り、数基の土坑を検出し調査にあたった。

予想に反し遺構遺物が少なく、9月中旬頃にはほとんどの作業を終了した。このため、作業を隣接する伝法寺館跡の環境整備にあてた。地形測量及び完掘写真を撮影し、9月30日に調査を終了した。

平窪(2)遺跡

8月1日から調査を開始した。調査区内の雑草や雑木等の処理には、平窪(1)遺跡の作業員と合同であたった。調査は、市道伝法寺旧国道線より北側部分から行った。

平窪(1)遺跡と同じく排土置き場が調査区内に限られていたため、同様に、調査区を



第4図 平窪(1),(2)遺跡, 伝法寺館跡地形・路線

分割して調査を進めた。試掘調査から、堆積層が厚いことが判明していたため、粗掘り作業の時間短縮と軽減のため、当初から重機を導入して調査にあたった。北側の調査区からは、5基の土坑が検出され、検出順に精査を行った。

9月上旬には、市道の南側調査区の粗掘り作業に入った。南側調査区の西側の約半分は、5m程の厚さで盛土されており、この部分に使用中の電柱があったことから、調査には危険が伴うことが予想された。盛土の撤去には重機を集中的に導入してあたり、電柱と道路付近については、安全を考慮して調査から除外した。盛土については、本調査区と平窪(2)遺跡の間の沢地に、土が民地へ流失しないように柵を設置し処理した。中旬には、南側調査区に比較的集中して土坑が検出され精査におわれた。土坑の多くは、地震による地すべりのため底面付近からズレが生じていた。また、湧水も激しく精査には時間を要した。下旬には、本調査区の作業と併行して、北側調査区にトレンチを設定して中掘り層を掘り下げ、縄文時代早期のものと考えられる土坑を2基検出した。この土坑の検出により、早期の遺構遺物が拡がる可能性がでてきたため、トレンチを拡大して調査した。北側調査区からは土坑だけの検出であったが、南側調査区からは焼土跡と早期と前期初頭の遺物が出土した。

10月上旬には、北側調査区の調査を終了し、南側調査区に全力を傾けた。中旬には、遺構精査もほぼ終了し、一部補助員を伝法寺館跡の遺構精査に補充した。10月末日までには、全調査工程を終了し11月1日に、調査器材等を搬出し全日程を無事終了した。

伝法寺館跡

本調査区は小規模でありながら、雑草木の密集が甚だしかったため、平窪(1)遺跡の作業状況に合わせて、調査開始日以前にこれらを処理した。また、一部作業員を本遺跡に充て粗掘り作業を開始した。

10月1日から、全作業員により本格的に粗掘り作業を行った。粗掘り早々に、表土直下より現代のゴミ等と土師器や陶磁器が混在して出土した。翌日には、館跡の時期に新旧二時期あることが判明したほか、平安時代の遺構も遺存していることが判った。

調査区は狭長で国道4号線と平行してあるため、排土処理には、道路に流出しないように、掘り下げ及び移動には細心の注意を払った。本館跡北側の沢地に、館や他の時期に伴う遺構等が存在しないことをトレンチ調査により確認した後、この沢地部分を排土置き場とした。最終的には、斜面部の土を含めて、ベルトコンベアーを使用して集積した。

10月中旬には、館跡の新期面の調査を終え、その下から、竪穴遺構群を検出し精査に入った。遺構精査のほか、斜面部の堆積土撤去と排土移動にあわただしく、調査日数にも迫られていたため、遺構の精査作業が終了していた平窪(2)遺跡の補助員を本遺跡に充てた。図面作成等の精査作業は、調査終了日前日まで続いたが2チーム全力であたったことから、31日には全景写真を撮影し、危険箇所を埋め戻すことができた。11月1日に、調査器材等を搬出し全日程を無事終了した。

第4章 調査方法

各遺跡共に、グリッド法を用いた分層発掘を基本とした。

掘り下げについては人力を主体としたが、盛土および無遺物層と確認された層厚の部分については、重機を使用したほか、排土の移動と埋め戻しについても適時重機を使用した。

遺構検出は、各層ごとに注意を払ったが、形状を明確に把握するため、本来の掘り込み面より下げた時点で行った。各遺跡で異なるが、大半のものは中掘浮石層の上層面か中掘浮石層の下層面、基盤となるローム層面で検出した。

遺構精査は、検出順に番号を付した後、二分割及び四分割を基本とし土層観察後掘り下げた。堆積土が、遺構壁面や底面と明確に峻別できないものについては、サブトレンチを設けて確認した。図面の作成は1/20を原則とし、遺物の出土状態や遺構の性格等を加味し適宜1/10で作成した。地形図については、各遺跡の調査区範囲に合わせて任意の縮尺で作成した。

土層観察については、「新版標準土色帖」を用いて土色とマンセル記号を併記した。遺跡内の基本堆積土にはローマ数字を、遺構内堆積土については算用数字を付し表記し、同一層内で細分されるものについては、アルファベットを付した。基本土層の図面作成は、各遺跡で全体を把握した後に、適宜作成箇所を設定した。

遺物の取り上げは、グリッド単位で層ごとに、遺構内のものは堆積土及び床・底面ごとに分けて取り上げた。また、出土状態を把握するため、個別にドット図面を作成したものもある。

写真撮影には、35mmモノクローム・カラーリバーサルフィルムを用いて、同一アングルで同一コマ数を撮影した。

調査終了後、危険個所については埋め戻しを行った。調査中においても、深く掘り下がった遺構については、精査終了後に一部埋め戻した。

グリッド設定について

グリッドは、各遺跡の調査区の地形に合わせて設定した。20×20mの大グリッドに基づく4×4mの小グリッドを基準とし、20m単位に木杭を、4m単位にグリッドピンを用いて設定した。

また、寺山(3)遺跡を除く4遺跡については、遺構の記録に際して1グリッドをさらに1m単位で分割した測点を用いた。この測点は、調査区内に任意に設定した原点(N S-00・E W-00)から、東西南北の各方向(略号N・S・E・W)と、原点からの距離を示す数字を組み合わせで表記した。

N-20・W-20は、原点から北に20m、西に20mの地点を示す。

大和田遺跡

グリッドは、路線図から法定座標、X=65850、Y=36350の交点を求め、この点を基準に東西南北20mの大グリッドを設定し、さらに4mのグリッドを設定した。グリッドは、南から北へアルファベットを付し、西から東へ算用数字を付してこの組み合わせでD5・E10…等と呼称した。

作図用の測点は、基準点から西へ20mの地点である、調査区のほぼ中央に原点を設定した。

調査区内の標高点は、路線内にある工事用標高点から求め、必要に応じて移動して用いた。

寺山(3)遺跡

グリッドは、道路建設用幅杭のうち任意の2点を結んだラインを南北ラインの基本とした。このラ

インを基準に20m四方の大グリッドを設定し、さらに4m四方の小グリッドを設定した。グリッドは、北から南方向に算用数字を付し、東から西方向にアルファベットを付した。グリッドの呼称は、北東隅の交点を使用することとした。なお、グリッドの南北ラインは、N-1°-Eとなっている。

調査区内の標高点は、路線内にある工事用標高点から求め、調査区内の数カ所に移動して用いた。

平窪(1)遺跡

グリッドの設定にあたっては、路線の中心杭のうち、NO-20杭とNO-21杭の2点間を結んだ直線を南北方向の基準とし、これに直行する線を東西方向の基準とした。2点の杭の距離は20mあり、NO-21杭を東西南北の交点杭として、大グリッドを設定し、さらに小グリッドに分割した。グリッドの南北方向線は、真北よりおよそ35°西へ傾いている。グリッドは、東から西方向へアルファベットを付し、南から北方向へ算用数字を付して組み合わせて呼称した。作図用の測点は、NO-21杭から北へ20m・東へ20mの地点(L15グリッド南東杭)を原点に設定した。

調査区内の標高点は、国道4号線沿いにある水準点から求め、調査区内の数カ所に移動して用いた。

平窪(2)遺跡

グリッドと作図用測点は、隣接する平窪(1)遺跡から伸延して設定した。標高点も同じである。

伝法寺館跡

調査区が狭長地であり、路線図の縮尺率も大きかったため、路線幅杭を用いてグリッドを設定した。路線幅杭のNO-13.00杭とNO-14.00杭の2点間を結んだ直線を南北方向の基準とし、これに直行する線を東西方向の基準とした。2点の杭の距離は20mあり、小グリッドに分割した。作図用の測点原点は、NO-14.00杭に設定した。

調査区内の標高点は、平窪(1)遺跡より移動して用いた。

(小田川)

第5章 遺跡周辺の地形と地質

第1節 大和田遺跡周辺の地質

松山 力

1) 遺跡の立地と周辺の地形

遺跡の中心は三本木台地の南縁、十和田市西部の丘陵地帯東縁から、おおよそ10kmほど東に離れた、北緯40° 40′ 33″、東経141° 15′ 44″の地点にある。遺跡内は、起伏がほとんどない平坦地で、南縁は高度差十数mの段丘崖で画されている。

三本木台地は、天間林村の坪川沿岸から奥入瀬川沖積地北縁までの南北約18~20km、西方の丘陵地帯東縁から太平洋岸までの東西約24~26kmの地域である。主に十和田火山噴出の火砕流と、その水成再堆積物とが構成する広大な複合扇状地性火山灰台地で、三本木原あるいは三本木平とも呼ばれている。

三本木台地は、高位から低位に、天狗岱段丘、高館段丘、柴山段丘、折茂段丘、大和段丘、六戸段丘などで構成され、平坦面の保存がきわめて良好である。

台地は、坪川や、七戸川（高瀬川）とその支流の中野川、砂土路川などで分断され、南縁は奥入瀬川の沖積地で限られる。各河川に沿っては低平な沖積地が開けている。

第1図は、遺跡を中央に置いた、東西5.5km、南北4kmの範囲の地形区分図である。

遺跡の南縁を画する段丘崖の南側の地域は、南方約1kmを東に流れる奥入瀬川北側の沖積地で、遺跡を含む北側の地域は、最低位洪積段丘の大和段丘である。

遺跡周辺域の、奥入瀬川沿いの沖積地の幅はおおよそ1kmで、大和段丘とは高度差は14~18mの急傾斜の段丘崖で接するところが多い。沖積地は、下位面と上位の六戸段丘面とで構成され、その高度差は数m程度である。

奥入瀬川沖積地の南方には、標高70~95mの天狗岱段丘や55~70mの高館段丘に相当する起伏に富んだ丘陵地が広がっている。

西から最大幅2.3kmで東に延び、東方2.2kmの箕輪で沖積地に突き出す大和段丘の段丘面は、東西に延びる中軸部がわずかに高くなる程度の、おおむね平坦な段丘面で、目立つ起伏に乏しい。この北方には、箕輪の東側で奥入瀬川沿いの沖積地から分岐し、西方の十和田市街地まで溯る、幅300~800mの沖積地（六戸段丘面）を挟んで、折茂段丘が東西に横たわっている。大和段丘と折茂段丘の高度差は数mにすぎない。

2) 遺跡周辺の地質概要

遺跡周辺の基盤は、第三紀鮮新世、もしくは第四紀洪積世（更新世）前期の海成堆積岩類で、おもに半固結状態のシルト、砂、礫などの地層で構成される。

基盤の上には、火砕流や、その水成二次堆積物、ふつうの河川堆積物などの段丘堆積物がのり、これらを、それぞれの堆積に続く降下火山砕屑物や粘土質の褐色風化火山灰（いわゆるローム）が覆い、その上部は地表直下の黒色土類（腐植土）に漸移している。

三本木台地の段丘群は、被覆する火山灰や火砕流、あるいは河川礫などの段丘構成層の形成時期によって区分されている。

天狗岱段丘と高館段丘は、それぞれ天狗岱火山灰層以上、高館火山灰層以上をのせる段丘で、遺跡周辺での面高度（標高）はほぼ55m以上である。

柴山段丘は、厚さ10m以上の砂礫で構成され、上位には高館火山灰層中部の上半以上をのせている。一部地域では、高館火山灰層の中部上半に対比される奥入瀬火砕流などを構成層とするシラス段丘となっているところがある。

折茂段丘は、最大層厚10m以上の火山灰を基質（砂礫や鉱物粒を包み込む物質）とする砂礫層などで構成されている。中位に火砕流を挟むところも多く、火砕流とその再堆積層などで構成されるシラス段丘となっているところもある。火砕流は、高館火山灰層上部の大不動浮石流凝灰岩である。上位には、八戸火山灰層が不整合にのっている。

大和段丘は遺跡周辺を模式地とする段丘で、軽石粒を豊富に含む粗粒砂層を主とし、部分的にいちじるしく礫を含んでいる。ところによっては、折茂段丘同様に火砕流を挟み、火砕流の上位にその再堆積層がのっている。この火砕流は八戸浮石流凝灰岩にあたる。

黒色土層群には、中振浮石層や十和田b降下火山灰層、十和田a降下火山灰層、苫小牧火山灰層などが挟まれている。

中振浮石層は、粗砂～細礫大黄色軽石粒が密集した、十和田市域で厚さ20～45cmの崩れやすい火山灰層である。十和田市教委が調査中の十和田市寺上遺跡で大木1式土器や深瀬田式土器と見られる遺物が直下の土層から（未公表）、南郷村畑内遺跡で多量の円筒下層a式土器が直上の土層から出土しており、縄文時代前期前半に降下したものである。

十和田b降下火山灰は弥生時代初頭頃に降下したもので、砂状火山灰部層は十和田湖から20～30km以上離れた地域では確認しにくい、軽石部層はより遠方まで分布する。

十和田a降下火山灰はA.D.915年の降下とされ、遺跡周辺ではシルト様火山灰である。

苫小牧火山灰は、朝鮮半島基部の白頭山火山から、10世紀前半にもたらされたとされる火山灰で、遺跡周辺では粒度の細かい粉状火山灰として点在する。

3) 遺跡の層序

遺跡内の土層を、第2図のように、I～Ⅷまでの8層に区分した。

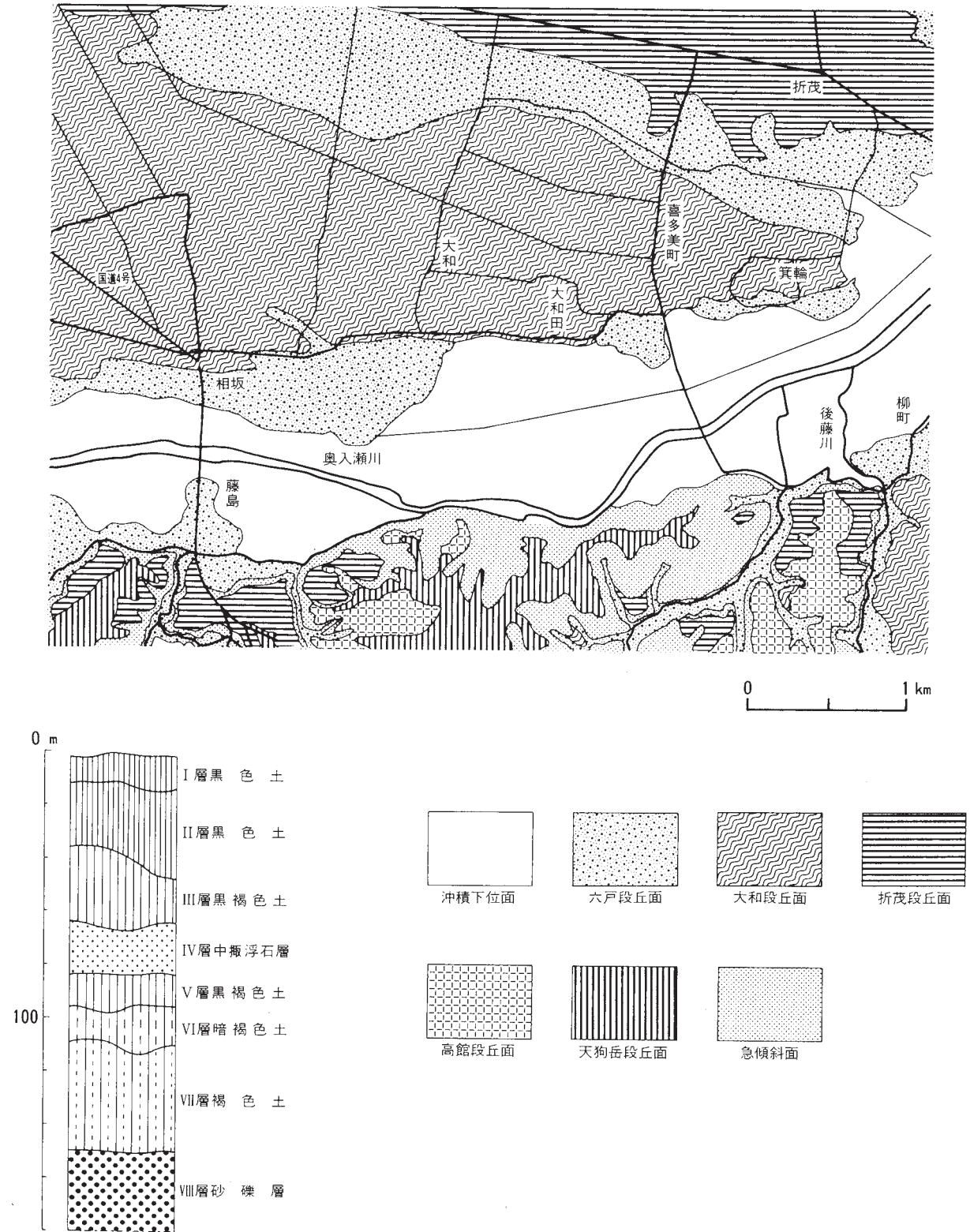
I層は表土層で、おもに厚さ10～15cmの黒色（10YR2/1）砂質土層である。

II層は、厚さ20～35cmの黒色（10YR1.7/1）土層で、粒径数mm前後の堅い灰白色（10YR8/1～8/2）ないし浅黄橙色（10YR8/3～8/4）軽石粒が散らばっている。この軽石粒は、十和田b降下火山灰に由来するものである。遺構などの小凹部を覆うII層中には、十和田a降下火山灰と苫小牧火山灰とが、レンズ状薄層や火山灰塊となって含まれている。

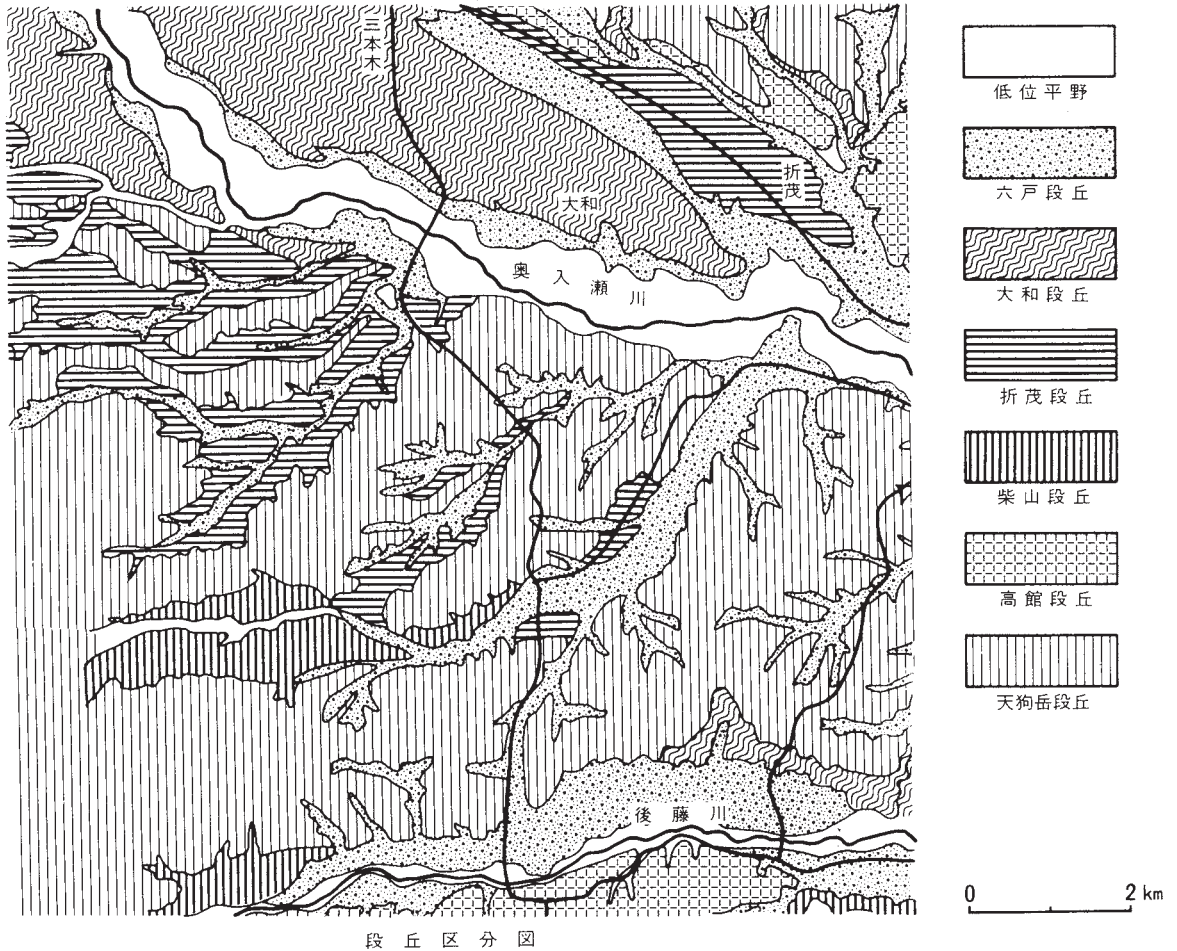
III層は、厚さ15～30cmの黒褐色（上半10YR2/2、下半10YR2/3）砂質土層で、下半部には多量の砂が混合した砂質の暗褐色（10YR3/3）土塊が、断続的に含まれている。含まれる砂は、下位の中振浮石からもたらされた軽石粒である。

IV層は、厚さ15～25cmの明黄褐色（10YR6/6～7/6）粗粒火山灰が密集する中振浮石層である。軽石砂の粒径は1～数mmで、膠結が進まず、崩れやすい。上部が、黒色土と混合した黒褐色土（10YR3/3）に漸移しているところがある。またところどころで黒褐色土が径数cm程度の柱状形態で、下底部や中程まで貫いているが、上部の土層の一部が植物の根跡に落ち込んだものであろう。

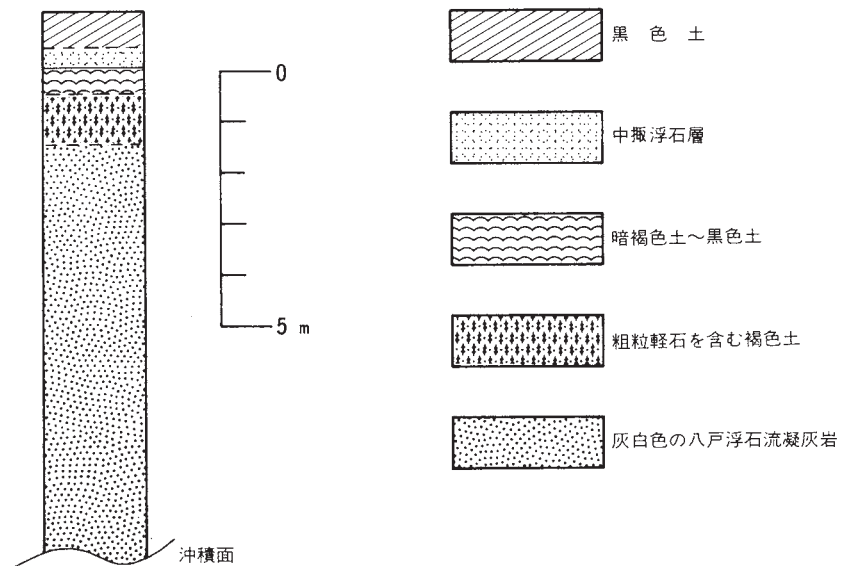
V層は、厚さ10～15cmの黒色（10Y R2/2）土層で、やや粘土質である。
 VI層は、厚さ10～20cmの暗褐色（上半10Y R3/3、下半3/4）土層である。
 VII層は、厚さ35～45cmの褐色（10Y R4/6）土層で、小礫が多量に混じっている。
 VIII層は、厚さ30cm以上の水成砂礫層で、粒径2～10mm（最大粒径は20mm程度）の円礫～半円礫を主とし、間隙を粗粒砂が充填している。



第5図 大和田遺跡周辺の地質



平窪(1)・(2)遺跡、伝法寺館跡周辺
地質柱状図



第6図 平窪(1),(2)遺跡,伝法寺館跡周辺の地質

第2節 寺山(3)・平窪(1)・(2)遺跡・伝法寺館跡周辺の地形及び地質

七崎 修

本地域は奥入瀬川中流の南側の段丘発達地帯で、上記遺跡は天狗岱段丘面上又はそれより低位の段丘への斜面上に位置する¹⁾。天狗岱段丘は青森県東部から岩手県北部にかけて広く発達する段丘中2番目に高い(古い)段丘で、主に十和田カルデラを噴出源とする第四紀火山灰層を数多く載せている²⁾。本段丘は形成時期が古い—最近の研究では16~20万年前に形成されたという³⁾—だけに開析が進み、面の保存はあまり良くない。開析谷は主要河川(七戸川、奥入瀬川、五戸川など)は必従的(地表の最大傾斜の方向に流れるもっとも一般的な谷)なのに対し、その支谷は適従的(基盤の地質構造に支配される谷)南北方向に流れるものが多い。なお、本地域では天狗岱段丘の構成層は見当たらない。

本地域の基盤は第三紀鮮新世に属する主に砂泥互層からなる斗川層とされているが⁴⁾、ここは模式地の三戸町斗川とは直線距離にして約25km離れており完全に対比されているわけではないので、今後“斗川層”と表記する。寺山(3)遺跡の北東約0.5kmの奥入瀬南岸の河床には“寺山の化石床”として知られる化石産地があり、そこから採集された貝化石には模式地の斗川層産との共通種が数種類ある⁵⁾。

ただし、近年化石による地層の対比には貝化石よりを利用するのが一般的である。上記“斗川層”の上には“野辺地層”(“斗川層”と同じ理由でこう表記する)が重なる。“野辺地層”は更新世前期に堆積した海成または汽水成の地層であるが、海拔約20kmの“寺山の化石床”から海拔約55kmまでの連続露頭のどこに両層の境界があるか意見が分かれている。平窪(2)遺跡の北側で海拔約70m前後の丘陵頂部には黒土層、火山灰層、軽石層の下に厚さ8m以上の交叉葉理(クロスラミナ)を持つ粗粒—極粗粒の淡褐色軽石質砂層があるが、これは寺山の連続露頭の最上部にある砂層に相当、またはその上に重なるものと思われる。

寺山(3)遺跡

本遺跡は奥入瀬川南岸の海拔90m前後の天狗岱段丘上からその南の海拔50m前後の六戸段丘への斜面上に位置する。深掘りではもっとも深いところでも高館火山灰層の最上部までしか達しなかったが、これは斜面上の下部へ行くに従って完新世火山灰層を含む黒土層とその下の八戸火山灰が厚くなるためである。

平窪(1)遺跡・平窪(2)遺跡

平窪(1)遺跡は、海拔52~57mの折茂段丘面上に、平窪(2)遺跡は海拔53~66mの天狗岱段丘上から折茂段丘への斜面上に位置する。

伝法寺館跡

本館跡は海拔40~56mの天狗岱段丘面上に位置する。この下には八戸浮石流凝灰岩(重鉱物の角閃石を含んでいたので大不動浮石流凝灰岩ではない。両者は岩相がよく似ているが、角閃石の有無で区別できる⁶⁾)があり、一見して火砕流台地と見まがうが、これは約1.3万年前に十和田カルデラから噴出し、平窪(1)遺跡がある台地との間の谷を埋めた同岩が、その後の浸食を免れて谷壁に残留したもので、壁のすぐ奥には天狗岱火山灰層とその上の火山碎屑物層が存在する⁷⁾。館跡北側の斜面壁では、上から厚さ約70cmの黒土層、厚さ約40cmの中振浮石層、厚さ約50cmの暗褐色~黒色土層、厚さ約1mの粗粒軽石を含む褐色土層、厚さ約8mの八戸浮石流凝灰岩の順に堆積している。

[参考文献]

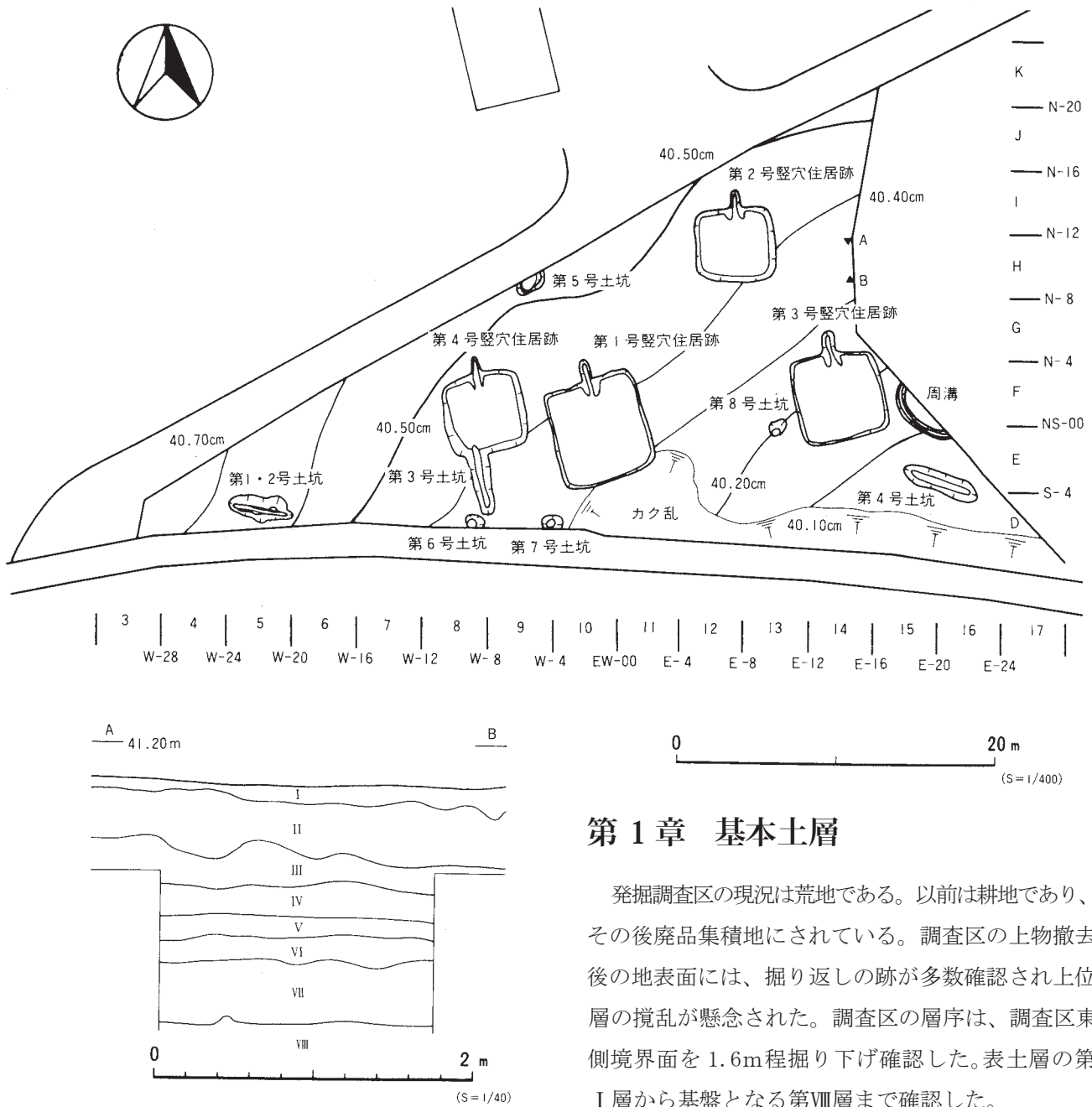
- 1) 中川久夫 1967 「南部中央地区地質調査報告書」 東北農政局
- 2) 松山 力 1983 「八戸の地質、文化財シリーズ第24号」 八戸市教育委員会
- 3) 宮内崇裕 1985 「上北平野の段丘と第四紀地殻変動」 『地理学評論』58-8
- 4) 鎌田耕太郎・秦 光男・久保和也・坂本亨 1991 20万分の1地質図「八戸」、地質調査所
- 5) 新戸部隆 1975 上北地方に分布する野辺地層の地質および古環境
昭和50年度青森県三沢高等学校研究紀要
- 6) 松山 力 1989 青森県南東部・岩手県北部の段丘区分『日本の地質2「東北地方」』
共立出版株式会社
- 7) 大地昭二・中川久夫 1979 「1978年度地質調査報告書」東北農政局計画部

註：文部省の学術用語集地学編（1984）では“pumice”の訳として「軽石」のみを挙げている。しかし、本報告では同書出版以前の論文で「浮石」を使用している場合は、先取権を尊重しそのままとした。

第1編 大和田遺跡



精査作業状況(北から)



第1章 基本土層

発掘調査区の現況は荒地である。以前は耕地であり、その後廃品集積地にされている。調査区の上物撤去後の地表面には、掘り返しの跡が多数確認され上位層の攪乱が懸念された。調査区の層序は、調査区東側境界面を1.6m程掘り下げ確認した。表土層の第I層から基盤となる第VIII層まで確認した。

以下に各層序について記述する。

第I層 10Y R 2/1~2/2 黒色土：表土層である。層厚は10cm~20cmである。調査区内に多数の攪乱があり深いもので1m近くにおよぶ。中央部にはやや広範囲にみられる。この攪乱層については、I b層およびI c層と表記している。

第II層 1.7/1 黒色土：砂質で粘性に乏しい。灰白色岩粒(10Y R 8/2)がまばらに散る。層厚は30cm~60cmあり、III層との層理面は起伏がある。古代(奈良時代)の遺構の掘り込み層である。

第III層 10Y R 3/2 黒褐色土：層厚は10cm~30cmである。上半部に黒褐色土塊(10Y R 2/3)が、下半部に暗褐色土塊(10Y R 3/3)が断続する。下方が明るく砂質である。遺構精査面である。

第IV層 10Y R 7/6~7/7 明黄褐色砂質土：中撒浮石層。腐植土が混合し部分的に浮石砂塊が断続する。

第V層 10YR 2/2 黒色土：層厚は10cm～20cmである。上方に浮石粒が散在する。縄文土器包含層、縄文期遺構検出面である。

第VI層 10YR 3/3～3/4 暗褐色土：層厚は10cm～15cmである。VII層との層理面にはやや起伏がある。下方が明るく、2mm～1cm大の礫を混入する。本層以下は無遺物層である。

第VII層 10YR 4/6 褐色土：砂礫質で粘性に乏しい。

第VIII層 10YR 7/8 明黄褐色砂礫層

第2章 検出遺構と遺物

概 要

本遺跡は、奥入瀬川北岸の三本木台地に立地する。調査区は、奥入瀬川の沖積地からおよそ15mの比高差のある遺跡の南端部分にあたり、地形的にはほぼ平坦である。遺跡は大規模な集落跡として周知されていたが、開田耕作及び県道建設により大きく破壊されている。その影響は、調査区の随所に見られ、特に南側に広範囲に及んでいる。その深さは第IV層まで達していた。

調査により、竪穴住居跡4軒・円形周溝1条・溝状土坑3基・土坑5基を検出した。

検出された竪穴住居跡は、ほぼ同一の形態と規模であり、堆積土中に二種類の火山灰を堆積している。また、第1号・第2号・第3号竪穴住居跡からは多量の炭化材が出土しており、火災にあったものと推測される。時期は奈良時代に比定されるもので、配置から2ないし3軒が同時に存在していたものと考えている。土坑は、中掘浮石層を介在し上層と下層から検出された。下層のものは、ほぼ同一面から出土した遺物から縄文時代前期初頭に比定されるものである。

第1節 竪穴住居跡 (第2図～第17図)

本調査では4軒の竪穴住居跡が検出された。

第1号竪穴住居跡 (第2図～第6図)

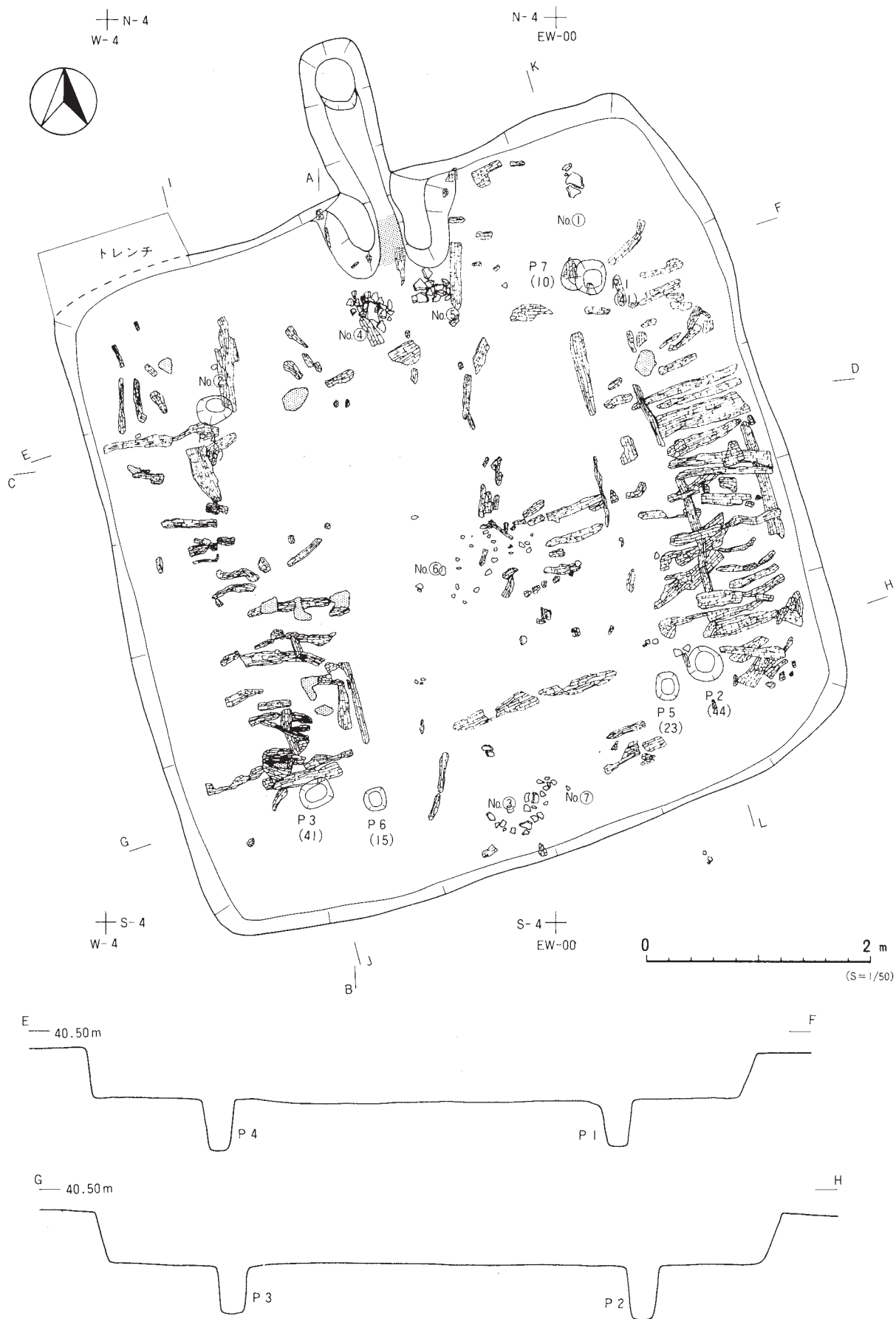
〔位置と確認〕本住居跡は、調査区のほぼ中央E・F-10・11グリッドに位置する。粗掘り前のトレンチ掘りの際、遺物と炭化材が出土したことから遺構と確認された。遺構の掘り込み面は、第II層黒色土からであるが、明瞭な確認は第III層面で検出である。西側に近接して、第4号住居跡がある。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形である。大きさは、床面の北辺で5.3m・南辺で5.6m・東西辺でおよそ5.4mあり、床面積は33.5㎡である。住居の主軸方向は磁北から西に14度振れている。

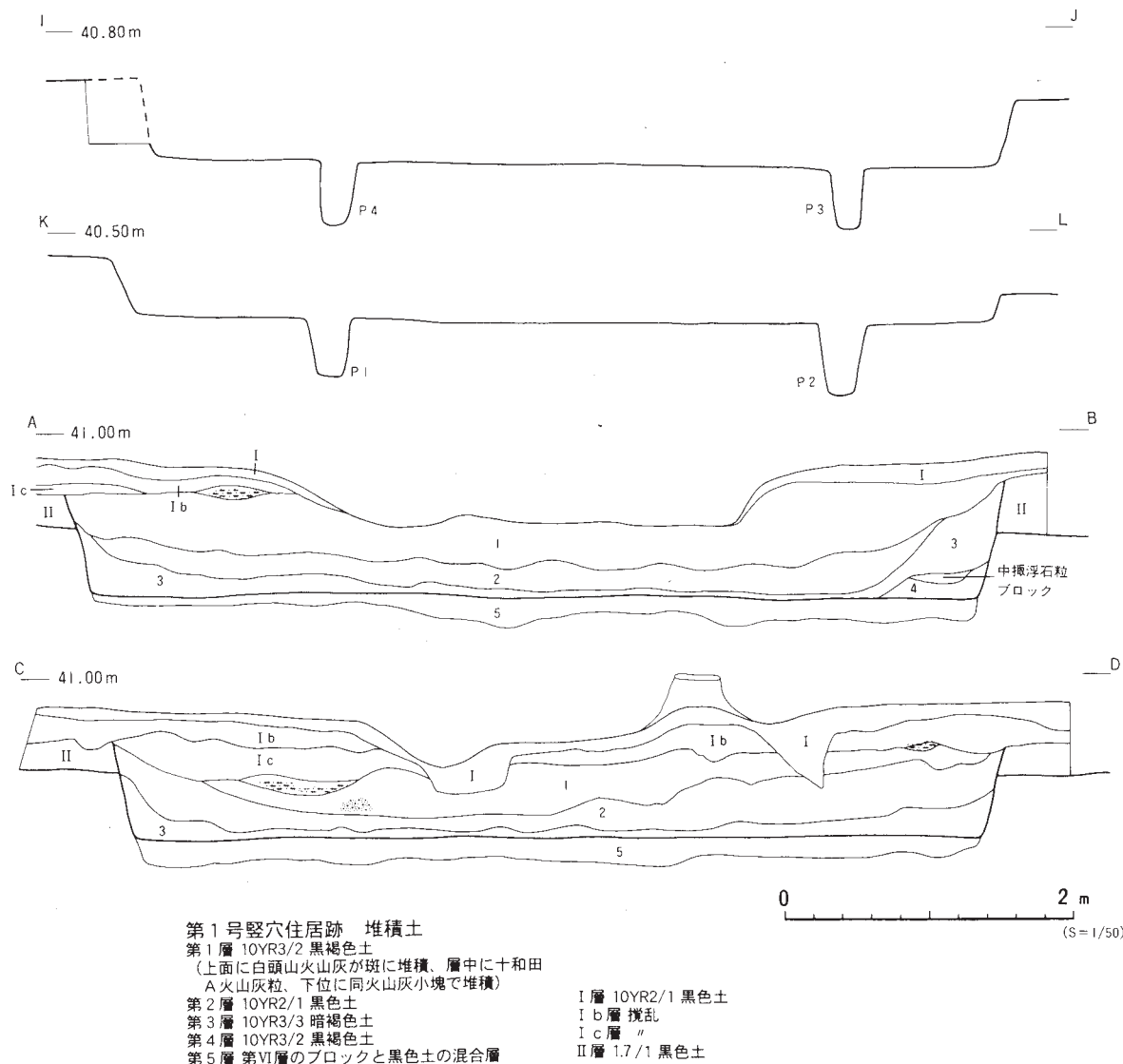
〔堆積土〕堆積土の深くまで攪乱が入り込んでいる。住居内堆積土は自然堆積で4層に分けられる。黒色土を主体にした土で、中掘浮石粒が各層に混合する。部分的にはあるが、第1層上面に白頭山火山灰が、下面に十和田A火山灰が黒色土等と混合した状態で、小ブロック状に堆積している。また第1層中には、5cm大の小礫と1cm～5mm大の玉砂利が多数混入していた。

〔床・壁〕床面は全面にわたって平坦であり、特に硬化した部分は確認されなかった。掘形底面は、やや起伏があり、床面から15～20cmの深さがある。第VI層のブロックと黒色土を混合し、床面を整えている。壁は床面から開く様に立ち上がる。床面まで、およそ50～60cmの高さである。

〔かまど〕北壁のほぼ中央で検出された。燃焼部幅は約30cmで、燃焼部奥壁まで約50cmある。燃焼



第2図 第1号竪穴住居跡(1)



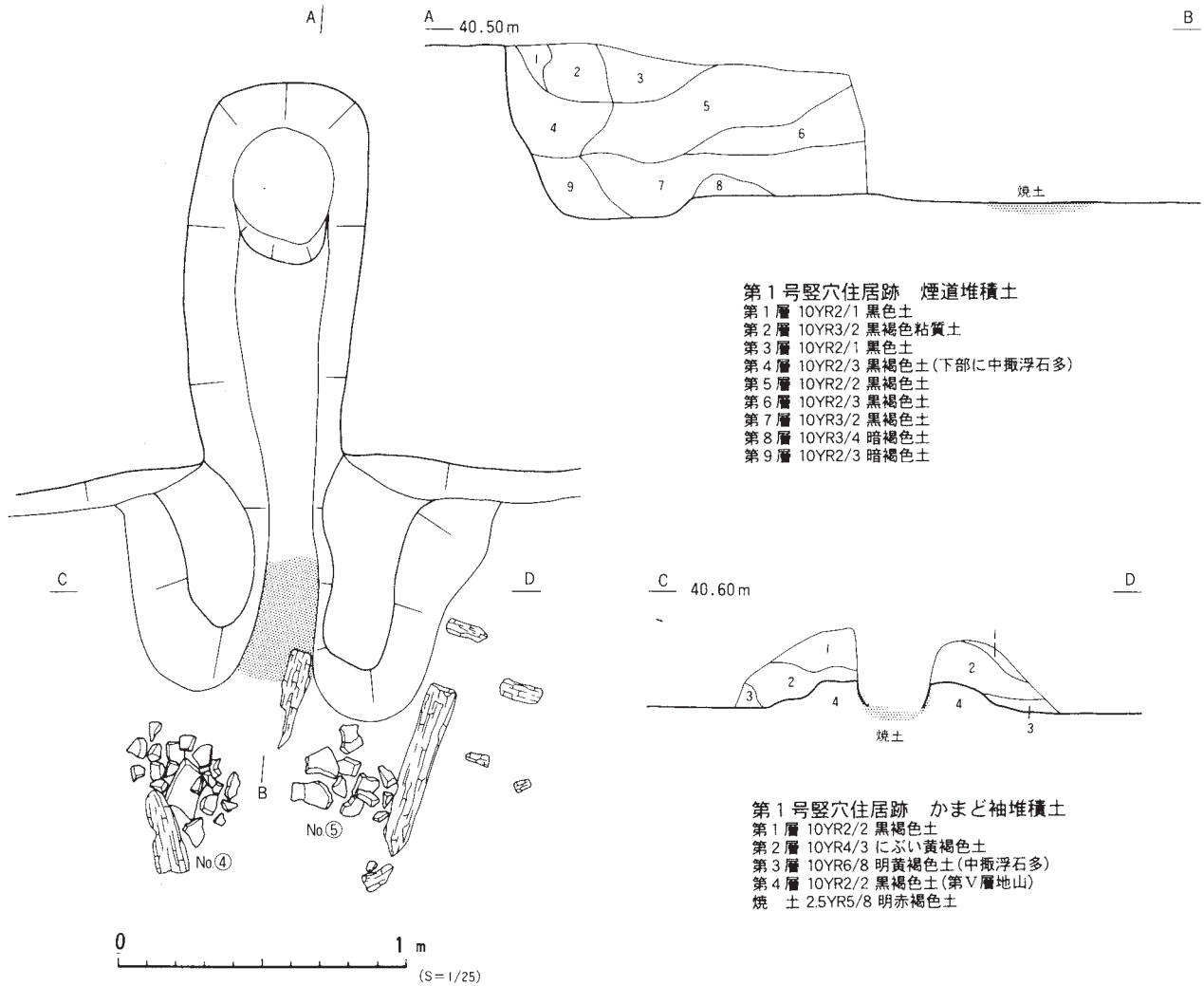
第3図 第1号竪穴住居跡(2)

部の左右には、崩れているが袖が残っている。右袖は長さ80cm、高さ約25cm、左袖は長さ75cm、高さ約35cmである。基本的には第V層の地山を削り出して作られており、その上に黄褐色粘土と黒色土が張り付けられている。煙道は長さ1.3m程、幅20~35cmである。底面はほぼ平坦で、先端部で5cmほど落ち込む。堆積土は8層に分けられる。ほとんどが天井の崩落土と考えられる。煙出孔はほぼ円形に掘り込まれている。

[柱穴] 床面から7個の小穴を検出した。P1~4は配置と規模、深さから主柱穴と考えられる。形状は楕円形および長方形である。床面からの深さはP4の最大46cmで、他もほぼ同様な深さである。P5とP6は15~23cmの深さがあり、位置的にP2とP3の補助的柱穴であったものと考えられる。P1~P4間での各々の柱間寸法は、3.5m~3.6mある。

[出土遺物] 堆積土及び床面から炭化材、焼土と土師器が出土した。

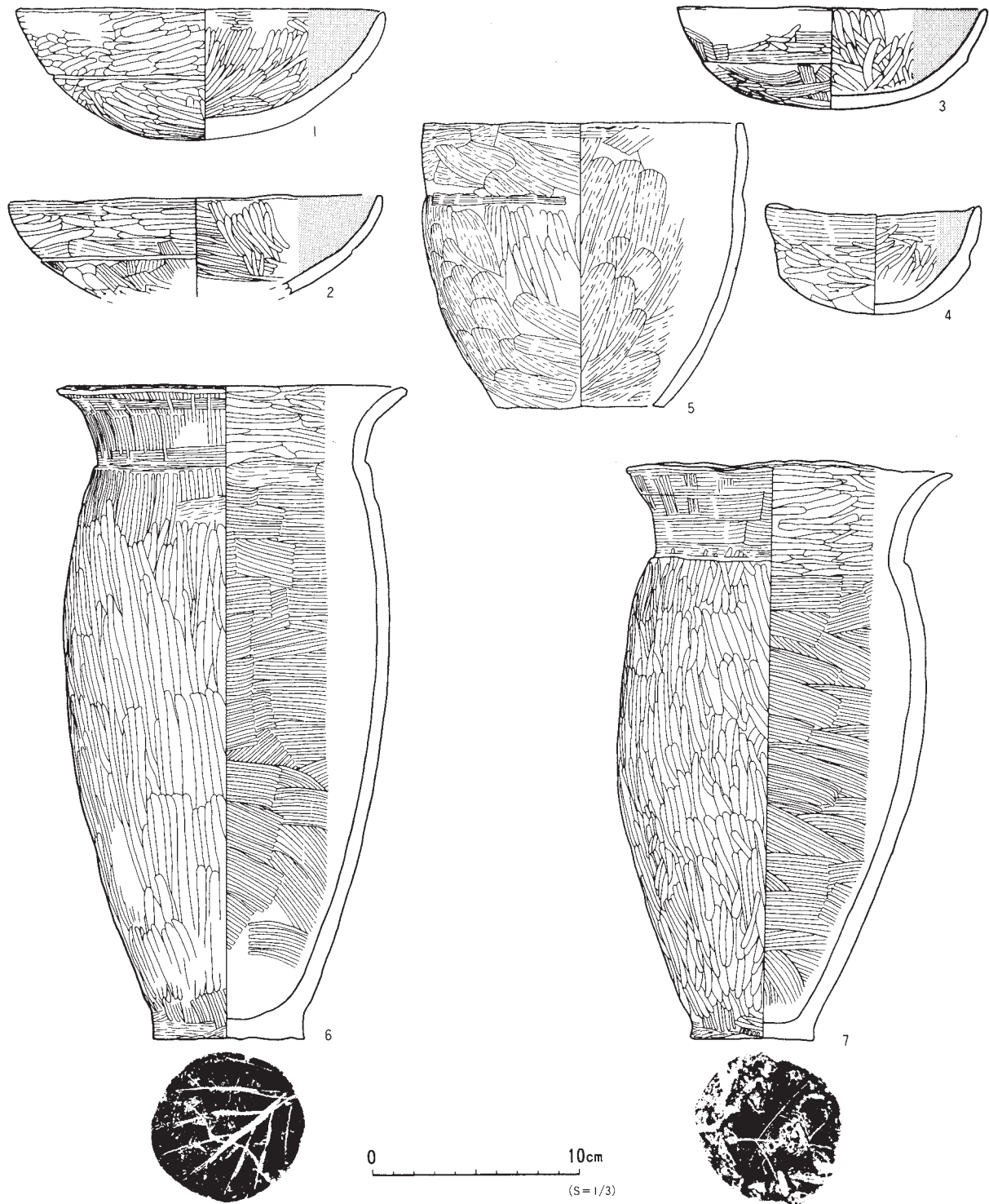
炭化材・焼土：炭化材は床面から多量に出土した。出土状態から本住居跡の建築部材で、火災により燃えて炭化した状態で残ったものと判断される。部材には、板材と丸太材、角材と思われるものが



第4図 第1号竪穴住居跡(3)・カマド

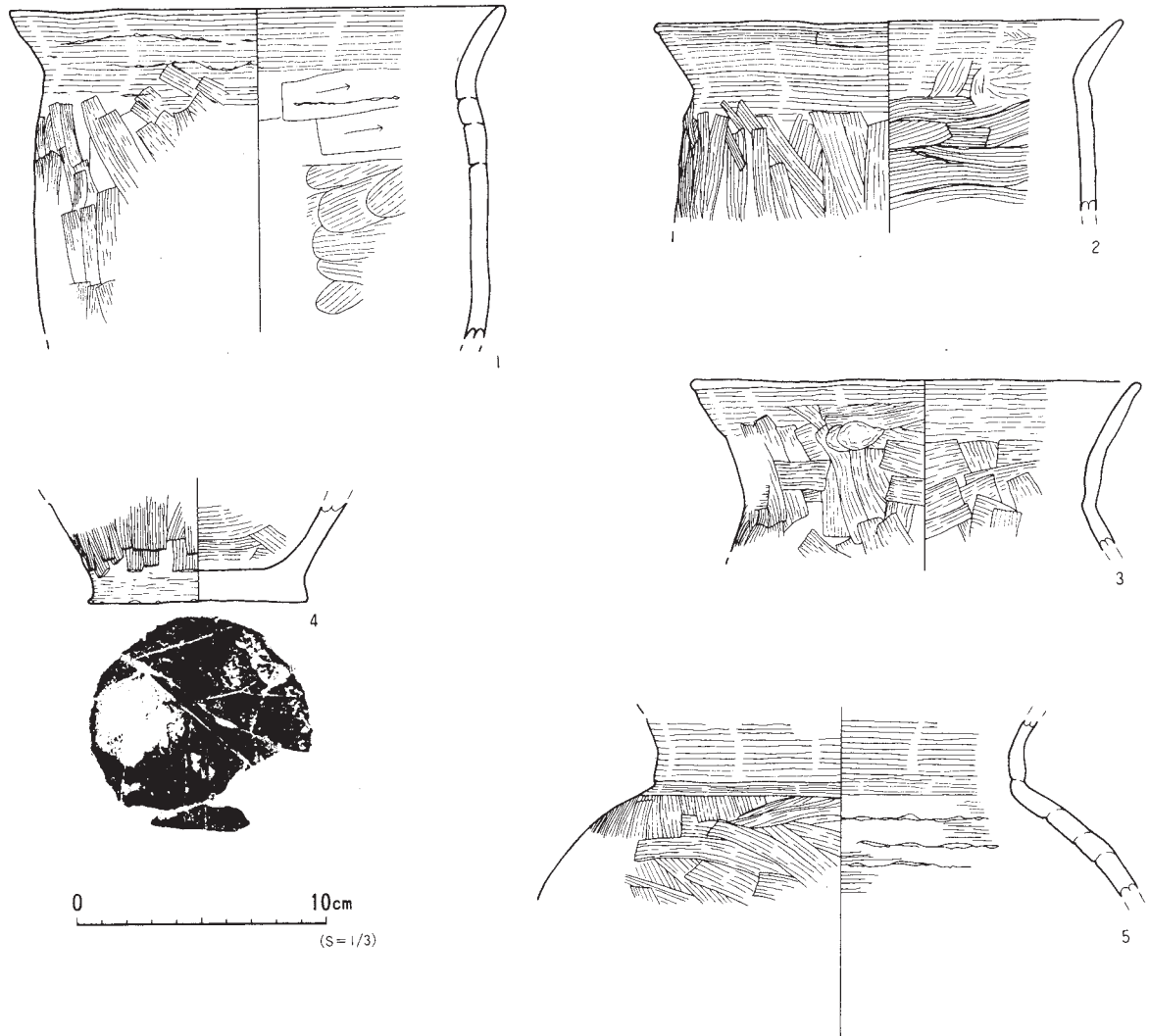
あり周壁に巡るように出土している。特に、東西の壁際には板材が多く、東壁部分のものをみると各板材が接していたことが判る。また、板材の両端部分には丸太材と角材とみられるものが、板材を挟むようにしてある。これらは、住居壁面に巡らされていた腰板であった可能性がある。遺存状態の良いもので、幅約15cm~20cm、長さ80cm~1m程で画一性を感じる。住居の中央部分からの出土は少ないが、丸太材と思われる部材がある。上屋構造の骨格をなす、柱、梁、桁、垂木材であったと思われる。焼土は小規模なもので、床面からやや浮いた状態のものと、炭化材の上に被るものがある。

遺物：(第5図、第6図) 堆積土と床面から総数約455点の土師器片が出土した。堆積土中からは、第1・2層からの出土が多いが、細片がほとんどで復元図示できるものは少ない。床面出土のものは、かまど周辺と住居中央部、かまどと対する南側壁際から出土している。坏(第5図1~4)すべて丸底のものである。外面の中位に沈線による段を持つ。口縁部はヨコナデ後にヘラミガキ、外面の胴部から底部はヘラミガキされる。内面はヘラミガキの後、黒色処理される。甑(同図5)は単孔の甑で、口縁部ヨコナデ後ヘラナデ、外面はヘラミガキ後ヘラナデ、内面はヘラナデ調整される。甕(第5図6・7、第6図)頸部に段を持ち、口縁部は外反して開く。第5図6の口縁部はハケメ調整後ヨコナデ、胴部はハケメ後ヘラミガキされる。ハケメの痕跡は頸部と胴部下端にだけみられる。内面は口縁



番号	層位	器種	口(cm)	径(cm)	器高(cm)	外面調整	内面調整	備考
1	床	坏	(18.1)	6.3	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	No①、外面段有り、内黒
2	床	坏	(18.4)	(4.7)	-	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ→体部ヘラナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	No②、外面段有り、内黒
3	カマド	坏	(15.2)	4.9	-	ヘラミガキ→ヘラナデ	ヘラミガキ	外面段有り、内黒
4	2層	坏	(9.6)	4.7	(2.6)	口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ	外面段有り、内黒、全体剥落
5	床	甗	(15.7)	13.9	8.1	口縁部ヨコナデ→ナデ、頸部ヘラナデ、胴部ヘラミガキ→ナデ	ナデ	No③、無底式、外面段有り
6	床	甗	17.1	31.7	7.3	口縁部ハケメ→ヨコナデ、胴部ハケメ→ヘラミガキ、底部ヘラナデ	口縁部ヘラミガキ、胴部ハケメ	No④、底面木葉痕
7	床	甗	16.1	27.5	6.1	口縁部ハケメ→ヘラナデ、胴部ヘラミガキ	口縁部ヘラミガキ、胴部ハケメ	No⑤、底面木葉痕

第5図 第1号竪穴住居跡出土遺物(1)



番号	層位	器種	口(cm)	径(cm)	器高(cm)	外面調整	内面調整	備考
1	1層	甕	(20.2)	(13.5)	-	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ→ヘラケズリ	内面輪積み痕
2	1・2層	甕	(18.7)	(7.7)	-	口縁部ヘラナデ、胴部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
3	床	甕	(18.1)	(6.8)	-	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	No.⑦
4	床	甕	-	(3.7)	8.6	ナデ→ヘラナデ	ヘラナデ	No.⑥、底面木葉痕
5	床	甕	-	(6.9)	-	口辺部ヨコナデ、頸部ヘラナデ、胴部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	内面輪積み痕

第6図 第1号竪穴住居跡出土遺物(2)

部へラミガキ、胴部はハケメ調整される。底面には木葉痕が残る。同図7は口縁部ハケメ後ヨコナデされる。胴部はへラミガキ、胴部下端にハケメとナデの痕跡が僅かに残る。内面は口縁部へラミガキ、胴部はハケメ調整される。底面には木葉痕が残る。第6図1～3は胴部を欠失する。第6図1は胴部が直立し、口縁部は頸部で屈曲し外反する。口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部は外面へラケズリ、内面はへラナデ後へラケズリされる。同図2は外面の口縁部と胴部がへラナデ、口縁部内面はヨコナデされる。同図3は口縁部内外面がヨコナデ、胴部内外面ともへラナデされる。胴が張る器形の可能性がある。同図5は胴張りの球胴甕である。口縁部ヨコナデ後へラナデ、胴部外面はへラナデされる。

〔小結〕本遺構は火災住居跡である。堆積土の状態から、火災消失後に一時土や遺物の廃棄場所として使われ、約10世紀頃までには完全に自然埋没している。住居の帰属時期は床面出土遺物から7世紀中葉頃から8世紀前葉頃のものと思われる。

第2号竪穴住居跡（第7図～第10図）

〔位置と確認〕 調査区の北側H・I-12・13グリッドに位置する。トレンチ掘りの際、火山灰が出土したことから遺構と確認した。遺構の掘り込み面は第Ⅱ層中であるが、第Ⅲ層面で検出した。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸方形を基調にするが、隅はかなり丸い。大きさは、床面の北辺でおよそ4m・南辺で3.7m・東西辺でおよそ3.5mあり、床面積は15.5㎡である。住居の主軸方向は磁北から西に2度振れている。

〔堆積土〕 住居内堆積土は、自然堆積で4層に分けられる。黒色土を主体にした土で、中礫浮石粒が各層に混合する。第1層は、第Ⅱ層相当の土である。第2層中には、白頭山火山灰と十和田A火山灰の堆積が見られる。白頭山火山灰は、細ブロック状で小範囲で所々に見られるが、十和田A火山灰は同層中に広く散在している。

〔床・壁〕 床面は、住居中央部が弱く窪む。この約2m程の範囲とかまど焚口部分は、硬化している。また、中央の硬化した床面には約50×80cmの範囲で焼面がみられた。焼面は約10cmの深さまで強く焼けている。地床炉の可能性ある。掘形底面は起伏があり、床面から5～20cmの深さがある。第Ⅴ・Ⅵ層のブロックと黒色土を混合し、床面を整えている。壁は床面から開く様に立ち上がる。検出面から床面まで、およそ50～60cmの高さである。

〔かまど〕 かまどはトンネル式で、北壁のほぼ中央で検出された。燃焼部幅は約30cmで、燃焼部奥壁まで約90cmある。燃焼部の中央よりやや右袖寄りに、土師器甕の底部を伏せて支脚として据えている。燃焼部の左右には、崩れているが袖が残っている。右袖は長さ60cm、高さ約35cm、左袖は長さ70cm、高さ約30cmである。基本的には第Ⅵ層の地山を削り出して作られており、その上に灰黄褐色粘土と黒褐色土を混合したものが張り付けられている。両袖の先端部には、土師器甕が芯材として据えられている。煙道は長さ1.5m程、幅30～40cmである。底面はほぼ平坦で、煙出孔に向かい緩やかに傾斜し、先端部で5cmほど落ち込む。堆積土は8層に分けられる。ほとんどが天井の崩落土と考えられる。煙出孔はほぼ円形に掘り込まれている。

〔柱穴〕 住居の柱穴と考えられるものは検出されなかった。

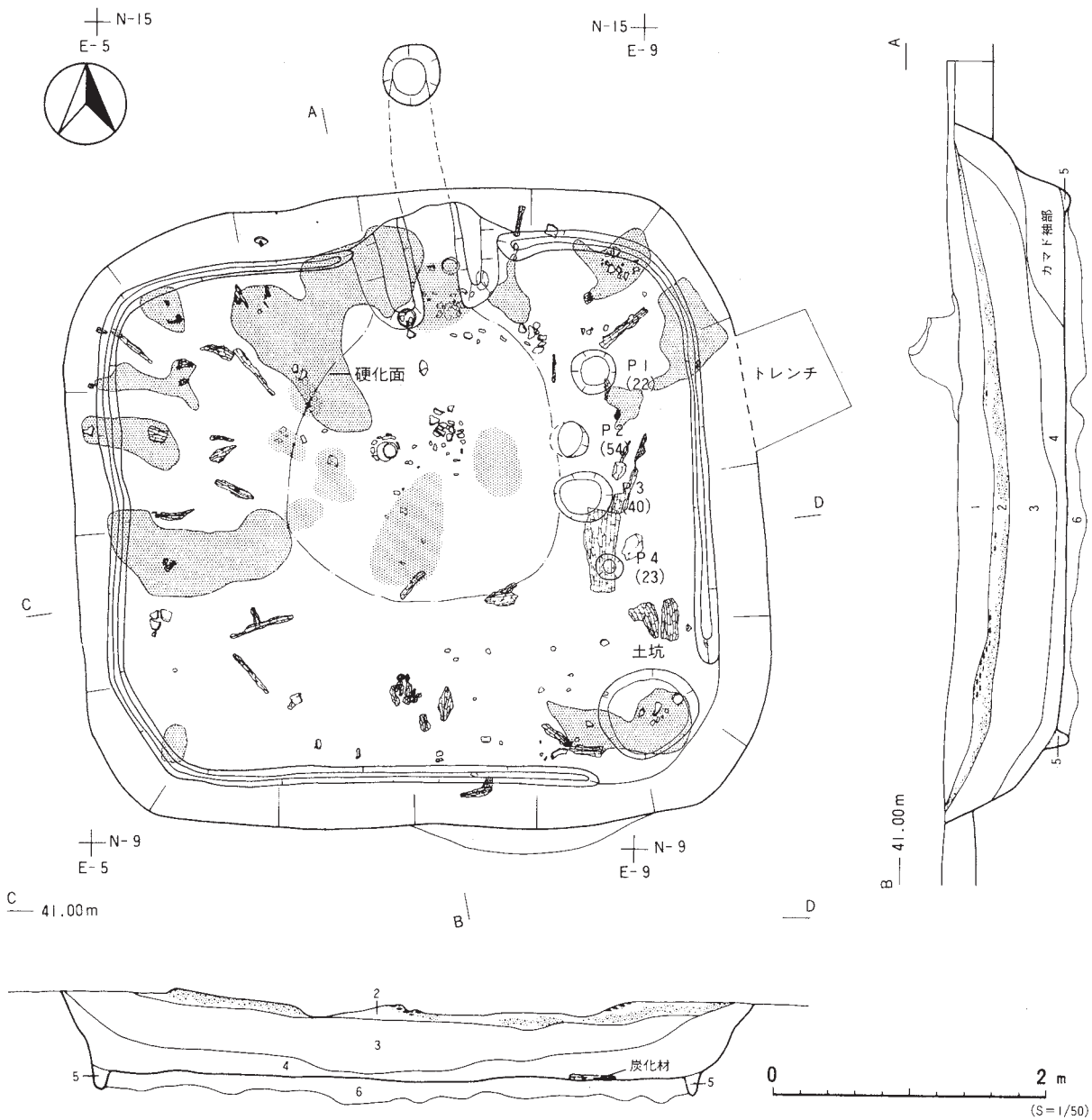
〔周溝〕 住居の南東隅部分を除く壁直下に巡る。幅は10～20cm、深さは3～15cmである。

〔その他〕 住居内の東側に小穴と土坑を検出した。P1からP4までの小穴は、径が20～30cmの円形及び楕円形で、深さは22～54cmある。これらの小穴と対応するものが検出されないことから、柱穴とは思わず、他の用途があったものとする。また、住居南東隅の壁直下に土坑を検出した。形状は60×80cmの楕円形で、深さは17cm程である。

〔出土遺物〕 堆積土および床面から炭化材、焼土と土師器および台石が出土した。

炭化材・焼土：炭化材は、第1号住居跡と同じく火災により炭化した建築部材と判断している。周壁の中位より床面に向かい傾斜した状態で出土するものが多い。床面出土のものも浮いた状態のものも多く、炭化材下の土は柔らかい。部材の形状がはっきりと判るものは少ないが、細い丸太状のものが多い。焼土は、かまど脇と北西隅の周壁部分に多くみられた。炭化材の上に被るように壁中位より床面に向かい傾斜した状態にある。

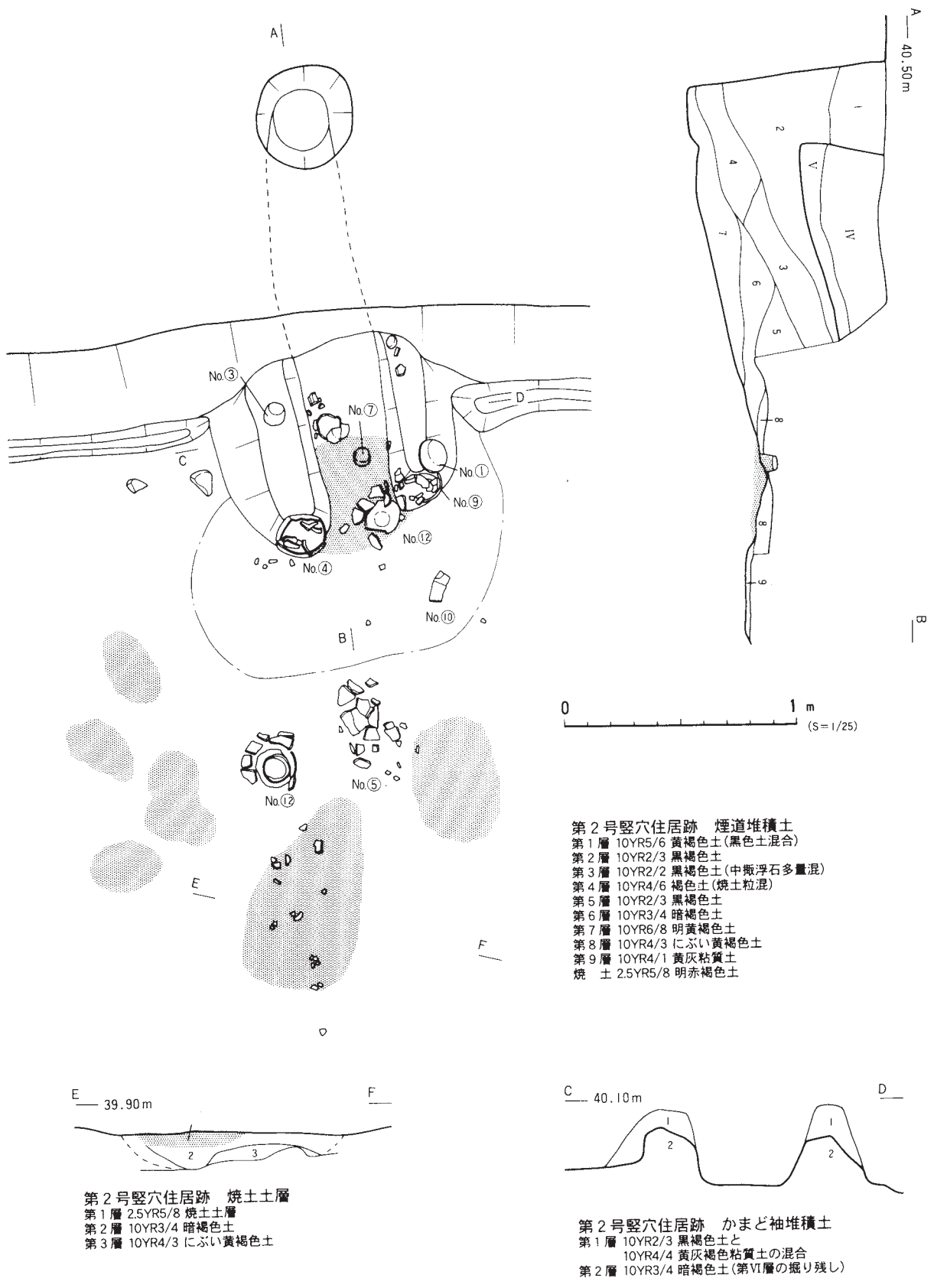
遺物：（第9図、第10図）堆積土と床面から総数約340点の土師器片が出土した。比較的堆積土からの遺物は少ない。細片がほとんどで復元図示できるものはない。床面出土のものは、かまど周辺



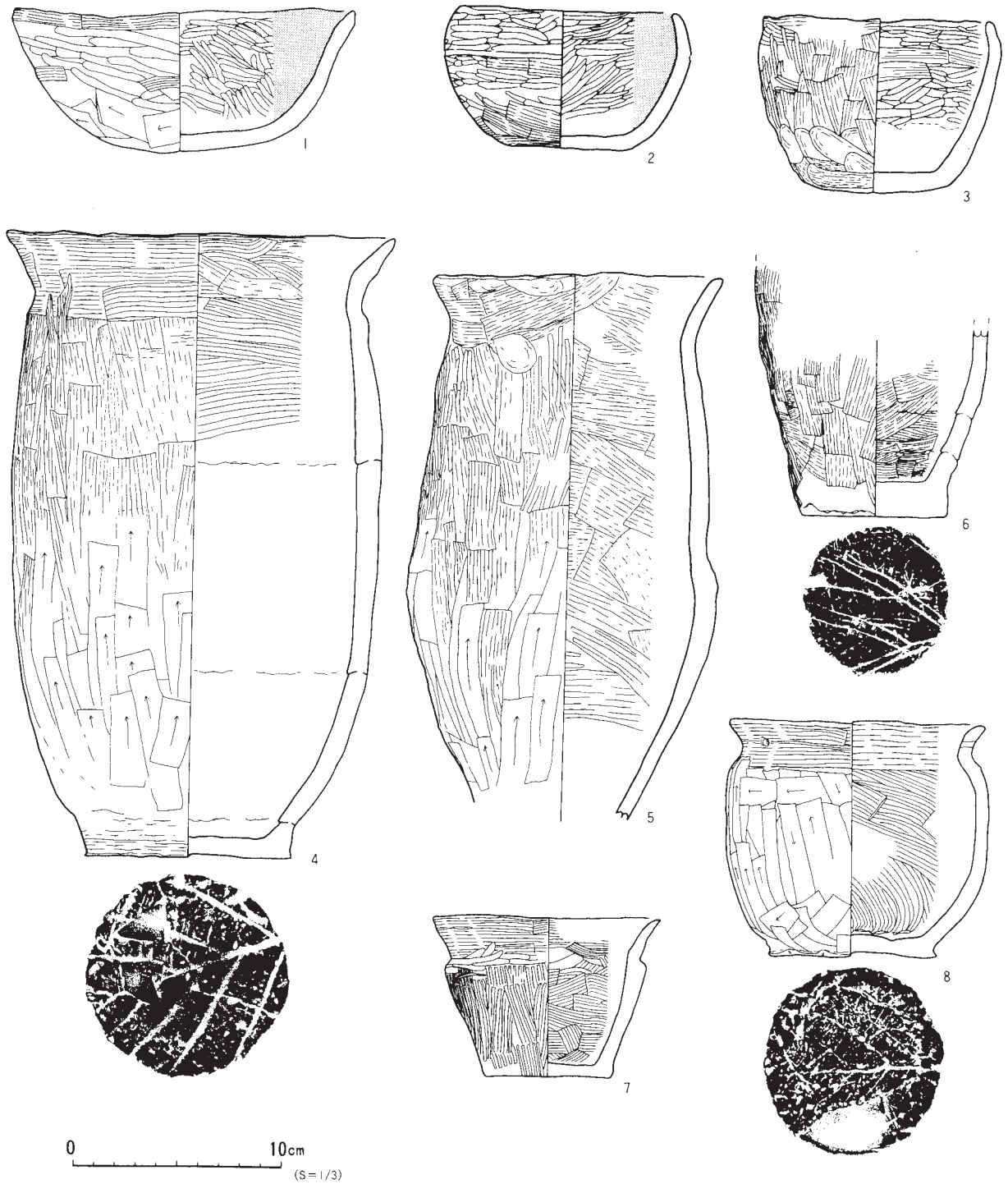
- 第2号竪穴住居跡 堆積土
- 第1層 10YR2/1 黒色土
 - 第2層 10YR2/2 黒褐色土
(十和田A火山灰が小塊で断続的に堆積、全体の50%程、
その上位に白頭山火山灰が15%程散見)
 - 第3層 10YR2/1 黒色土
 - 第4層 10YR3/1 黒褐色土(炭化物混入、中散浮石多)
 - 第5層 10YR2/3 黒褐色土
 - 第6層 第V・VI層ブロックと黒色土の混合層

0 2 m
(S=1/100)

第7図 第2号竪穴住居跡(1)

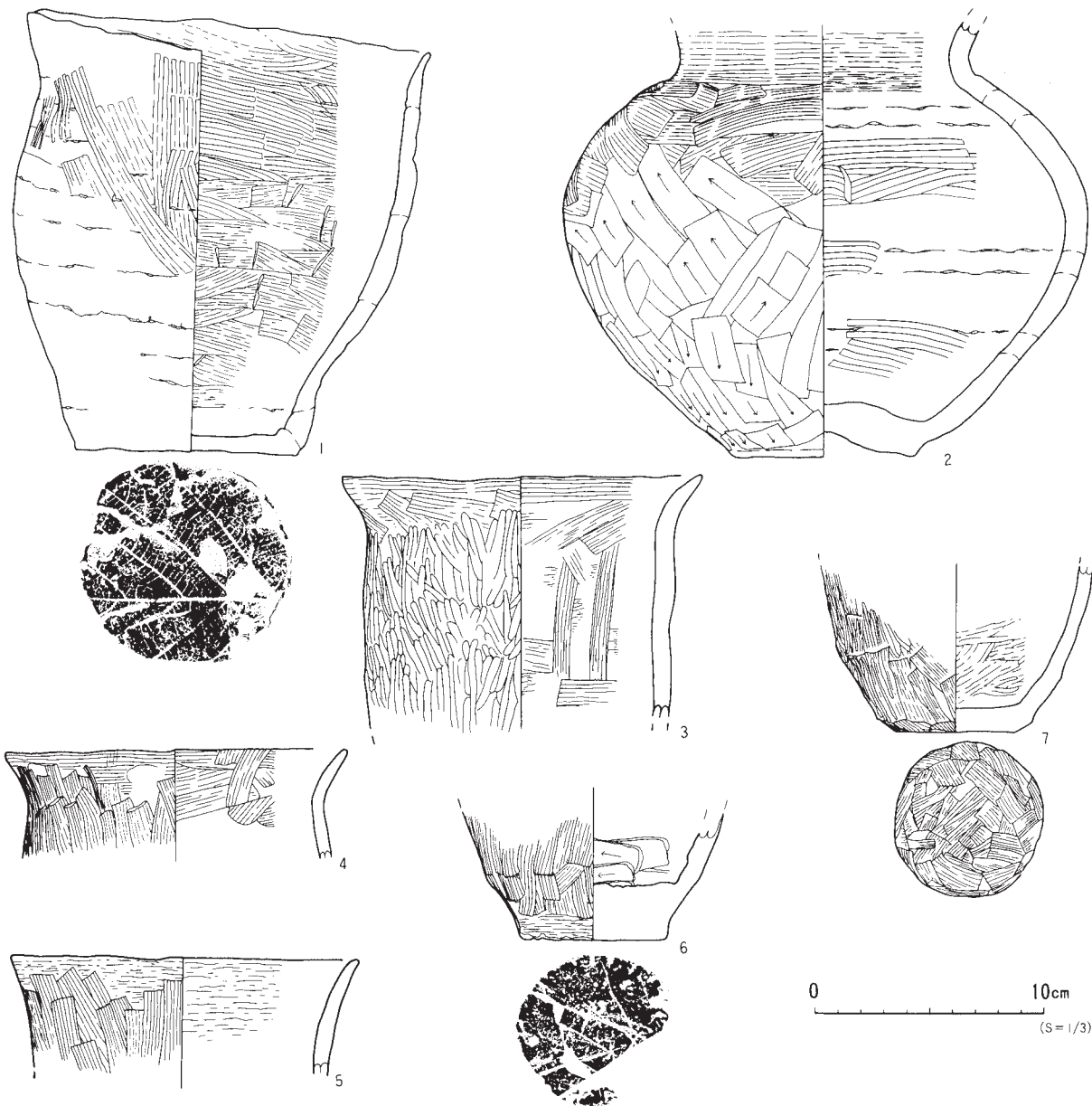


第8図 第2号竖穴住居跡(2)・カマド



番号	層位	器種	口(cm)	径(cm)	器高(cm)	外面調整	内面調整	備考
1	カマド	环	(16.5)	6.7	-	口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	No.①、内黒
2	床	环	10.6	6.7	-	ヘラミガキ、一部ヘラナデ	ヘラミガキ	No.②、内黒
3	カマド	鉢	11.3	8.3	(7.3)	口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ→ヘラナデ、底部指頭圧痕→ナデ	ヘラミガキ→ヘラナデ	No.③、内面スス状の付着物
4	床	甕	(18.7)	29.9	(9.9)	口縁部ヨコナデ(ヘラナデ)、胴部ヘラケズリ→ヘラナデ	ヘラナデ	No.④、内面輪積み痕、底面木葉痕
5	床	甕	(14.1)	(26.2)	-	口縁部ヘラナデ(指頭圧痕)、胴部ヘラケズリ→ヘラナデ	ヘラナデ、一部ハケメ	No.⑤
6	床	甕	-	(12.2)	7.2	ヘラナデ	ヘラナデ	No.⑦、底面木葉痕
7	床	甕	10.9	7.7	6.1	口縁部ヨコナデ(ヘラナデ)、頸部ヘラミガキ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	No.⑥
8	床	甕	(12.4)	11.4	(8.2)	口縁部ヨコナデ(ヘラナデ)、胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	No.⑧、穿孔4ヶ有り、底面木葉痕

第9図 第2号竪穴住居跡出土遺物(1)



番号	層位	器種	口(cm)	径(cm)	器高(cm)	外面調整	内面調整	備考
1	カマド	甕	18.4	18.3	10.2	ハケメ(他の調整は剥落激しく不明)	口縁部ハケメ、胴部ヘラナデ	No.⑨、外面輪積み痕、底面木葉痕
2	床	甕	-	(19.1)	7.9	口辺部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ→ヘラナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	No.⑩、内面輪積み痕
3	床	甕	(15.8)	(0.6)	-	口縁部ヨコナデ→ヘラナデ、胴部ヘラミガキ	ヘラナデ	No.⑪
4	床直	甕	(14.9)	(4.7)	-	口縁部ヨコナデ→ヘラナデ	ヘラナデ	No.⑫
5	床	甕	(7.6)	(4.9)	-	ヨコナデ→ヘラナデ	ナデ	No.⑬
6	カマド	甕	-	(5.5)	6.4	ナデ→ヘラナデ	ヘラケズリ	底面木葉痕
7	床	甕	-	(7.1)	5.6	ヘラナデ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	No.⑭、底面ヘラナデ

第10図 第2号竪穴住居跡出土遺物(2)

に多く出土している。他、南東隅の小土坑周辺に破片が散在して出土した。坏（第9図1～2）同図1は丸みの残る平底状の底部である。口縁部は緩く外反する。外面の調整は口縁部ヘラナデ、胴部ヘラミガキ、底部はヘラケズリされる。内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。同図2は平底で、口縁部が内折する。器形的には鉢ともとれるが、内面は黒色処理されていることから坏に含めた。調整は、内外面ヘラミガキされ、外面の一部にヘラナデがみられる。同図3は坏である。底は丸みの残る平底で、口縁部は内折する。口縁部外面ヨコナデ、胴部外面はヘラミガキ後にヘラナデされる。底部には指頭圧痕が顕著に残り、その上にナデ調整される。内面はヘラミガキ後、ヘラナデされる。

甕（第9図4～6、第10図）第9図4は頸部に段を持ち、口縁部は強く外反する。胴部下半が膨らむ。調整は口縁部ヘラナデ、胴部外面はヘラケズリされ、底部付近にナデの痕跡が僅かにみられる。同図5は胴部の中位に最大幅を持ち、底部が窄む形状と思われる。口縁部ヘラナデで一部に指頭圧痕がみられる。胴部はヘラケズリで一部にミガキとハケメがみられる。第10図1は成形時に歪んだ甕である。支脚に使われていたため外面の剥落が激しいが、一部にハケメの痕跡がみられる。内面は口縁部ハケメ、胴部ヘラナデされる。同図2は球胴甕と分類したが、壺とした方が適切かもしれない。口縁部を欠失しているが、大きく外反するものと思われる。遺存する口縁部の内外面はヨコナデ、胴部外面の調整は上半がヘラナデ、他はヘラケズリされる。内面はヨコナデのほかハケメがみられる。同図3～5は胴部を欠失する甕、同図7と8は甕の底部と思われる。同図3の調整は、第9図4の甕に似る。同図5は口縁部片で弱いヨコナデ後にヘラナデされている。同図7は他の甕に比べ底部厚がある。切り忘れたものであろうか。内面底部付近にケズリの痕跡がみられる。同図8の底面は入念にヘラナデ調整されている。第9図7と8は小型の甕と分類した。同図7は頸部に強く屈曲する段を持つ。調整は口縁部ヨコナデ、外面は頸部にミガキ、胴部はハケメである。内面はヘラナデされる。同図8は口縁部に小さな穿孔を持つもので、3ないし4方向に施されていたと思われる。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面はケズリ、内面はヘラナデされる。

土師器の他に、図示しなかったが、かまど脇と床面の焼土脇から台石として使用されたとと思われる被熱した偏平な礫が出土している。

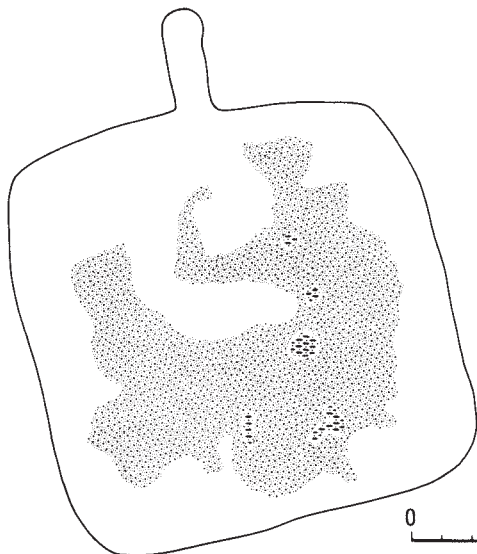
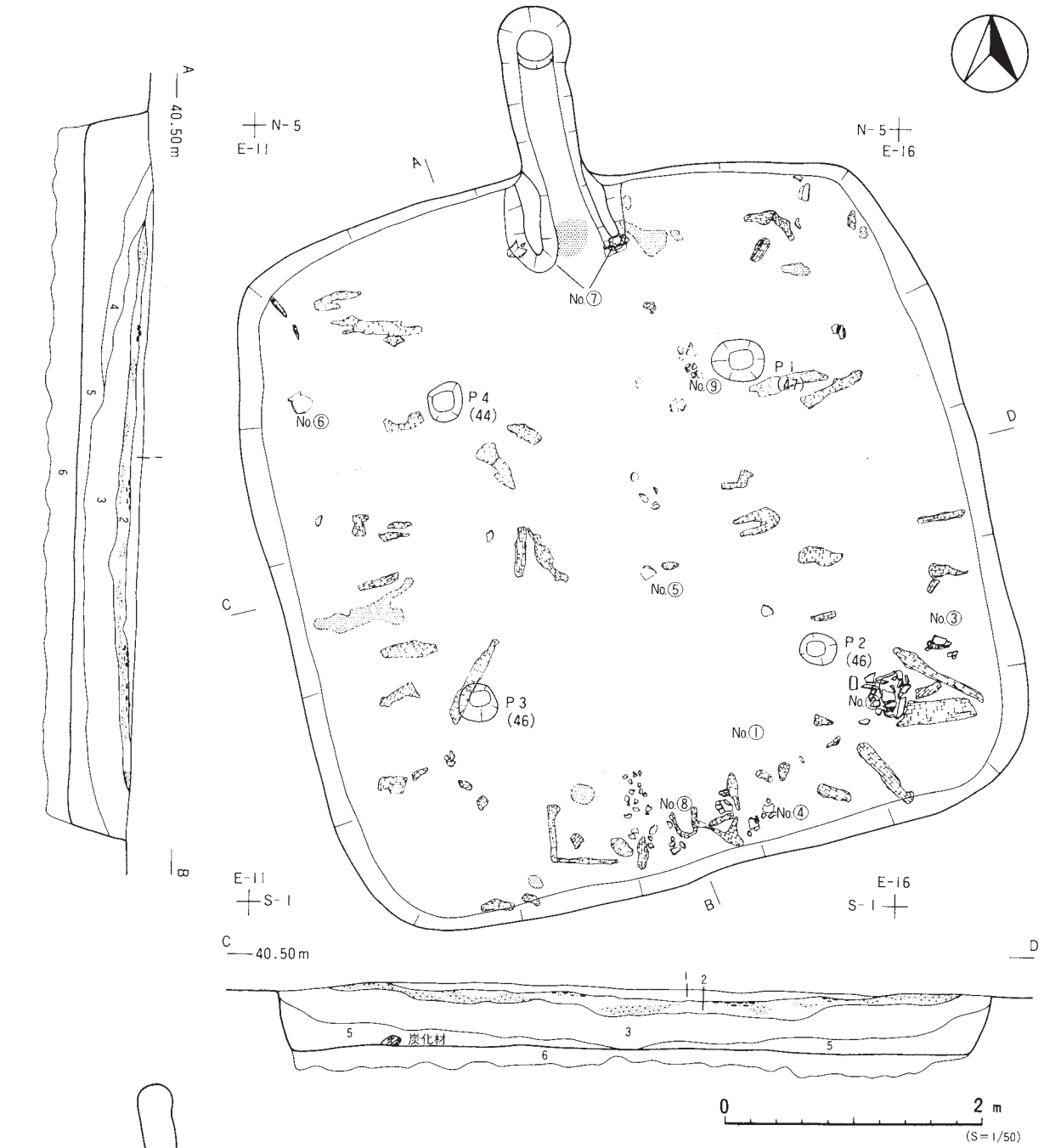
〔小結〕本遺構は、第1号住居跡と同じく火災にあっている。火災時の焼土とは異なる焼けた面が、床面にあることが特徴である。鉄製品等の出土はなく調査時点で目に見える鍛造剥片もなかったが、何らかの工房を伴う住居であった可能性がある。住居の帰属時期は床面出土遺物から7世紀中葉頃から8世紀前葉頃のものと思われる。

第3号竪穴住居跡（第11図～第14図）

〔位置と確認〕調査区の東側F-14グリッドを中心に位置する。第Ⅲ層面に、黒褐色で隅丸方形プランで検出した。プランの内側には火山灰がリング状に巡る。遺構の掘り込み面は第Ⅱ層中である。

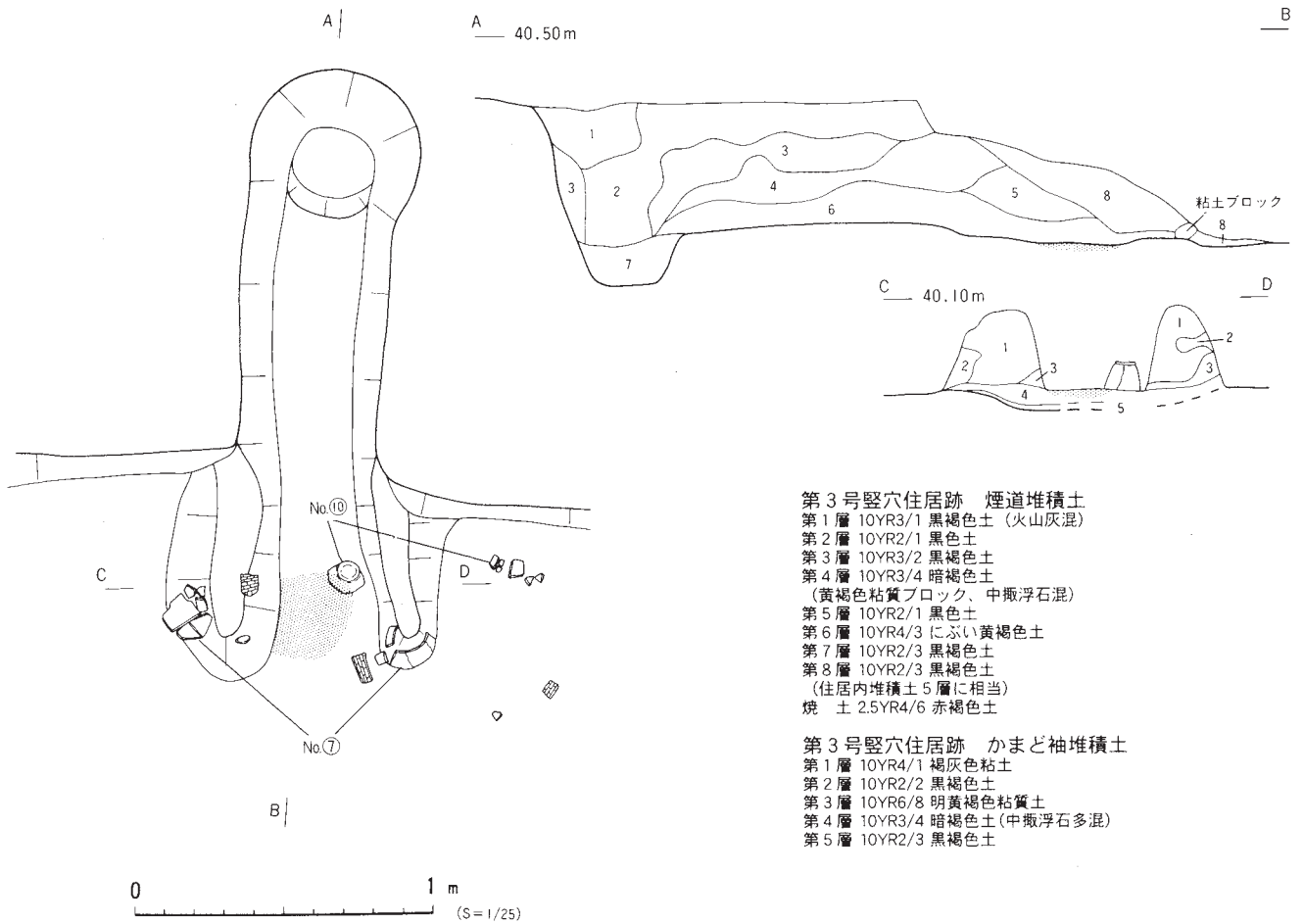
〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形である。大きさは、床面の南北辺で約4.5m・東西辺で約4.5mあり、床面積は25.9㎡である。住居の主軸方向は磁北から西に11度振れている。

〔堆積土〕住居内堆積土は、自然堆積で5層に分けられる。黒色土と黒褐色土を主体にした土で、中振浮石粒が各層に混合する。第2層中には、白頭山火山灰と十和田A火山灰の堆積が見られる。白頭山火山灰は、細ブロック状で所々に見られるが、十和田A火山灰は同層中に広く散在している。



- 第3号竖穴住居跡 堆積土
 第1層 10YR2/1 黒色土
 第2層 10YR2/2 黒褐色土
 (十和田A火山灰が小塊で断続的に堆積、全体の40%程、
 その上位に白頭山火山灰が10%程散見)
 第3層 10YR2/1 黒色土
 第4層 10YR3/2 黒褐色土
 第5層 10YR2/3 黒褐色土(中散浮石多混)
 第6層 第V・VI層ブロックと黒色土の混合層

第11図 第3号竖穴住居跡(1)



第12図 第3号竪穴住居跡(2)・カマド

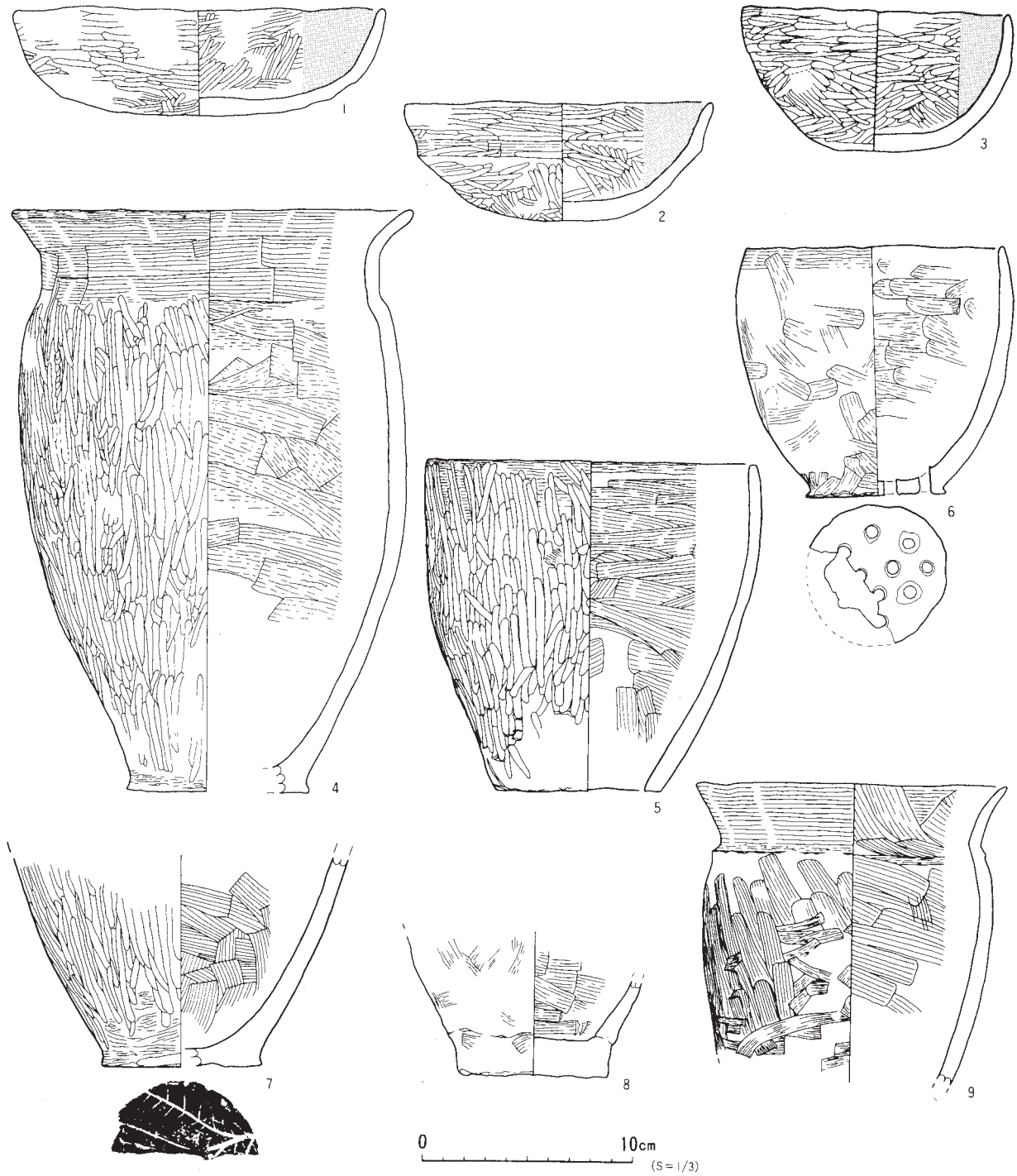
〔床・壁〕床面は全面にわたり平坦である。特に硬化している所は見られない。掘形底面は起伏があり、床面から10~20cmの深さがある。第V・VI層のブロックと黒色土を混合し、床面を整えている。壁は床面からほぼ直に立ち上がる。検出面から床面まで、およそ50cmの高さである。

〔かまど〕かまどは、北壁のほぼ中央で検出された。燃焼部幅は約35~20cmで、燃焼部奥壁まで約70cmある。燃焼部の中央よりやや右袖寄りに、土師器甕の底部を伏せて支脚として据えている。燃焼部の左右には、崩れているが袖が残っている。右袖は長さ55cm、高さ約30cm、左袖は長さ70cm、高さ約30cmである。燃焼部部分を浅い皿状に掘りくぼめ、その両端に褐灰粘土と土を混合したものを盛り上げ構築している。両袖の先端部には、土師器甕が芯材として据えられている。煙道は長さ1.4m程、幅50cm程である。煙道底面は平坦で、先端部が15cm程掘り込まれている。堆積土は7層に分けられる。ほとんどが天井の崩落土と考えられる。煙出孔はほぼ円形に掘り込まれている。

〔柱穴〕床面から4個の小穴を検出した。これらの小穴は、配置と規模、深さから支柱穴と考えられる。形状は楕円形および長方形である。床面からの深さはP1の最大47cmで、他もほぼ同様な深さである。各々の柱間寸法は、2.3m~2.6mある。

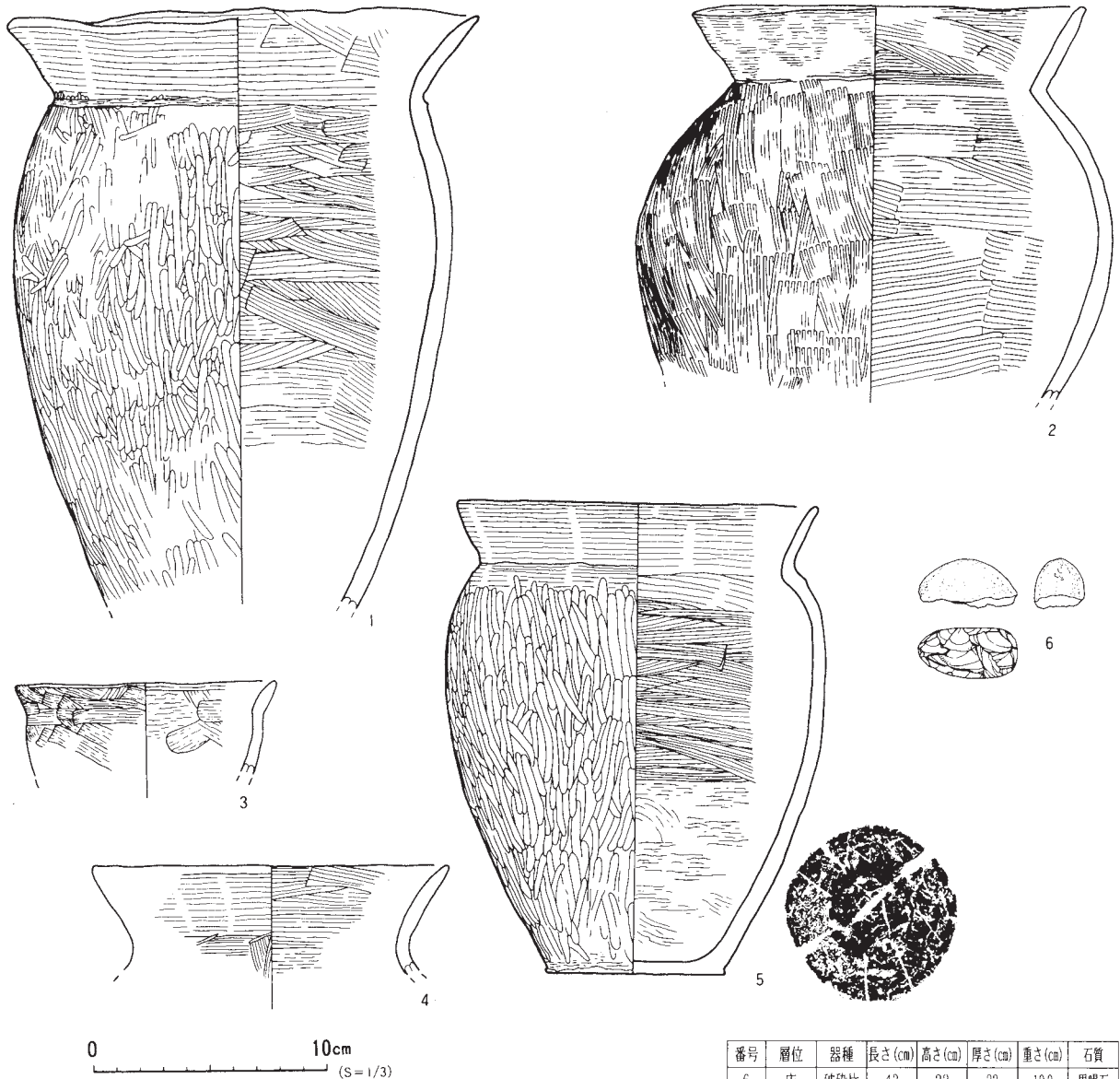
〔出土遺物〕堆積土及び床面から炭化材、焼土と土師器が出土した。

炭化材・焼土：炭化材は床面から出土した。周壁に近接して散在して出土している。部材の形状や大きさははっきりと判るものは少ないが、壁際に板材と思われるものが多い。板材の多くは、住居壁



番号	層位	器種	口(cm)	径(cm)	器高(cm)	外面調整	内面調整	備考
1	3層	坏	(17.9)	5.0	—	ハラミガキ	ハラミガキ	内黒
2	4層	坏	(14.9)	5.8	—	ハラミガキ、段部ハラナデ→ハラミガキ	ハラミガキ	内黒、内外面段有り
3	3層	坏	13.1	6.7	—	ハラミガキ	ハラミガキ	No①、内黒、外面段有り
4	床直	甕	(19.2)	27.7	(8.7)	口縁部ヨコナデ(ハラナデ)、胴部ハラミガキ	口縁部ハラナデ、胴部弱いハラナデ	No②
5	床	甕	(15.7)	15.6	(7.9)	口縁部ヨコナデ→ハラミガキ、胴部ハラミガキ	口唇部ヨコナデ、胴部ハラナデ	No③、無底式
6	床	甕	(13.4)	11.5	(6.8)	口縁部ヨコナデ、胴部ハラナデ	ハラナデ	No④、多孔式(10~12?の穿孔)
7	床	甕	—	(9.9)	(7.4)	ナデ→ハラミガキ	ハラナ	No⑤、底面木炭痕
8	3層	甕	—	(6.7)	(8.7)	ハラナデ	ハラナデ	
9	床	甕	14.8	(14.2)	—	口縁部ヨコナデ、胴部ハラナデ	ハラナデ	No⑥

第13図 第3号竪穴住居跡出土遺物(1)



番号	層位	器種	長さ(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	重さ(cm)	石質
6	床	破砕片	43	22	22	19.0	黒曜石

番号	層位	器種	口(cm)	径(cm)	器高(cm)	外面調整	内面調整	備考
1	床	甕	(20.7)	(24.9)	-	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ	ヘラナデ	No.⑦
2	床直	甕	(17.4)	(17.9)	-	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヘラナデ、胴部ハケメ	No.⑨
3	3層	甕	(11.2)	(3.9)	-	ハケメ→ヘラナデ	ナデ	
4	床	甕	(15.4)	(4.6)	-	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	ヘラナデ	No.⑧
5	床	甕	15.7	20.1	7.7	口縁～頸部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ	口縁～胴部ヘラナデ、下位ナデ	No.⑩、底面木葉痕

第14図 第3号竪穴住居跡出土遺物(2)

面の腰板であった可能性がある。柱穴周辺のもの、柱材の可能性はある。焼土は小規模範囲に点在して検出された。床面からやや浮いた状態のものと、炭化材の上に被るものがある。

遺物：(第13図、第14図) 堆積土と床面から総数約620点の土師器片が出土した。堆積土中からの遺物は第3層から出土している。細片がほとんどで復元図示できるもの少ない。床面出土のものは、かまどの周辺と南側壁際に多く出土している。他に、両極打法により打割されたと思われる黒曜石片(第14図6)が出土している。坏(第13図1～3)すべて丸みが若干残るが平底状の底部である。同図1は底部と体部の境に角を持つ、体部から口縁部は直立する。内外面ともにヘラミガキされる。

同図2は底部から弧状に立ち上がり体部中位の段から口縁部にかけて直立する。段の直上はやや窪み、この部分に一部ヘラナデがみられるほか、内外面ともにヘラミガキされる。同図3は底部から弧状に立ち上がり口端はやや内反する。不明瞭だが口縁直下に段を持つ。調整は内外面ともにヘラミガキされる。坏はすべて内面黒色処理されている。甑（第13図5、6）同図5は単孔の甑である。底部の孔端は平坦に面取りされている。調整は口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキである。ミガキは口縁部まで及んでいる。内面はナデである。同図6は多孔の甑である。底部から弧状に立ち上がり口端はやや内反する。破損によりはっきりしないが、10～11個の穴が開けられていたものと思われる。調整は内外面ともにヘラナデされる。甕（第13図4、7～9、第14図1～5）第13図4は不明瞭だが頸部に段を持ち、段から直立した後、口縁が強く外反する。口唇部は面取りされたように平滑である。口縁部ヘラナデ、胴部外面はヘラミガキされる。口縁内面は整然としたナデで、胴部内面は弱いヘラナデである。同図9は頸部に段を持ち、口縁部は外反する。調整は内外面ともヘラナデである。同図8は底部厚のある破片である。同様なものに第14図7がある。第14図1は胴部上半が膨らみ、頸部に沈線による段を持つ。段から口縁部は強く屈曲する。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面がヘラミガキ、内面がヘラナデである。同図5は不明瞭だが頸部に段を持つ。器体の調整は同図1の甕と同じである。同図2は胴部上半に強い膨らみを持つ、球胴甕の可能性もある。調整は口縁部ナデ、胴部はハケメであり、特に外面は細かく施されている。同図3は小型の甕に分類したが、器種的に異なる可能性がある。調整はヘラナデであるが、その下にハケメが一部にみられる。

〔小結〕本遺構は火災住居跡である。堆積土の状態および出土遺物から、火災消失後に一時土や遺物の廃棄場所として使われている。約10世紀頃までには完全に自然埋没している。住居の帰属時期は床面出土遺物から7世紀中葉頃から8世紀前葉頃のものと思われる。

第4号竪穴住居跡（第15図～第17図）

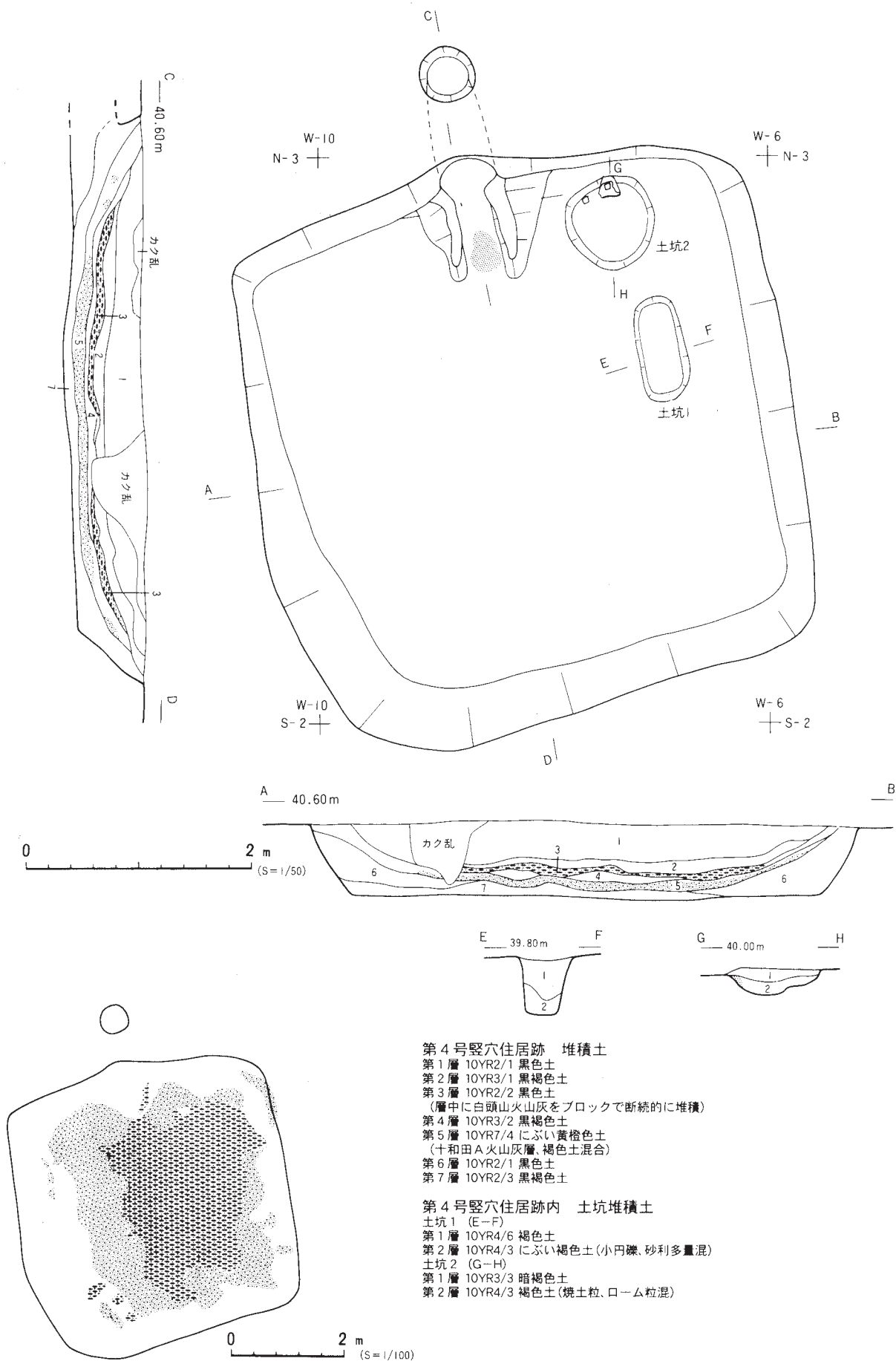
〔位置と確認〕調査区の西側E・F-8・9グリッドに位置する。第Ⅱ層掘り下げ時に、黒色で隅丸方形プランで検出した。プランの内側には火山灰がリング状に巡る。遺構の掘り込み面は第Ⅱ層中であるが、第Ⅲ層面で全体を検出し精査にあたった。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形である。大きさは、床面の北辺で約4.2m・南辺で約3.5m・東西辺で約3.8mあり、床面積は16.6㎡である。住居の主軸方向は磁北から西に9度振れている。

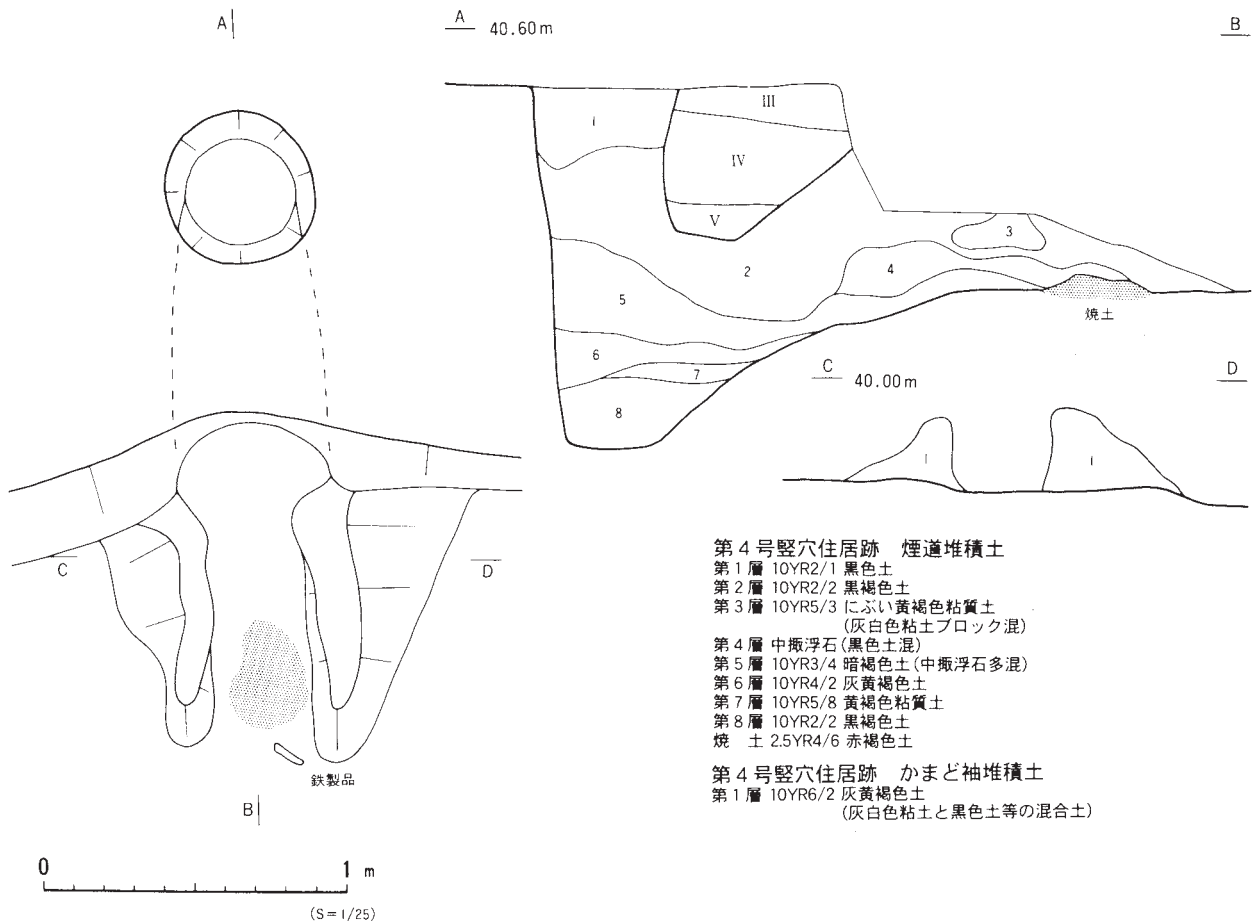
〔堆積土〕住居内堆積土は、自然堆積で7層に分けられる。黒色土と黒褐色土を主体にした土である。第3層中には、白頭山火山灰がブロック状に堆積する。第5層中には、十和田A火山灰が厚く堆積している。第4層の黒褐色土は最大10cmの厚さをもち、二つの火山灰を含む層間に介在している。

〔床・壁〕床面は、中央部が緩く窪んでいるほか、東側壁直下から約1m幅でやや高くなっている。掘形はなく、第Ⅵ層を掘り込んで直接床面としている。壁は床面から開く様に立ち上がる。検出面から床面まで、およそ60cmの高さである。

〔かまど〕かまどは、トンネル式で北壁のほぼ中央で検出された。燃焼部幅は約30cmで、燃焼部奥壁まで約70cmある。かまど袖は大方崩れていたが、基礎と思われる部分は残っていた。灰白色粘土と黒色土を混合したもので、床面に盛って構築している。右袖は長さ90cm、高さ約30cm、左袖は長さ80cm、高さ約25cmである。煙道は長さ1.3m程、幅50cm程である。煙道底面は平坦で、煙出孔底



第15図 第4号竖穴住居跡(1)



第16図 第4号竪穴住居跡(2)・カマド

面に向かって傾斜して作られている。堆積土は8層に分けられる。ほとんどが天井の崩落土と考えられる。煙出孔はほぼ円形に掘り込まれている。

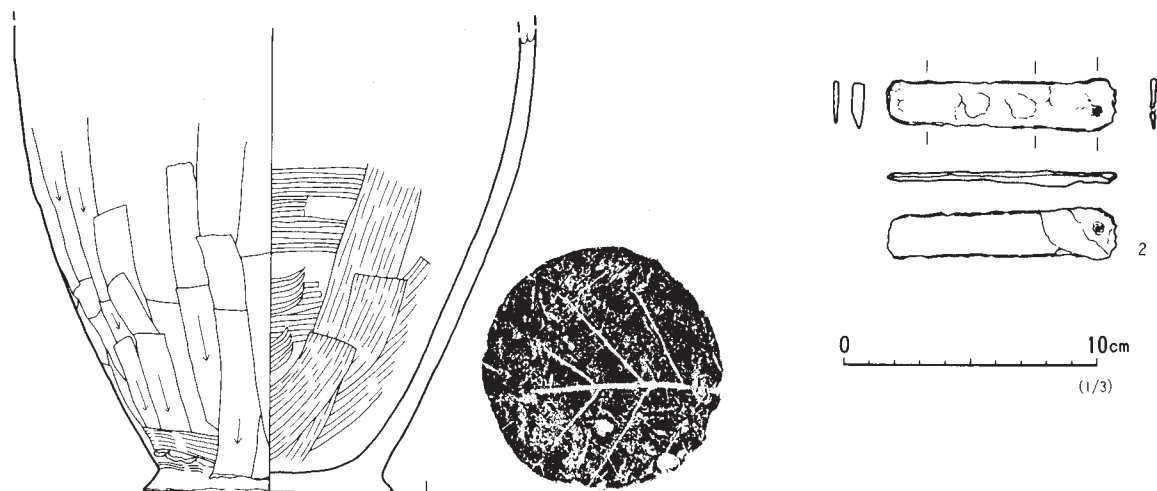
[柱穴] 住居の柱穴と考えられるものは検出されなかった。

[その他] 住居内に2基の土坑を検出した。1基はかまど右袖脇に作られており、径が70cm程の円形で、深さは床面から20cm程である。もう1基は、住居の東側、かまど脇の土坑と30cm離れてある。形状は45cm×90cmの隅丸長方形で、深さは50cmある。2基とも埋められている。

[出土遺物] 本住居からの出土遺物は少ない。かまど脇の土坑上面から、土師器甕が1点出土したほか、かまど燃焼部から鉄製品が1点出土した。また、住居の南側から礫が1点出土している。土師器甕(第17図1)は胴部上半部を欠失している。調整は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデされている。底面には木葉痕が残る。鉄製品(第17図2)は長さ9cm、幅2cmの板状で厚さは5mmある。片方の端近くに穿孔があり、片側の側縁は薄い。苧引金の可能性がある。

[小結] 本住居跡は、堆積土中の火山灰の状態から10世紀までには廃絶している。出土遺物が少なく帰属時期を決定できないが、他の住居跡とは異なり火山灰の堆積が床面に近く、火災にもあっていないことから、他の住居跡よりも新しい時期に帰属するものと考えている。

(小田川・新山)



番号	層位	器種	口(cm)	径(cm)	器高(cm)	外面調整	内面調整	備考
1	床	甕	—	(18.4)	9.7	ハラケズリ 底部ヘラナデ	ハケメーヘラナデ	底面木痕

番号	出土地点	部位	器種	長さ(cm)	幅(cm)
2	4住	カマド底面	不明	91	24

第17図 第4号竪穴住居跡出土遺物

第2節 周溝 (第18図) 本調査では、1条だけ検出された。

第1号周溝

[位置と確認] 調査区東側境界のF-15グリッドに位置する。粗掘り時点で不整な円形として確認したが、第3号住居跡とあわせ、第Ⅲ層面で検出した。掘り込みは、第Ⅱ層中からである。

[平面形・規模] 大半が調査区外へ延びているため全体形は不明であるが、おそらく円形周溝になるものと思われる。溝幅は検出面で40~55cmであるが、第Ⅱ層面上端幅で約70cmある。

[堆積土] 堆積土は2層に分けられる。第1層は、第Ⅱ層と酷似する土であるがやや黒色が強く、白色岩粒を混入させる。第2層中には中掬浮石粒を多量に混入する。

[底面・壁] 底面には起伏があり、北側から南側に向かって傾斜している。北側は第Ⅲ層までの掘り込みであるが、南側は第Ⅳ層まで掘り込まれている。壁はほぼ直に立ち上がるが、いびつである。

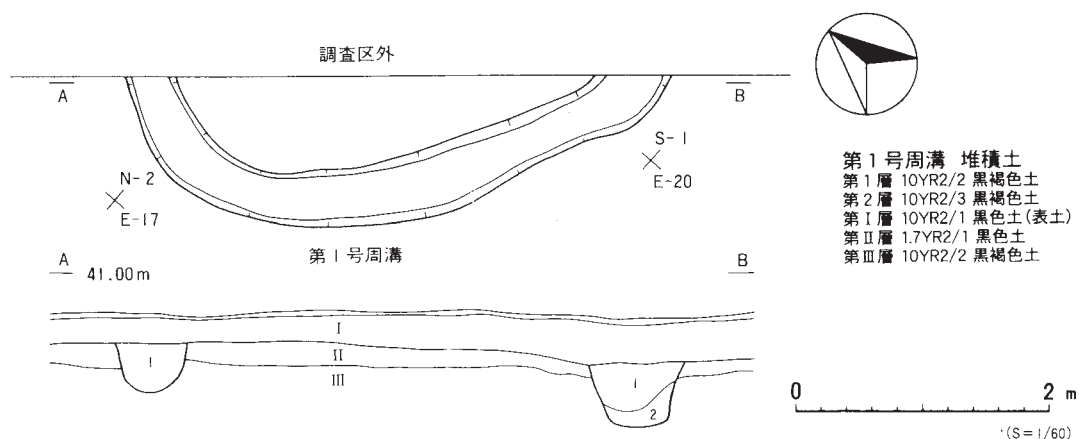
[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 本遺構は大半が調査区外にあり帰属時期等の詳細は不明である。近接する、竪穴住居跡と同時存在は考え難いが、極端に隔たりのない前後する時期にあったものと考えておく。(新山)

第3節 土坑 (第19図~第20図)

本調査では総数8基の土坑が検出された。第1号土坑は、土質から竪穴住居跡とほぼ同一時期のものと考えられる。中掬浮石層撤去後、第Ⅴ層面で検出された小土坑3基は、同一面から出土した遺物から、縄文時代前期初頭に比定されるものとする。また、土質と形態から縄文時代に比定されると思われる溝状土坑が3基あるが、詳細な時期は不明である。

第1号土坑以外は、出土遺物がないことから[出土遺物]の項目を削除して記述する。



第18図 第1号周溝

第1号土坑 (第19図)

[位置と確認] 調査区の西側C・D-5グリッドに位置する。表土撤去後に確認したが、掘り下げてしまい形状を大きく壊してしまった。第Ⅲ層面で検出した際、第2号土坑と重複し、本遺構の方が新しいことが判明した。[平面形・規模] 掘り下げてしまったため詳細に判らないが、約2.3m×1.2m程の楕円形ないしは隅丸長形状であったものと思われる。[堆積土] 粒径3~10の白色岩粒を含んだ黒色土が堆積していた。[底面・壁] 詳細に判らないが、底面は皿状となる。[出土遺物] 堆積土中より土師器が26点出土したが、いずれも甕の細片で図示できるものはない。

[小結] 出土遺物と土質から、竪穴住居跡とほぼ同時期のものと考えている。

第2号土坑 (第19図)

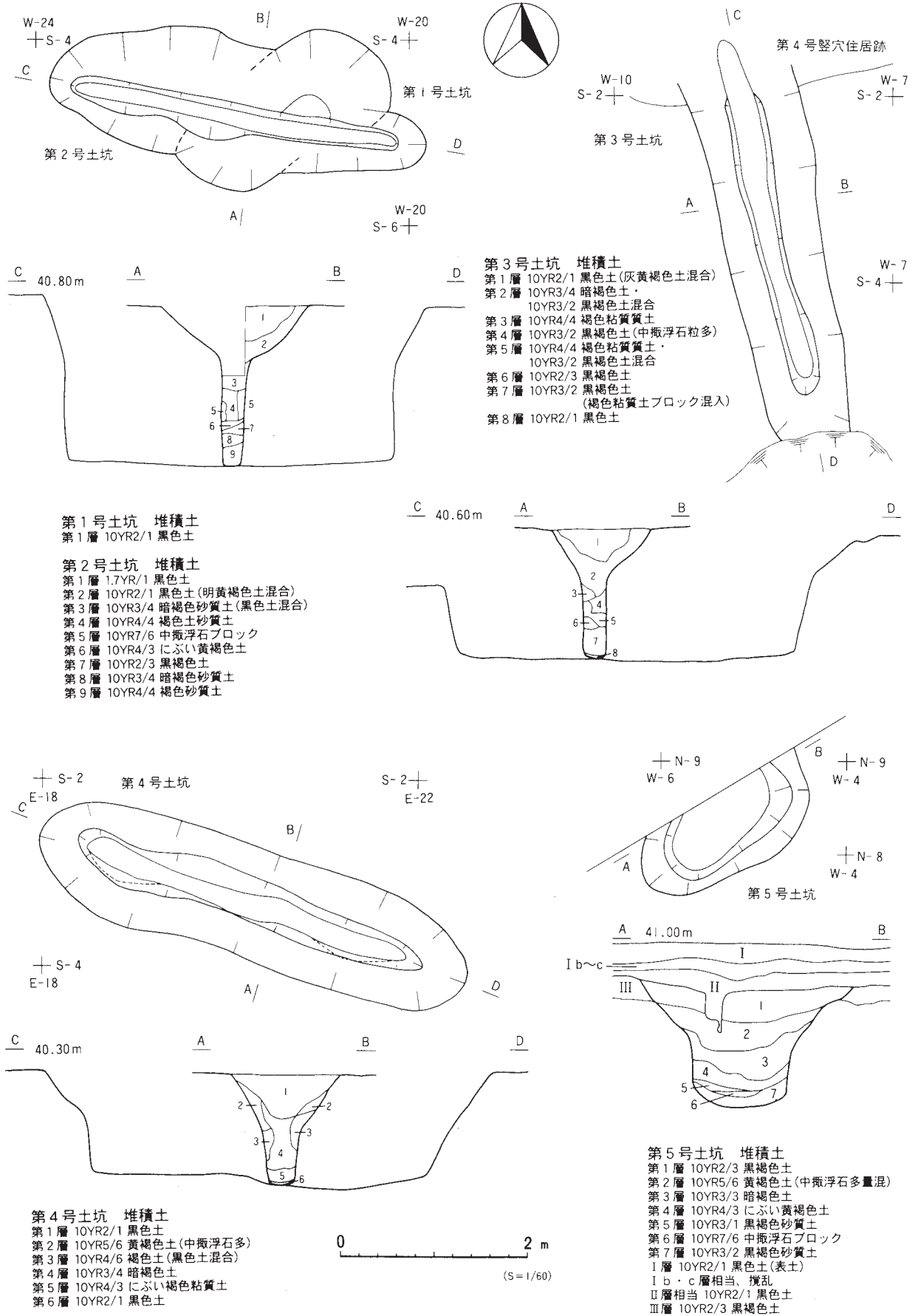
[位置と確認] C・D-5グリッドに位置する。第1号土坑と重複しており本遺構の方が古い。[平面形・規模] 開口部は崩れているが、長軸で4.1m、幅約1.4mである。深さは検出面から1.7mあり、断面形はY字型である。[堆積土] 9層に分けられる。第5層は中礫浮石のブロックで、下位層にも多く混入する。[底面・壁] 底面は平坦である。周壁の第Ⅳ層を壁としている部分は崩落している。

第3号土坑 (第19図)

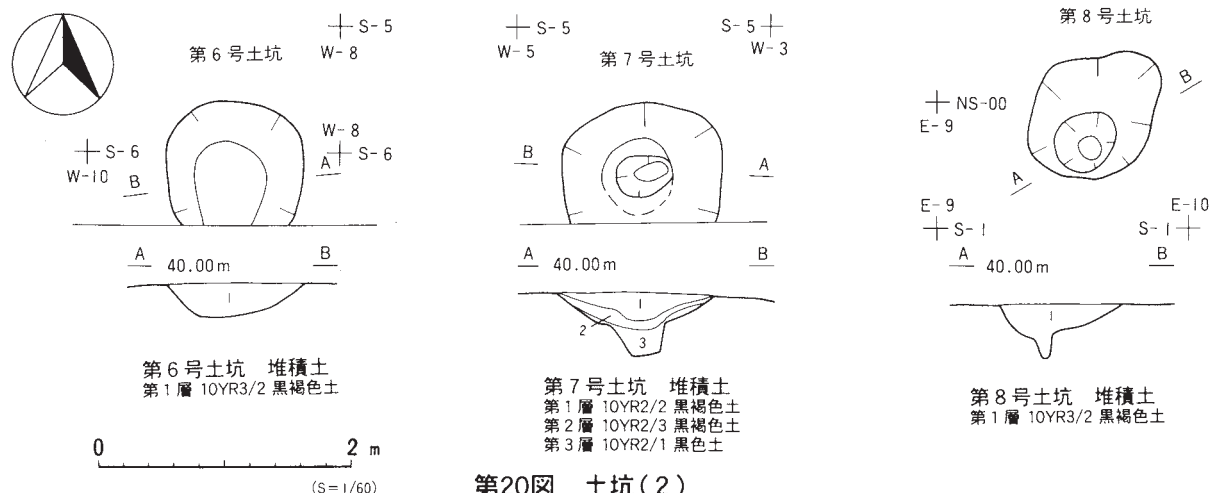
[位置と確認] D・E-8・9グリッドに位置する。第1号竪穴住居跡検出時に、住居跡の南西部分に重複して検出した。本遺構が古い。[平面形・規模] 本遺構の北側は住居跡に壊されているほか、南端部は現代の攪乱に一部壊されているため、全体は不明である。底面長軸で3.9mあることから、開口部は4.5m程はあったものと思われる。開口部幅は約1.2mである。深さは検出面から1.4mあり、断面形はY字型である。[堆積土] 8層に分けられる。第2層以下は、壁の崩落土と黒色土の混合土と思われる。[底面・壁] 底面は平坦である。周壁のうち第Ⅳ層を壁としている部分は崩落している。

第4号土坑 (第19図)

[位置と確認] 調査区の東側E-15・16グリッドに位置する。この部分には、道路建設の際の盛土が厚くあったため、重機を用い第Ⅲ層面まで撤去した際に検出した。[平面形・規模] 開口部長軸で4.8m、開口部幅約1.2mである。深さは検出面から1.2mあり、断面形は屈曲のやや弱いY字型である。[堆積土] 6層に分けられる。褐色土を主体に、黒色土と中礫浮石粒が多量に混入する。[底面・壁] 底面はやや蛇行し、東側に一段深い。両端付近の壁は崩落しており抉れている。



第19図 土坑(1)



第20図 土坑(2)

第5号土坑 (第19図)

[位置と確認] H-9グリッドの調査区境界に位置する。第IV層面で黒褐色の落ち込みを検出した。
 [平面形・規模] 一部調査区外に延びているため、全体形は把握できない。検出した部分の開口部長軸で2.1m、底面長軸で1.2m程である。おそらく不整な楕円形であるものと思われる。
 [堆積土] 7層に分けられる。全体に褐色土を主体にした土で、黒色土と中礫浮石粒が混合する。特に第2層には多量に混合し、第5層以下は砂質が強い。自然堆積と判断している。
 [底面・壁] 底面は緩く湾曲している。壁は、底面から直に立ち上がり中位(第IV層)で大きく開く。
 [小結] 検出状況から、中礫浮石堆積以降に比定されるものと考え。

第6号土坑 (第20図)

[位置と確認] D-8グリッドに位置する。調査区の南側は、道路建設時に攪乱を大きく受けている。攪乱層直下には中礫浮石層が薄層で僅かに残っており、撤去後に第V層面で検出した。
 [平面形・規模] 一部調査区外にあるが、径が約1m程の不整円形となるものと思われる。検出面からの深さは25cm程である。
 [堆積土] 1層で、黒色土に暗褐色土と明黄褐色ローム粒が混入する。
 [底面・壁] 底面はボール状で、周壁はなだらかである。
 [小結] 第IV層中礫浮石層撤去後に、縄文時代前期初頭の土器群の面で検出したことから、土器群の時期に比定されるものと考え。

第7号土坑 (第20図)

[位置と確認] D-9・10グリッドに位置する。検出状況は、第6号土坑と同じである。
 [平面形・規模] 平面形は、開口部が約1.4mの不整円形か隅丸形状になるものと思われる。深さは検出面から約55cmである。
 [堆積土] 黒色土を主体にした土で、3層に分けられる。明黄褐色ローム粒が混入する。
 [底面・壁] 底面は一段下がり不整楕円形となる。周壁は底面から直に立ち上がり中位で大きく開く。
 [小結] 検出状況から、前期初頭土器群とほぼ同時期に比定されるものと考え。

第8号土坑 (第20図)

[位置と確認] E・F-13グリッドに位置する。第V層面で黒色土の不整な落ち込みを検出した。
 [平面形・規模] 1m×1.4mの不整楕円形である。深さは検出面から約25cmである。
 [堆積土] 黒色土に暗褐色土とローム粒が混入する単層である。
 [底面・壁] 底面はボール状で、南側にやや深く偏っている。周壁はなだらかである。
 [小結] 前期初頭土器群とほぼ同時期に比定されるものと考え。

(新山)

第3章 遺構外出土遺物

第1節 土師器

本調査で出土した遺構外の土師器は22点である。坏の破片2点のほかは甕の破片である。すべて細片で図示できるものはない。出土位置は、各住居間の空白地でE～G-11～13集中する。層位はⅡ層中である。

第2節 縄文土器 (第22図～第24図)

本調査で出土した遺構外の縄文土器は総数約680点程である。大多数の570点程が第Ⅴ層から出土した。他に、第Ⅲ層上面より同一個体片約100点、第Ⅱ層中より8点の土器片が出土した。以下に、出土土器について記述する。

第Ⅱ層出土土器 (第22図1～5)

E-6、F・G-11・12グリッドから出土した。第・図1～3は口縁部破片で、同図1と2の口唇は平縁で工具により削がれ内傾している。同図1と3の口縁はほぼ直立するが、同図2はやや外側に開く。器厚は薄く、胎土は緻密で堅い。地文は縄文で、2と3には単節LRの斜縄文が施される。同図4と5は胴部片で、細い0段多条の原体で羽状に施文されるものである。

第Ⅲ層出土土器 (第22図6～11)

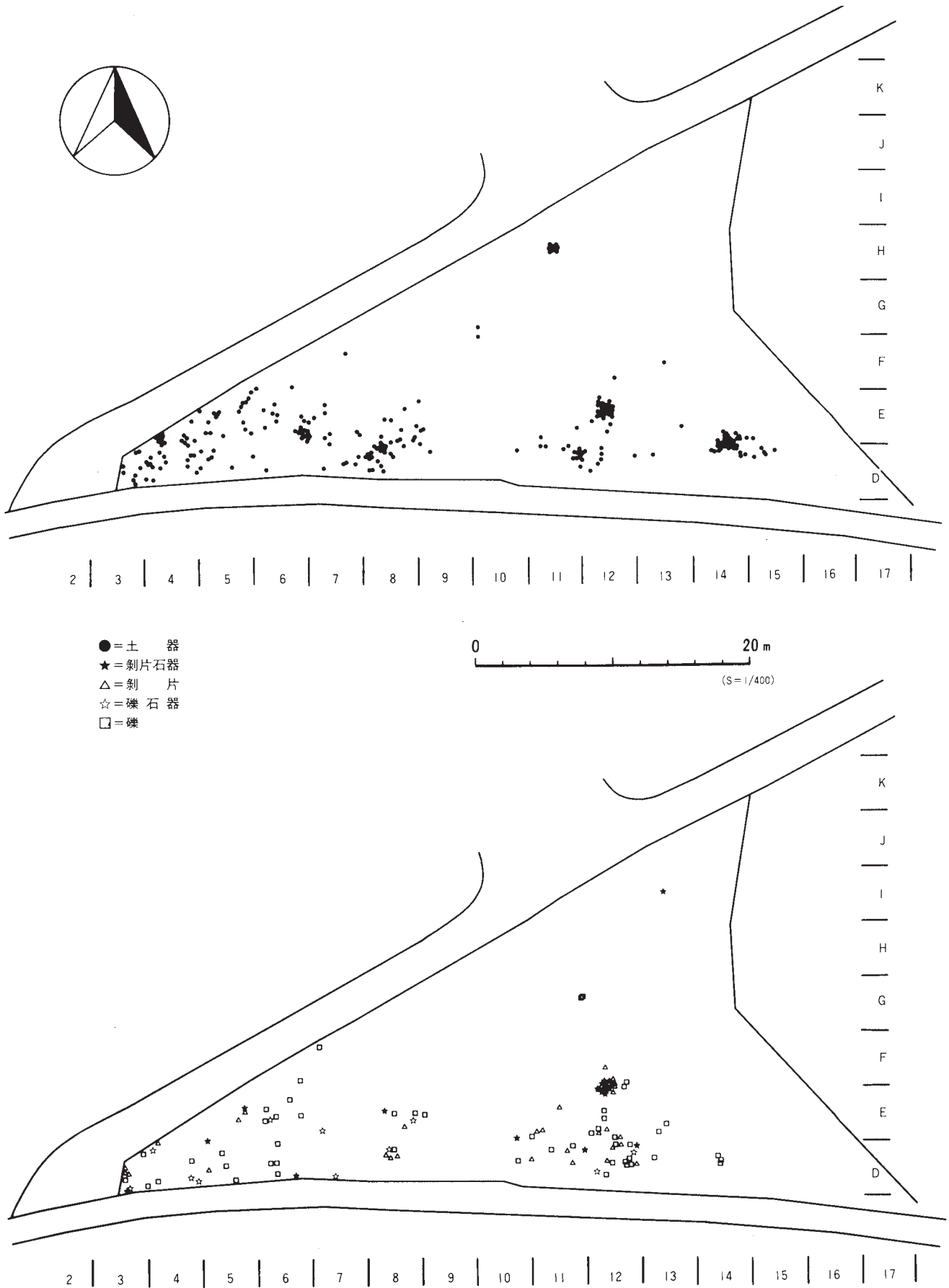
E・F-13グリッドにまたがり、約1.4m×60cmの範囲に集中して出土した。すべて同一個体と思われるが、胎土が脆く破損面の風化も激しいため、接合できるものはない。出土部位は、胴部と底部の一部である。器厚は、胴部片で9mm～11mm、底部付近では15mm程と厚い。地文には、0段多条の斜縄文が施されている。底部は平底である。

第Ⅴ層出土遺物 (第22図12～16、第23図、第24図)

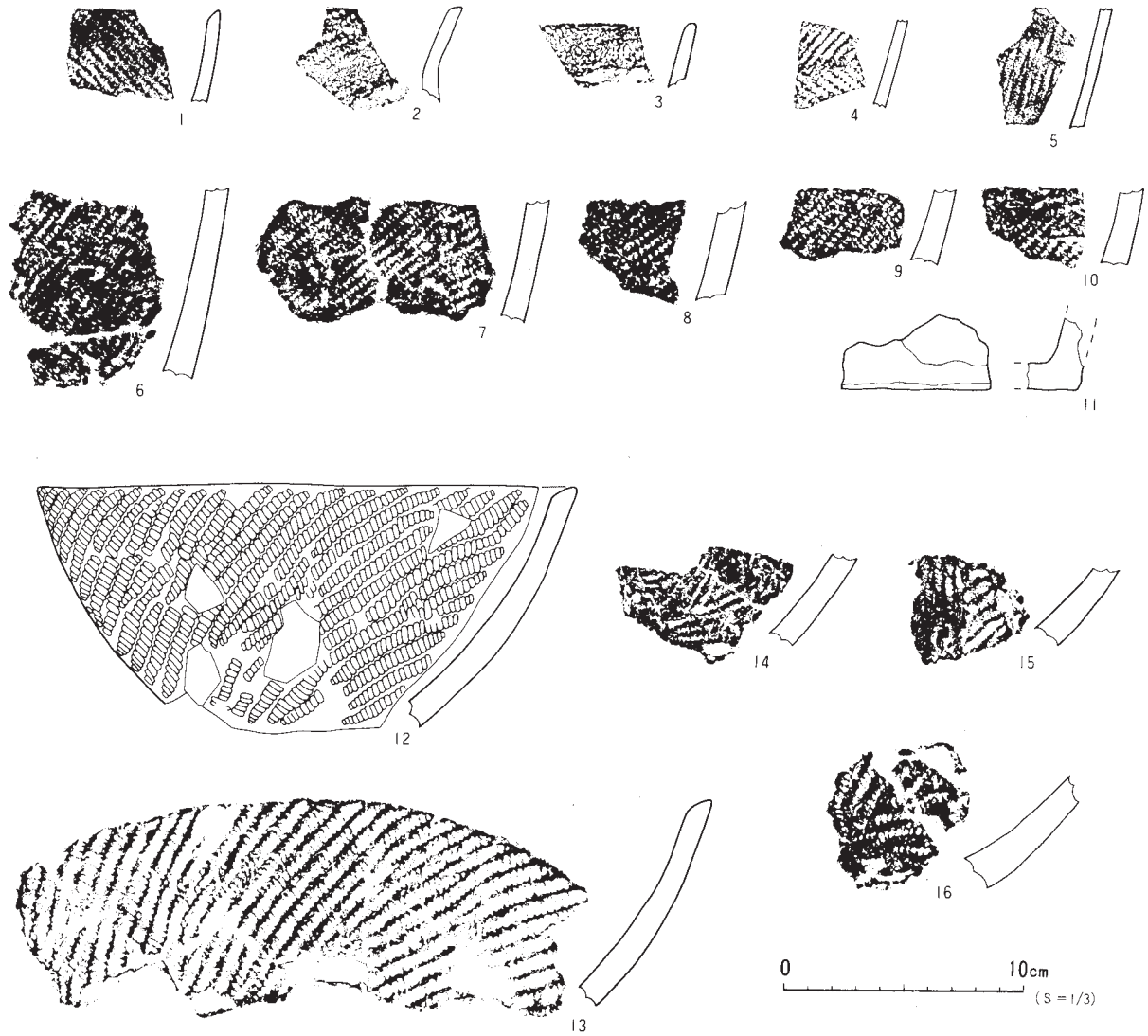
中振浮石層の下層から出土した。第21図に示した平面分布のように、F-グリッドラインの南側に集中し、数カ所のブロックにわかれる。個体数は多いが、全体の器形が判るものは第・図に示したものだけである。これらは、器形および施文文様から縄文時代前期初頭の、長七谷地Ⅲ群土器に比定されるものである。

第22図12～16は同一個体である。口径は22.5cm程で、器厚は胴部で10mm、底部付近で15mmある。器形は底部が丸底風の尖底となるサラダボール状である。口唇上端部は工具により内傾するように削がれている。文様は0段多条の斜縄文が施される。底部付近の施文は粗く、施文方向も一定していない。

第23図は口縁部片である。同図1～12は、平口縁で口唇上端が内傾する特徴がある。同図13と14は丸みのある口唇である。同図15と16はやや丸みのある平口縁で、口唇は折り返されて肥厚している。同図17は鋸歯状の口縁部で、折り返された口縁の口唇とその上端に工具による大きな刻み込みをもつ。施文される縄文は、0段多条の原体RLとLRの異原体を用いて、横位回転による羽状縄文を基調としている。また、斜行縄文が施文されるものもある。羽状に施文されるなかには、第23図1・8や第24図13など胴部施文が重複するものがある。また、第23図1・2、8～10など口唇部に短い横走縄文が施される口縁部文様帯を意識したものもある。第23図15・16と第24図17・19は複節の斜行縄文が施される。第23図18は無節の縄文、同図19は撚糸文が施される。第24図20は単軸絡条体回転文が施文される。

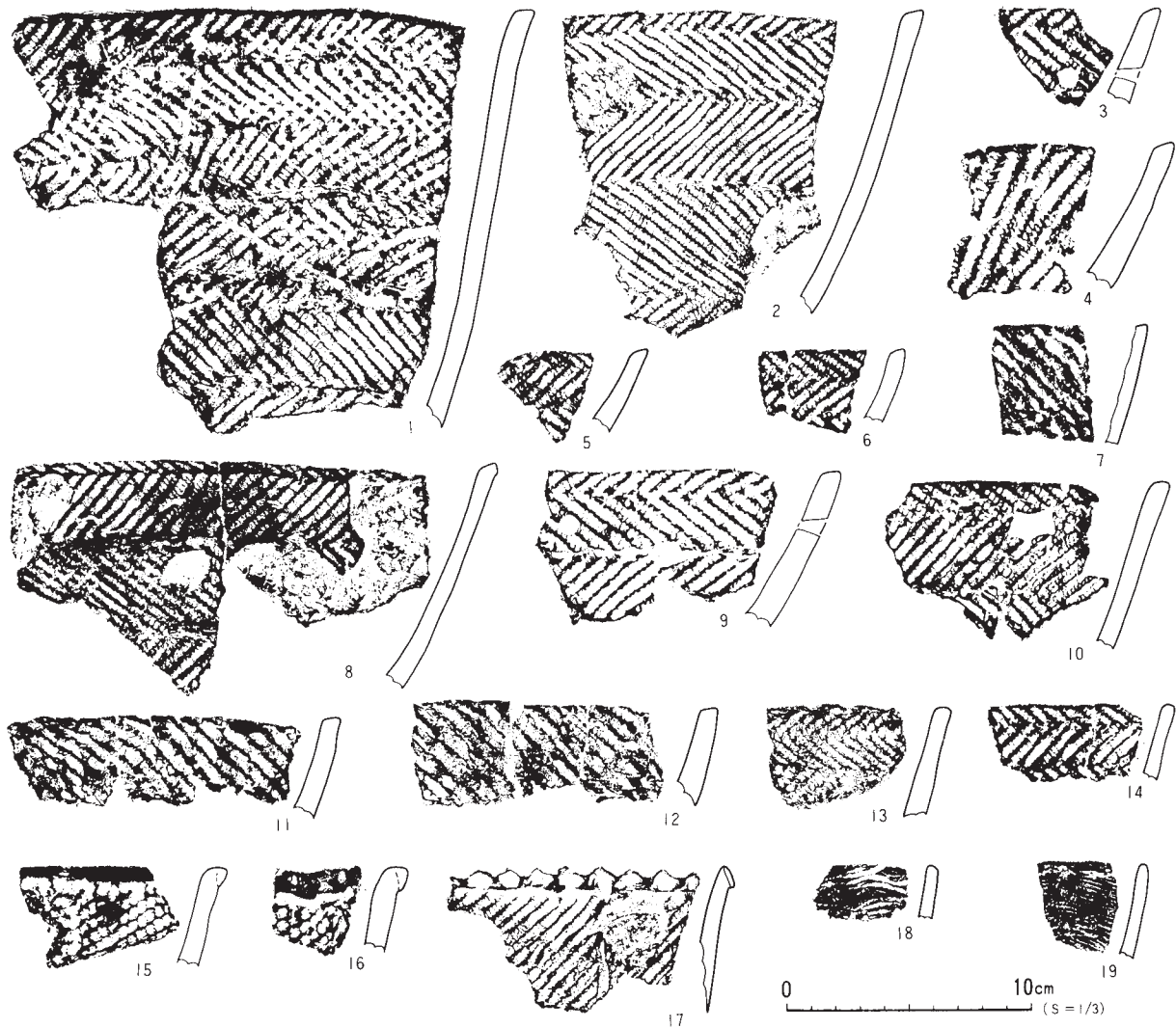


第21図 第V層出土遺物分布



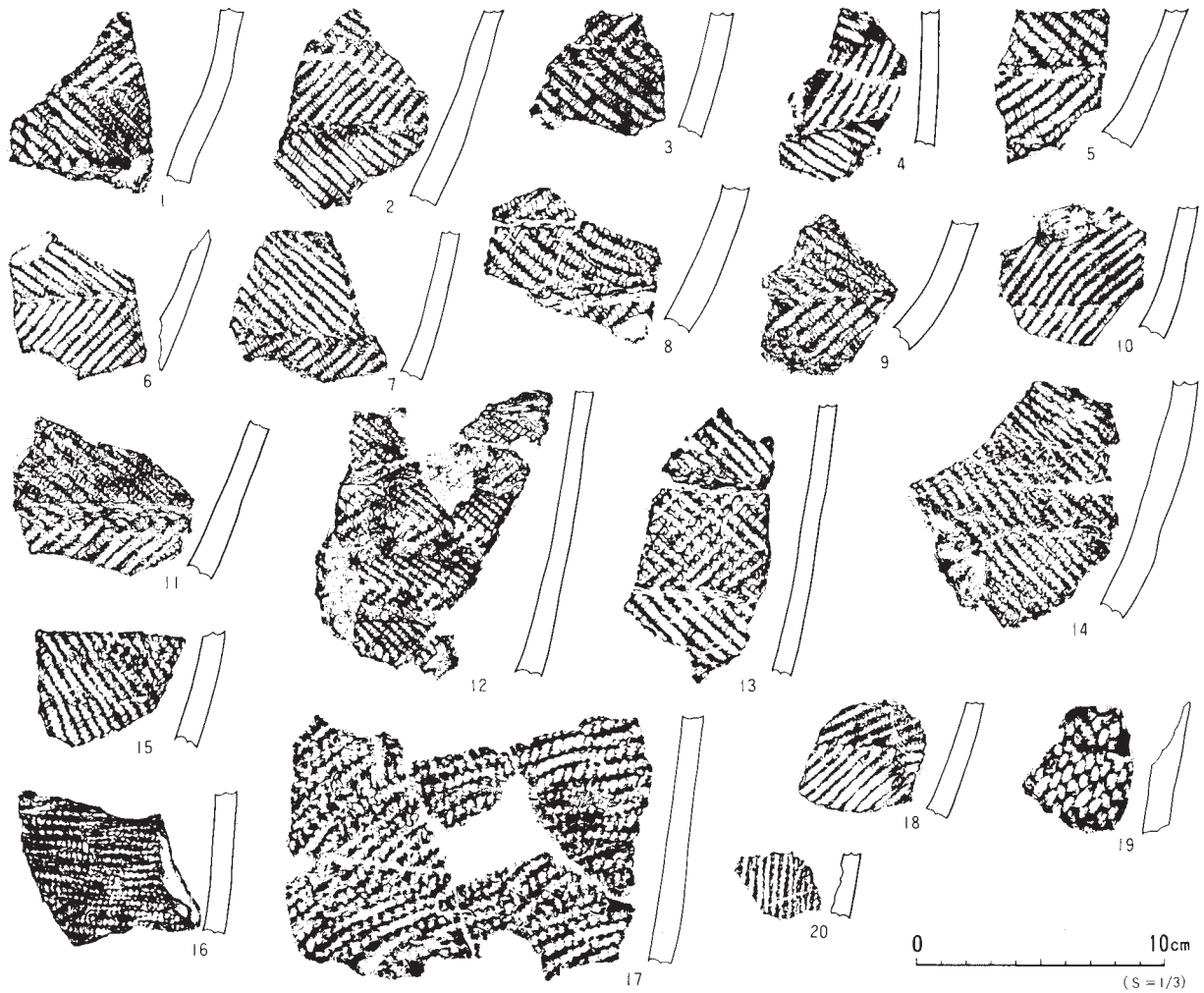
番号	位置	層位	器種	部位	胎土	焼成	外面	内面	備考	整理
1	F-11	Ⅱ層	深鉢	口縁	砂・繊維	堅緻	単節R L横位回転施文	ナデ	スス	1
2	E-6	Ⅱ層	深鉢	口縁	砂・繊維	堅緻	単節L R回転施文	ナデ		2
3	E-6	Ⅱ層	深鉢	口縁	砂・繊維	堅緻	単節L R多方向に回転施	ナデ		3
4	G-11	Ⅱ層	深鉢	胴	砂・繊維	堅緻	0段多条L R横位回転施文、羽状縄文	ナデ		4
5	F-11	Ⅱ層	深鉢	口縁	砂・繊維	堅緻	0段多条L R横位回転施文→ナデ、羽状	ミガキ		5
6	F-13	Ⅱ層下位	深鉢	胴	赤色砂粒・繊維	堅緻	0段多条L R 横位回転施文		6~11同一個体	6
7	F-13	Ⅱ層下位	深鉢	胴	赤色砂粒・繊維	堅緻	0段多条L R 横位回転施文		6~11同一個体	7
8	F-13	Ⅱ層下位	深鉢	胴	赤色砂粒・繊維	堅緻	0段多条L R 横位回転施文		6~11同一個体	8
9	F-13	Ⅱ層下位	深鉢	胴	赤色砂粒・繊維	堅緻	0段多条L R 横位回転施文		6~11同一個体	9
10	F-13	Ⅱ層下位	深鉢	胴	赤色砂粒・繊維	堅緻	0段多条L R 横位回転施文		6~11同一個体	10
11	F-13	Ⅱ層下位	深鉢	底	砂・繊維	堅緻	ナデか	剥離	6~11同一個体	11
12	H-11	V層	深鉢	口縁~胴上半	繊維・赤色砂粒	堅緻	0段多条L R横位回転施文→口唇内削ぎ			12
13	H-11	V層	深鉢	口縁~胴上半	繊維・赤色砂粒	堅緻	0段多条L R横位回転施文→口唇内削ぎ			13
14	H-11	V層	深鉢	胴	繊維	堅緻	0段多条L R	内面黒色		14
15	H-11	V層	深鉢	胴	繊維	堅緻	0段多条L R→ヘラナデ	内面黒色		15
16	H-11	V層	深鉢	底部付近	繊維	堅緻	0段多条L Rを多方向に施文			16

第22図 遺構外出土土器(1)



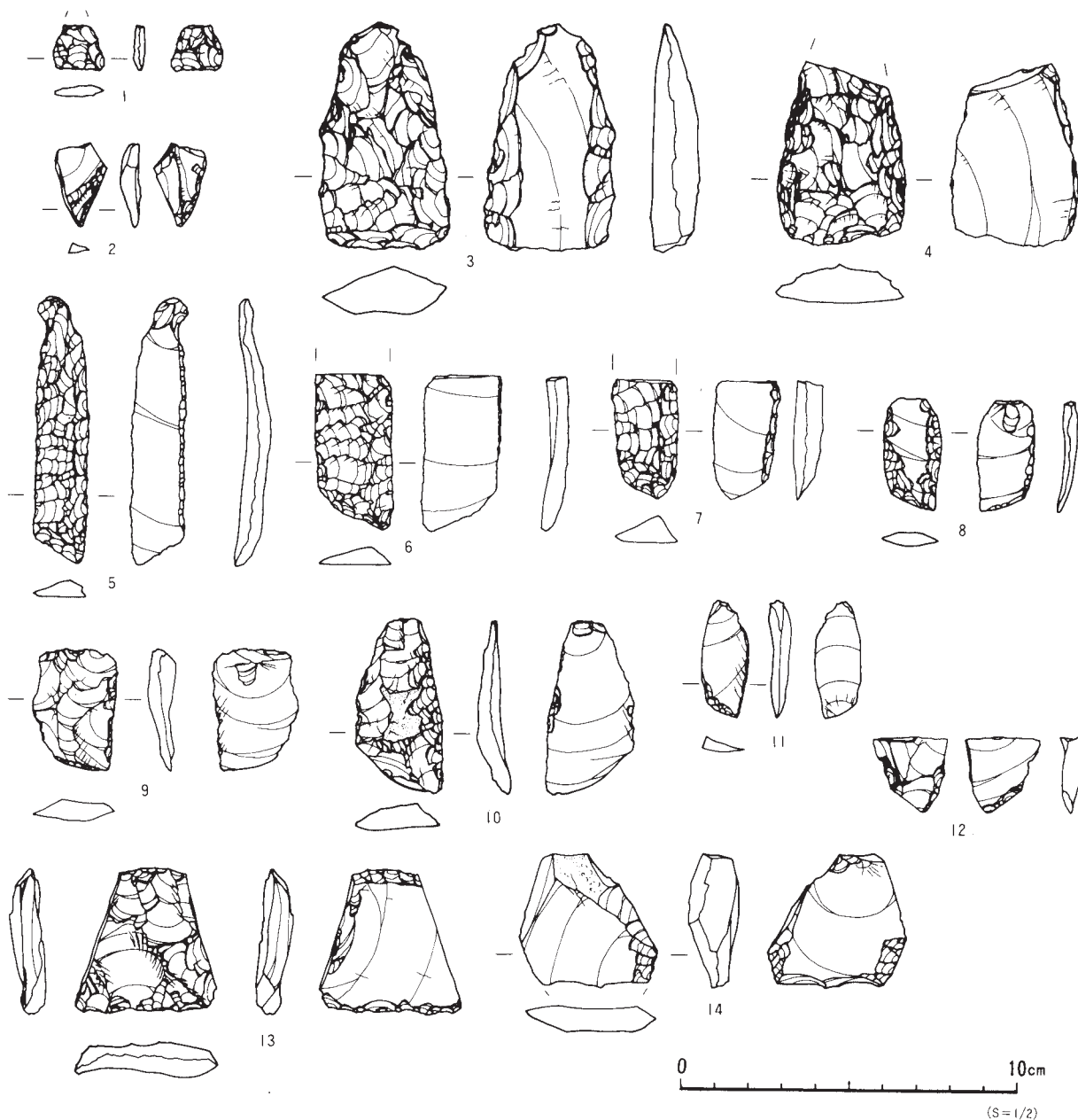
番号	位置	層位	器種	部位	胎土	焼成	外 面	内面	備考	整理
1	E-4	V層	深鉢	口縁	繊維・砂	堅緻	0段多条RL・LR横位→口唇内削ぎ、羽状	ナデ		31
2	D-4	V層	深鉢	口縁	繊維・砂	堅緻	0段多条RL・LR横位→口唇内削ぎ、羽状	ナデ		30
3	D-8	V層	深鉢	口縁	繊維・砂	堅緻	0段多条RL・LR横位→口唇内削ぎ、片面穿孔、羽状			59
4	D-8	V層	深鉢	口縁	繊維・砂	堅緻	0段多条RL・LR横位→口唇内削ぎ	ナデ		25
5	E-12	V層	深鉢	口縁	繊維・赤色砂	堅緻	0段多条RL・LR横位→口唇内削ぎ、羽状			13
6	D-8	V層	深鉢	口縁	繊維・砂	堅緻	0段多条RL・LR横位→口唇やや内削ぎ、羽状	ナデ		63
7	D-11	V層	深鉢	口縁	砂・繊維	堅緻	無節R横位回転施文→口唇内削ぎ	剥離		23
8	E-12	V層	深鉢	口縁	繊維・赤色砂粒	堅緻	0段多条RL・LR横位→口唇内削ぎ、羽状			19
9	D-8	V層	深鉢	口縁	繊維・砂	堅緻	0段多条RL・LR横位、穿孔	ナデ		65
10	D-11	V層	深鉢	口縁	繊維・赤色砂粒	軟	0段多条RL・LR横位→口唇内削ぎ、羽状	ナデ		22
11	D-12	V層	深鉢	口縁	砂・繊維	堅緻	0段多条RL・LR横位→口唇やや内削ぎ			20
12	D-12	V層	深鉢	口縁	繊維・砂	堅緻	0段多条RL横位→口唇内削ぎ			21
13	D-14	V層	深鉢	口縁	繊維・砂	堅緻	0段多条横位→口唇やや内削ぎ、羽状	ナデ		6
14	E-8	V層	深鉢	口縁	砂・繊維	やや軟	0段多条RL・LR横位→口唇やや内削ぎ、羽状	ナデ		70
15	E-5	V層	深鉢	口縁		やや軟	0段多条LRL結節横位→口唇折返し→ナデ		74と同一個体	47
16	E-4	V層	深鉢	口縁		堅緻	0段多条LRL結節横位→口唇折返し→ナデ		47と同一個体	74
17	E-4	V層	深鉢	口縁	繊維	堅緻	0段多条LR横位→口唇直下に鱗状隆帯			32
18	D-4	V層	深鉢	口縁	繊維	堅緻	無節L縦位回転施文→口唇平坦	ナデ		28
19	E-5	V層	深鉢	口縁		堅緻	燃糸L縦位→口唇ほぼ平坦、ナデ	ナデ		48

第23図 遺構外出土土器(2)



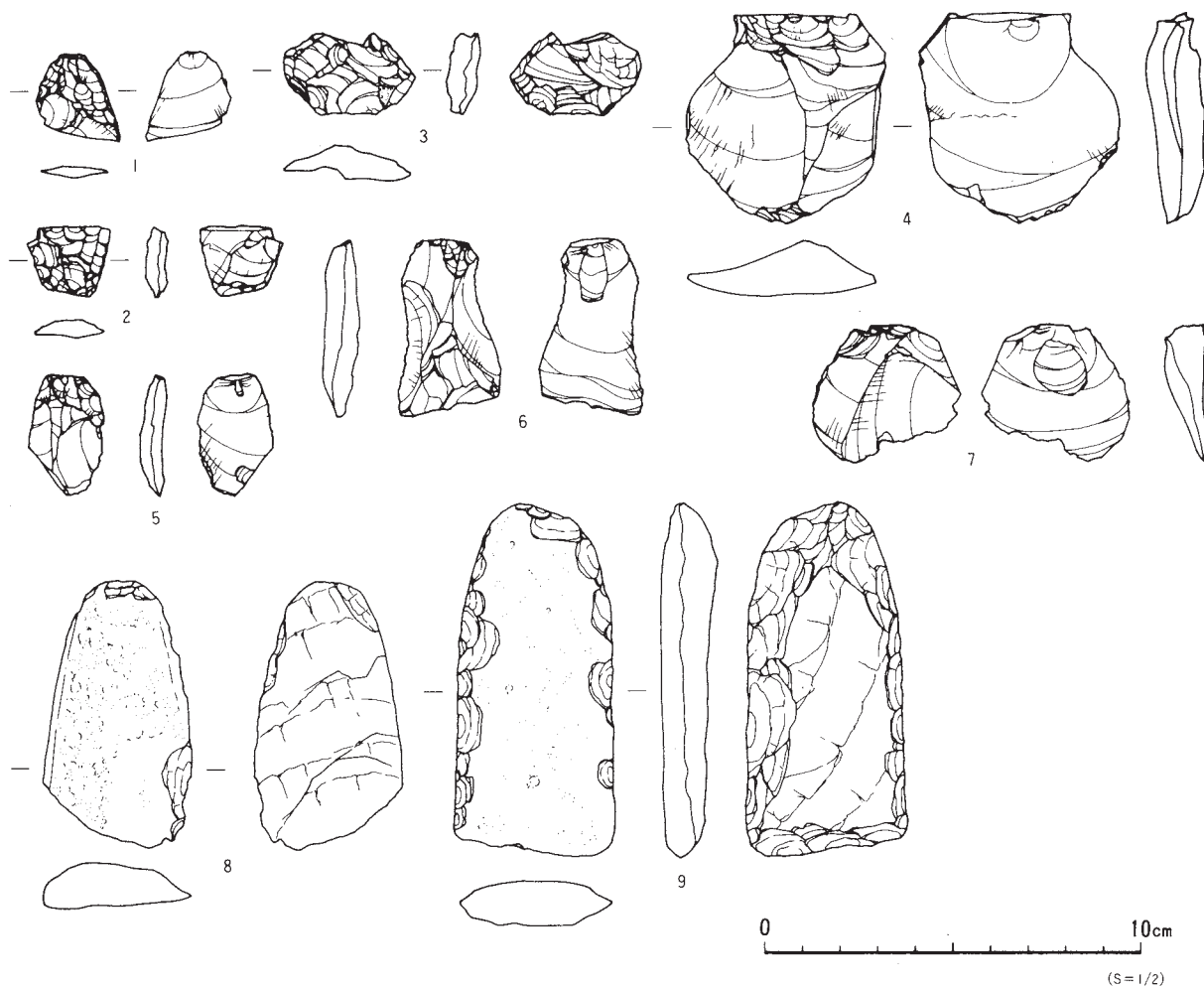
番号	位置	層位	器種	部位	胎土	焼成	外 面	内面	備 考	整理
1	D-4	V層	深鉢	胴	繊維	堅緻	0段多条RL横位回転施文、羽状			39
2	D-4	V層	深鉢	胴	繊維・砂	堅緻	0段多条横位回転施文、羽状			45
3	D-4	V層	深鉢	胴	繊維・砂	軟	0段多条RL・LR横位回転施文、羽状			36
4	E-7	V層	深鉢	胴	繊維・砂	堅緻	0段多条RL・LR結節横位回転施文、羽状			56
5	D-8	V層	深鉢	胴	繊維・砂	軟	0段多条RL・LR結節横位回転施文、羽状			64
6	E-5	V層	深鉢	胴	繊維・砂	堅緻	0段多条RL・LR横位回転施文、羽状	ナデ		46
7	G-10	V層	深鉢	胴	繊維・砂	堅緻	0段多条RL・LR横位回転施文、羽状	ナデ		26
8	D-8	V層	深鉢	胴	繊維・砂	堅緻	0段多条RL・LR結節横位回転施文、羽状			67
9	D-8	V層	深鉢	胴	繊維・砂	軟	0段多条横位回転施文			36
10	E-5	V層	深鉢	胴	繊維・砂	堅緻	0段多条LR横位回転施文			49
11	E-4	V層	深鉢	胴	繊維・砂	堅緻	0段多条RL・LR結節横位回転施文、羽状	ケズリ		33
12	D-14	V層	深鉢	胴	繊維・砂	堅緻	0段多条RL・LR結節横位回転施文、羽状→ヘラナデ			4
13	D-8	V層	深鉢	胴	繊維・砂	堅緻	0段多条RL・LR結節横位回転施文、羽状	ナデ	22と同一個体か	58
14	D-4	V層	深鉢	胴	繊維・砂	堅緻	0段多条RL横位回転施文			40
15	E-7	V層	深鉢	胴	繊維・砂	堅緻	0段多条LR横位回転施文			55
16	D-6	V層	深鉢	胴	繊維・砂	堅緻	0段多条LR横位回転施文	内面黒色		44
17	D-5	V層	深鉢	胴	繊維・砂	堅緻	0段多条LRL縦位回転施文			43
18	E-5	V層	深鉢	胴	繊維・砂	堅緻	0段多条LR縦位回転施文			50
19	D-5	V層	深鉢	胴	砂・繊維	堅緻	0段多条LRL横位回転施文			42
20	D-5	V層	深鉢	胴	砂・繊維	堅緻	単軸結条体回転施文			27

第24図 遺構外出土土器(3)



番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
1	E-12	V	石 鍬	(14)	(15)	3	0.3	珪質頁岩	No.162
2	D-8	V	石 錐	25	16	5	1.9	珪質頁岩	No.388
3	J-12	I	石 筥	69	39	14	39.3	珪質頁岩	
4	D-3	V	石 筥	(55)	38	12	26.2	珪質頁岩	No.227
5	D-6	V	石 匙	79	16	10	9.2	珪質頁岩	No.323
6	I-13	V	石 匙	(46)	23	8	7.5	珪質頁岩	No.219
7	E-8	V	石 匙	(35)	(20)	(8)	6.0	珪質頁岩	No.398
8	E-5	V	削器・搔器Ⅰ	33	17	4	2.3	珪質頁岩	No.310
9	D-13	V	削器・搔器Ⅱ	36	25	8	6.2	珪質頁岩	No.74
10	D-12	V	削器・搔器Ⅰ	52	26	10	7.8	珪質頁岩	No.169
11	E-12	V	削器・搔器Ⅱ	35	14	4	2.5	玉髓質珪質頁岩	No.162
12	F-12	V	削器・搔器Ⅱ	23	23	7	2.4	珪質頁岩	No.155
13	E-5	V	削器・搔器Ⅰ	43	32	11	15.9	珪質頁岩	No.301
14	E-12	V	削器・搔器Ⅰ	(39)	41	15	22.9	珪質頁岩	No.161

第25図 遺構外出土石器(1)



番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
1	D-8	V	削器・搔器Ⅱ	24	23	3	1.5	珪質頁岩	No.371
2	E-12	V	削器・搔器Ⅱ	(19)	22	6	1.5	珪質頁岩	No.163
3	F-12	V	削器・搔器Ⅰ	22	35	9	6.2	玉髓質珪質頁岩	No.166
4	F-14	Ⅱ	削器・搔器Ⅲ	56	53	15	40.2	珪質頁岩	
5	E-12	V	削器・搔器Ⅲ	32	20	7	2.7	珪質頁岩	No.158
6	E-12	V	削器・搔器Ⅲ	47	27	10	8.3	珪質頁岩	No.154
7	G-11	Ⅲ	削器・搔器Ⅲ	36	40	12	10.1	黒曜石	
8	E-10	V	磨製石斧	(71)	(39)	(12)	51.0	凝灰岩	No.199
9	E-12	V	磨製石斧	94	43	15	77.3	砂岩	

第26図 遺構外出土石器(2)

第3節 石器 (第25図～第28図)

本調査で出土した遺構外の石器類は、剥片石器17点、礫石器10点である。このほかに、礫と礫破砕片及び剥片と破砕片が51点出土している。これらのほとんどは、中坳浮石層直下の第V層面から出土した。グリッド別の出土状況は、同層出土の土器の分布と同じく調査区の南側に集中しており、土器との供伴から、縄文時代前期初頭の石器群として捉えられる。

石器類は、石鏃・石錐・石匙・石筥・搔器及び削器類・石斧・敲石・磨石がある。以下に、形態及び使用痕跡ごとに分けて記述する。

剥片石器

石 鏃 (第25図1)

1点出土した。先端部と基端の一部を欠失しているもので、器厚と両面剥離の状態から無茎の石鏃であったものと判断した。全体形状は三角形であったものと思われる。

石 錐 (第25図2)

1点出土した。鋭角な端部をもつ破砕片を素材としているもので、素材の側縁に錯交する剥離を加え作られている。先端に特に磨滅は見られないが、潰れから石錐として機能したものと判断した。

石 篋 (第25図3・4)

2点出土した。2点とも横長剥片を素材とするもので、形状は短冊形状である。3は主要剥離面側の両側縁に大きな剥離を施した後、背面が調整されている。主要剥離面側の剥離により断面形状が菱形に仕上げられている。4は基端部を欠失している。主要剥離面の一侧縁が僅かに剥離されているが、調整の主体は背面にある。背面の左側縁は階段状の剥離でエッジは潰れている。

石 匙 (第25図5～7)

3点出土した。6と7は器体上半を欠失する。すべて縦型石匙で、両側縁が並行する長方形のもので、先端部は切出しナイフ状に作られている。背面の剥離は丁寧で、器体の右側縁と切り出し状の先端部の剥離は急角度である。この急角度な剥離により、背面の剥離稜が片側に寄っている特徴がある。5は打点側につまみ部を作りだしている。つまみ部分の剥離は体部の剥離と比べ簡易である。素材は、打痕が小さく末端がヒンジフラクチャーの剥片が用いられている

削器・搔器 (第25図8～15・第26図1～7)

上記の定形石器以外の石器で、不定形石器と称され削器及び搔器として機能したと思われるものである。施される剥離調整の状態から次のように分けた。

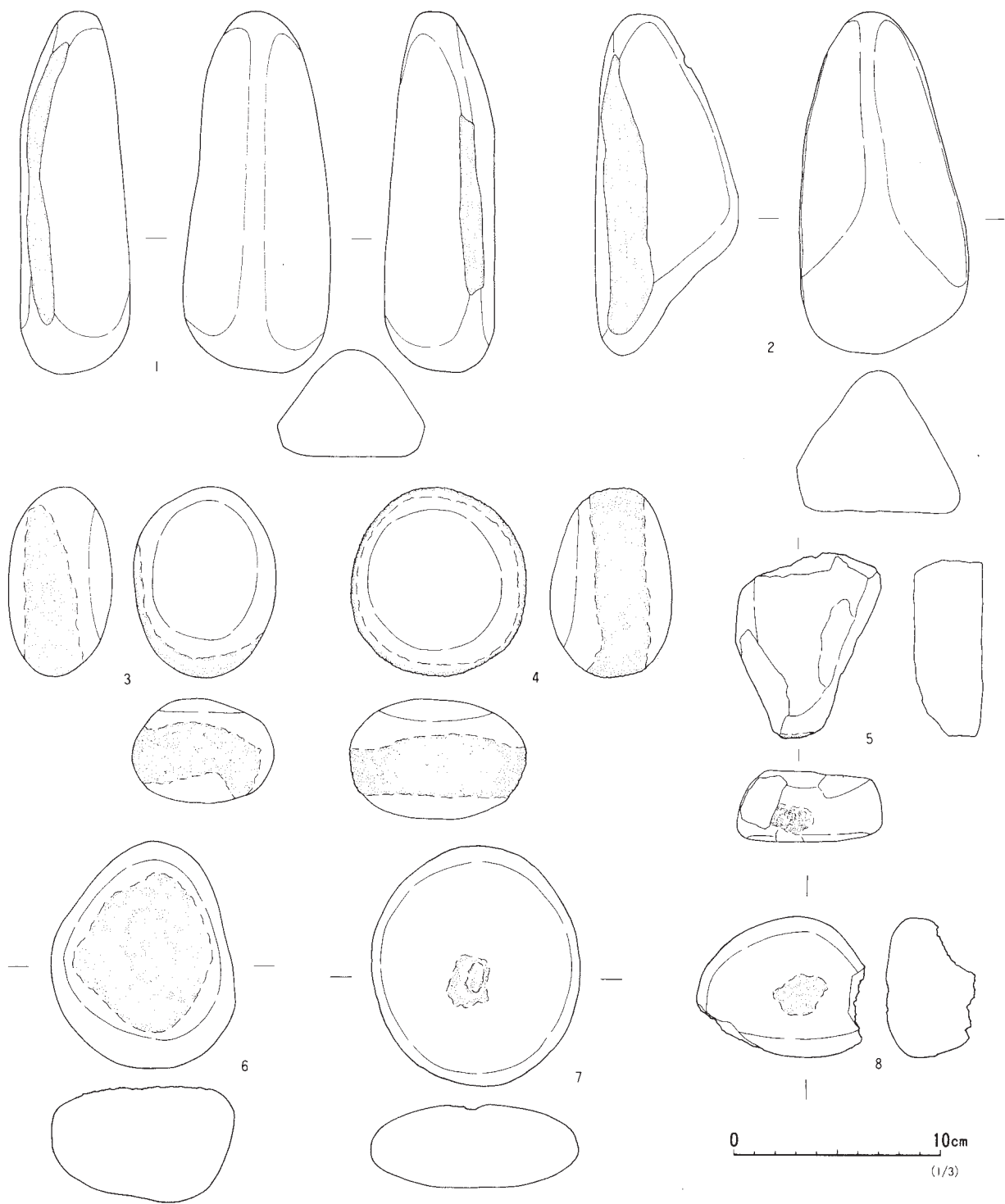
I類 両面の周縁部に剥離調整が施されているもの(第25図8・10・13・14、第26図3)

II類 側縁部に、極浅形剥離が施されているもの(第25図9・11・12、第26図1・2)

III類 側縁および端部に使用による刃こぼれ状の微細剥離が認められるもの(第26図4～7)

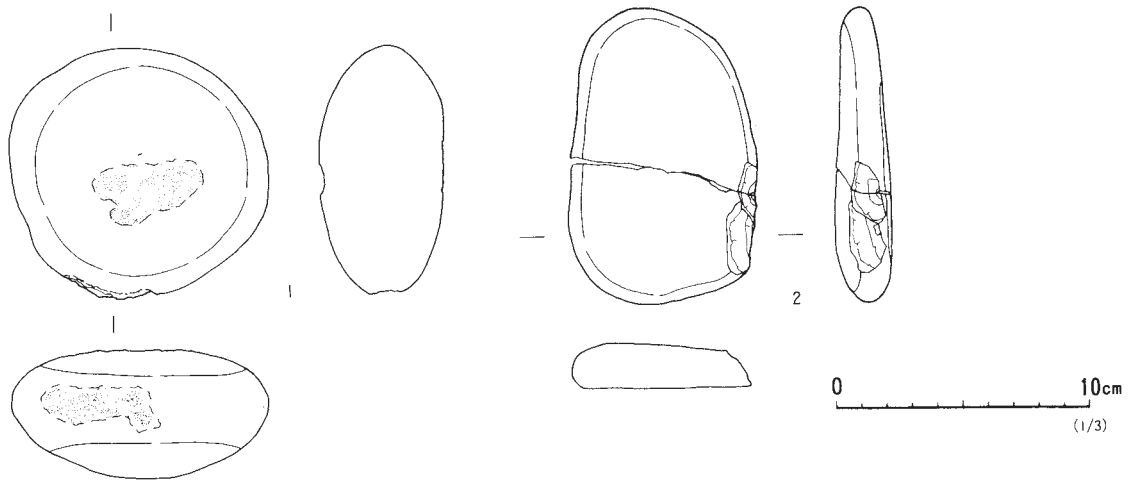
これらの石器は、素材剥片の周縁及び縁辺に不規則で細かな調整加工を施し、刃部作出を目的としているもので、個々の形状は素材剥片に依存する場合が多く、形状を意識して加工されているものは少なく不定形石器として一括されるのもである。

これらの中で第25図8～11は、特異な一群として捉えることができる。薄手の小剥片を素材とし、周縁および側縁と端部に浅い剥離を施すもので、形状は前述の切出し形の石匙に類似する。つまみ部分の作出の有無と簡易な剥離から石匙と区別したが、石匙の形状と機能を意識して素材の選別と加工が行われたものと考えている。同図13についても同じであった可能性がある。同図14は両面調整される石器である。破損品である可能性もあるが、打点側と末端を折り取り形状を台形状に整形している可能性もある。切断面には微細な剥離が見られる。同図15は不整な素材に錯交する剥離を施すもので、末端の状態から折られている可能性がある。第26図3は粗い剥離が両面に見られる、端部の剥離も階段状で楔形石器の可能性もある。第26図4～7は使用剥片である。



番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
1	D-4	V・VI	磨石	175	71	52	895.4	安山岩	No.260
2	E-7	V・VI	磨石	165	80	69	980.3	安山岩	No.349
3	E-7	V・VI	敲石	92	69	50	337.6	頁岩	No.353
4	D-4	V・VI	敲石	91	85	57	555.6	砂岩	No.245
5	D-9	V・I	敲石	(89)	(71)	(35)	223.8	安山岩	No.390
6	D-3	V・VI	磨石	109	89	56	723.0	安山岩	No.228
7	E-9	V・VI	敲石	116	100	40	580.5	安山岩	No.402
8	E-6	V・VI	敲石	(81)	68	(43)	240.9	安山岩	No.312

第27図 遺構外出土石器(3)



番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
1	D-5	V・VI	敲石	100	103	51	581.1	安山岩	No.269
2	D-12	V・VI	礫器	117	74	22	262.1	安山岩	No.73

第28図 遺構外出土石器(4)

磨製石斧(第26図8・9)

2点出土した。8は破損品で表面に敲打の痕跡が残る。周縁の剥離から破損後に再利用されていた可能性がある。同図9は打製石斧である。打割された礫片を素材とし両面周縁に剥離が加えられている。刃部は主要剥離面側に剥離が施され、片刃状の刃部に作られている。

礫石器

礫石器には、円礫などを素材にし、器面に磨りや敲打による痕跡が顕著にみられるものを取りあげた。これらは、単独の使用痕跡をもつもののほか、両方の痕跡をもつものがある。

磨石(第27図1、2、7)

3点出土している。第・図1と2は三角柱状磨石と呼ばれているもので、自然礫の稜の部分が磨面として使われる。1は断面三角の稜のうち2辺が磨面として使われている。使用痕跡は顕著で、平坦に磨滅している。同図2は1辺だけの使用である。使用される礫もやや大型で断面三角形状であるが、平面的には不整形である。同図7は図示できなかったが、自然礫の片方の全面が磨面として使われている。片方の器面のほぼ中央部には敲打による凹を持つ。

敲石(第27図3~8、第28図1)

7点出土している。第・図7は前述のように磨面と敲打の痕跡をもつものである。同図3は楕円形礫の周縁の約半分に敲打の痕跡をもつものである。同図4はやや偏平な円礫の側縁にほぼ全周するように敲打痕がみられる。同図5は偏平な不整形礫の端部を使っているものである。同図6は礫の片側の平坦な器面に浅い敲打の痕跡が広くみられるものである。同図8は破損礫の片側の器面に浅い小規模な敲打痕が残る。第・図1は器面の一部と側縁の一部に浅い敲打痕が残る。

礫器(第28図2)

1点出土した。偏平な楕円形礫の側縁に剥離がみられるもので、整形の剥離か敲打によるものかは不明である。
(小田川)

第4章 まとめ

本遺跡は、埋まり切らない竪穴が多数存在した大規模な遺跡として周知であったが、近年の開発により壊滅的な状態にあった。発掘調査の結果、奈良時代の竪穴住居跡4軒と、竪穴住居跡と時期的にあまり隔たりのない時期と思われる土坑1基、円形周溝1条を検出し、存在した竪穴群が古代のもので、時期的には、後述する土師器から7世紀中葉から8世紀前葉頃のものであることが判明した。

また、第Ⅲ層から縄文時代に比定されと思われる溝状土坑4基と土坑が1基のほか、第Ⅳ層の中掘浮石層の下層面の第Ⅴ層から土坑3基と、土器、石器を合わせ約680点の遺物が出土している。第Ⅴ層面出土の遺物は、縄文時代前期初頭に比定される長七谷地Ⅲ群土器であり、これらの遺構と遺物から、本遺跡が縄文時代と奈良時代の複合遺跡であることも判明した。小区画の調査区であり、僅かな遺物での相違であるが、縄文時代の土器をみると第Ⅲ層出土の土器と第Ⅴ層の長七谷地Ⅲ群土器では、底部形態が明らかに異なり、第Ⅳ層の中掘浮石降下以降に土器形態の変化の画期があったことが窺われる。

遺跡の立地する奥入瀬川の北岸には、百石町根岸(2)遺跡、下田町中野平遺跡、向山遺跡などの本遺跡とほぼ同時期の集落跡が多数存在する。本調査で検出した4軒の竪穴住居跡の特徴は、規模的にはほぼ同一であり、カマドはすべて北向きに構築されている。4軒のうち3軒は火災に遭っているほか、堆積土内に2種類の火山灰を介在させているなど、百石町根岸(2)遺跡や中野平遺跡などと共通する点が多く、今後同流域内の集落の在り方を考える上でも良好な資料となる。

以下に、各竪穴住居跡出土の土師器と他遺跡出土の土師器を比較し、年代的な考察を行う。

出土土師器について

4軒の竪穴住居跡のうち、第1号竪穴住居跡から第3号竪穴住居跡までは、床面から多くの土師器が出土しており、火災で廃棄された一括遺物として良好な資料となる。一方、第4号竪穴住居跡は、火災住居ではなく、遺物も甕の底部破片1点のみの出土であることから、ここでは、第4号竪穴住居跡の遺物を除く第1号から第3号竪穴住居跡出土の土師器について述べる。なお、第4号竪穴住居跡出土土師器は、調整技法からそれらに後続する時期のものと考えている。

分類

出土土師器は、器種的に坏・甕・甑の3種類に分けられる。以下に各器種ごとに分け、器形と器面調整の違いから細分し、他遺跡出土の土師器との相違点で検討していく。

<坏>

器形(全体形について)

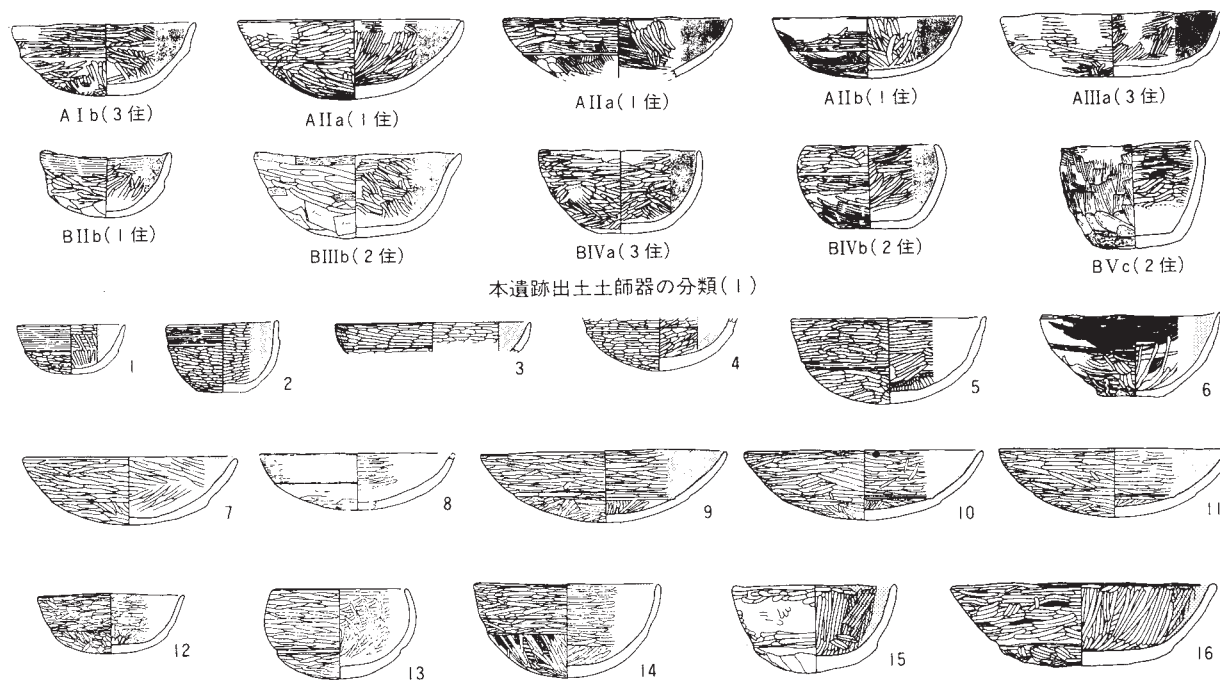
A群—皿形(口径に対し、器高がおよそ1/3以下のもの)

B群—椀形(口径に対し、器高がおよそ1/3以上のもの)

(口縁部、底面の形状及び段と稜の有無について)

I類—口縁部は外傾し、丸底で、内外面に段と稜をもつもの。

II類—口縁部は外傾し、丸底で、外面に段と稜をもつもの。



本遺跡出土土師器の分類(1)

※参考資料① (1~4中野平遺跡、5・6小田内沼(1)遺跡、7・8湯浅屋新田遺跡(2)、10~14田面木平遺跡(1)、15・16向山(4)遺跡)

※縮尺不同

第29図 土師器の集成(1)

Ⅲ類—口縁部は外傾し、丸底風の平底で、段と稜はないもの。

Ⅳ類—口縁部は内湾し、丸底風の平底で、外面に段と稜をもつもの。

Ⅴ類—口縁部は内湾し、丸底風の平底で、段と稜はないもの。

器面調整 (黒色処理を含む)

a 類—内外面ともミガキ調整で内面黒色処理をしているもの。

b 類—外面ミガキとその他の調整、内面ミガキ調整で、内面黒色処理をしているもの。

c 類—内外面ともミガキとその他の調整で、内面黒色処理をしていないもの。

< 甕 >

器形 (全体形について)

A群—胴部が長胴なもの

B群—胴部が球胴なもの

(大きさについて)

Ⅰ類—大型甕で器高が27cm以上、胴最大径がほぼ中央にあり、スマートなもの。

Ⅱ類—大型甕で器高が27cm以上、胴最大径が肩部よりにあり、ズングリしたもの。

Ⅲ類—大型甕で器高が27cm以上、胴最大径が胴部下半にあり、下ぶくれなもの。

Ⅳ類—中型甕で器高が18cmより大きく27cm未満、胴最大径が肩部よりにあるもの。

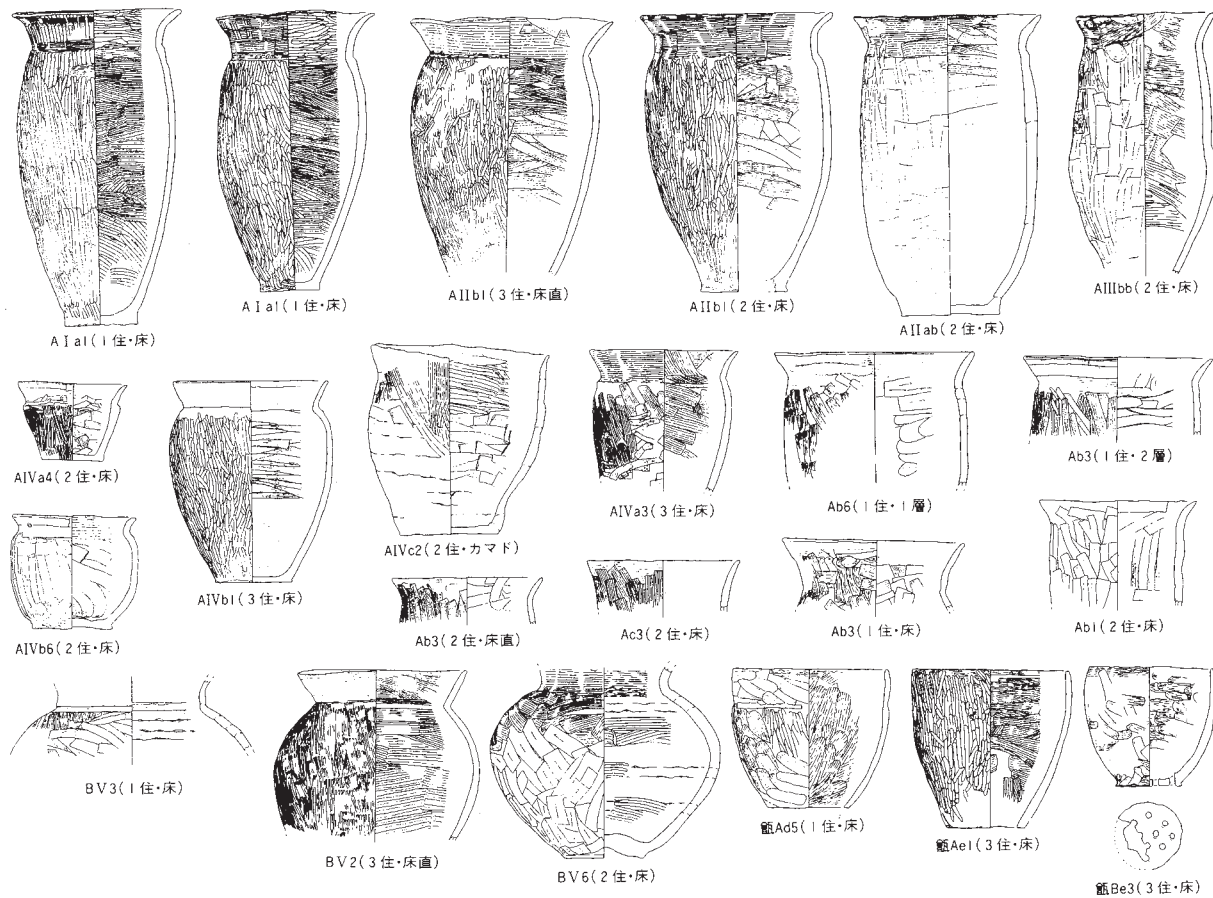
Ⅴ類—中型甕で器高が18cmより大きく27cm未満、胴最大径がほぼ中央にあるもの。

Ⅵ類—小型甕で器高が18cm以下、胴最大径が肩部よりにあるもの。

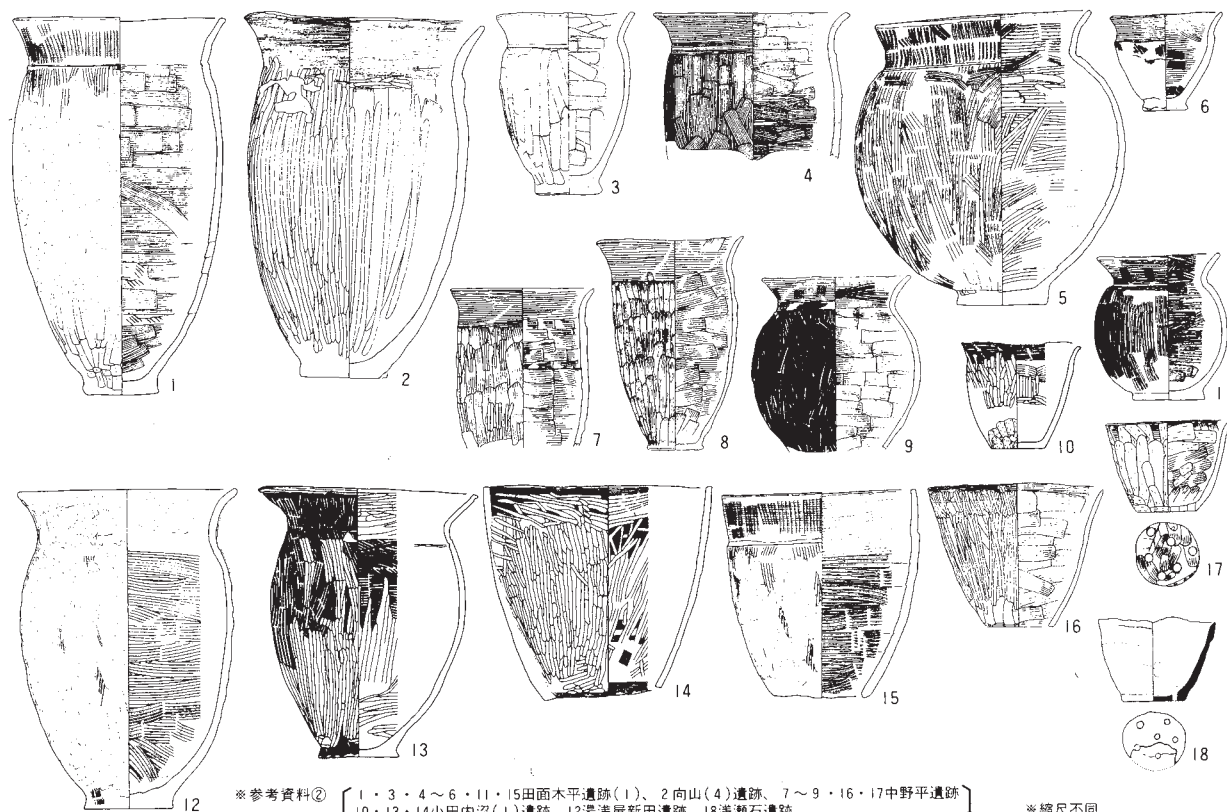
(口縁部の形状及び段と稜の有無について)

a 類—口縁部は外反し、段と稜が明確なもの。

b 類—口縁部は外反し、段と稜が不明確なもの。



本遺跡出土土師器の分類(2)



※参考資料② [1・3・4~6・11・15田面水平遺跡(1)、2向山(4)遺跡、7~9・16・17中野平遺跡]
 [10・12・14小田内沼(1)遺跡、12湯浅屋新田遺跡、18浅瀬石遺跡]

※縮尺不同

第30図 土師器の集成(2)

c類一口縁部は外傾し、段と稜が不明確なもの。

d類一口縁部は直立ないしは内湾し、段と稜が明確なもの。

e類一口縁部は直立ないしは内湾し、段と稜が不明確なもの。

器面調整（外面のみ）

1—ミガキ中心の調整。

2—ハケメ中心の調整。

3—ナデ中心の調整。

4—ミガキとハケメが中心の調整。

5—ミガキとナデが中心の調整。

6—ナデとケズリが中心の調整。

<甗>

甗については、底面の違いをもとに分類した。なお、口縁部の形状及び段と稜の有無、器面調整については甗の分類に従うこととした。

A群—無底式

B群—多孔式

分類結果をまとめると、坏は、A群が5点、B群が5点と半々である。ただ、各住居跡ごとの個数で見ると、2号住居には、B群のみが3個体と偏りがある。3個体の中には、唯一内面黒色処理が施されないBVcが含まれている。他遺跡の同時期と思われる参考資料と比較すると、A群については、さほど大差は見られないが、調整で、ミガキ以外を外面に施す例が本遺跡に多く見られる。B群については、外傾する器形についての例は多く見られるが、内湾するものとなると、田面木平遺跡（参考①—13）や例を提示してないが根城跡東構（八戸市教委1983）に何点か見られる程度である。

甗は、A群が17点と圧倒的に多く、B群は3点のみの出土であった。各住居跡ごとの個数割合をみると、B群がそれぞれに1個体ずつ含まれ、バランスはよい。大型な甗を器形的にみると、AⅠ群は第1号竪穴住居跡に、AⅡ群は第3号竪穴住居跡に、AⅢ群は第2号竪穴住居跡に含まれることが分かる。大型甗の調整をみると、AⅠとAⅡ群には、ミガキ中心の調整が、AⅢ群には、ナデとケズリ中心の調整が施されている。参考資料と比較すると、AⅠ、AⅡとAⅣ群は、田面木平遺跡（参考②—1）、向山遺跡（4）（参考②—2）、湯浅屋新田遺跡（参考②—12）、小田内沼遺跡（参考②—13）のものと器形及び調整で類似している。ただ、AⅠ群の2個体が、若干他の遺跡のものよりもスマートなつくりをしている点が、本遺跡の特徴とも言えよう。また、AⅥ群の小型甗については、類似する資料が少なく、わずかな類似点があるものとして、田面木平遺跡（参考②—6）、小田内沼遺跡（参考②—10）のものを取り上げた。B群では、BV2が、調整的に田面木平遺跡（参考②—5・11）、中野平遺跡（参考②—9）のものに類似しており、外面縦方向のハケメ調整が施されている。

甗は、A群が2点、B群が1点のみの出土であった。出土住居跡ごとに見ると、第1号竪穴住居跡にA群1点、第3号竪穴住居跡にA・B群がそれぞれ1点ずつ床面から出土している。器形は、いずれの甗も口縁部が直立するものであり、参考資料との比較で一番近い器形のは、田面木平遺跡（参考②—15）出土のものである。多孔式は、県内での出土例は少なく、中野平遺跡（参考②—17）、浅瀬石遺跡（参考②—18）、向山遺跡（4）（参考なし※遺構外から底部のみ、穿孔数は不明）が主な遺跡であるが、いずれも穿孔が6個程度であり、本遺跡出土のもの（穿孔10～12）よりは少ない。

年代

本遺跡出土の土師器は、ロクロを使用しているものは見られず、大杵で編年するのであれば、桜井

清彦氏の第Ⅰ形式（桜井：1958）に相当するものである。宇部則保氏の編年（宇部：1989）によると、第Ⅱ群に相当するものがほとんどを占める。宇部氏編年の第Ⅱ群土器年代観は、7世紀後葉から8世紀前葉となっている。また、その後の調査により、第Ⅱ群（田面木平遺跡の土師器）は、7世紀中葉から後半と訂正がなされている（宇部：酒美平遺跡報告書1997）。それらのことを踏まえ、本遺跡出土土師器の大半は、7世紀中葉から8世紀前葉の範疇に含まれる可能性は十分であるといえる。なお、須恵器の出土は1点もなく、須恵器の年代観と合わせ見ることはできない。

また、前述した分類の結果からも分かるように、第2号竪穴住居跡は、他の住居跡と若干の時期差があるようで、その点を参考資料に合わせて述べたい。坏は全て椀形で内湾するものが多いことから、宇部氏編年の第Ⅲ群（8世紀中葉）に含まれるものと考えられる。ただ、外面に段や稜をもつもの（BIV b、参考①—12～14：田面木平遺跡、参考①—15：向山遺跡）や、内面黒色処理していないもの（BV c）も出土していることも考えると、第Ⅲ群の前後も含まれる可能性はある。甕についてもミガキ調整が少なく、ナデとケズリ中心の調整を施すものが多くなることから、第Ⅲ群ないしは第Ⅳ群（8世紀後葉～末葉）のものも含まれる可能性はある。

甕については、第1号竪穴住居跡出土の甕（Ad 5）は、頸部付近に段をもち、田面木平遺跡（参考②—15）出土甕との類似点も多く、これは、第Ⅱ群に含めても問題ないと思われる。一方、第3号竪穴住居跡からは、無底式と多孔式の2種類の甕が、いずれも床面から出土した。中野平遺跡（参考②—17）、浅瀬石遺跡（参考②—18）からは、多孔式の甕が出土しているが、中野平遺跡では、報告書の分類（青森県教委1991）でこれを3群土器として扱っている。また、3群土器の実年代を9世紀前半と想定しており、これに合わせると、第3号竪穴住居跡に共伴したと考えられる甕2個体も同時期ということになる。ただ、多孔式の甕を比較すると、明らかに器面調整や穿孔に違いが見られるし、無底式の甕も段が無いとはいえ、ミガキ中心の調整などから、もっと古い時期のもの（8世紀代）、ということが言えよう。

以上のことをまとめると、本遺跡出土土師器の年代観は、竪穴住居跡によって時期差は生じるものの、7世紀中葉から8世紀前葉のものが中心であり、新しいものでも8世紀末までに収まるものと想定される。なお、甕については、現段階での資料が少なく実年代を推定できかねるが、多孔式も含めて8世紀代のものとしておきたい。甕は、今後の好資料発掘が待たれるところである。（新山）